羣書一覽 四

イ 加2
136
4

群書一覧巻之四

撰集類

萬葉集　二十巻

普通の説に云四十六代孝謙天皇の御宇左大臣橘諸兄勅を奉じて撰す書いまだ成ずして薨ぜしかれバ其後五十一代平城天皇の御宇撰集成しこれを献す今ハ此集中多く諸兄薨ぜしよりハの歌を載す右大辨家持のくハへられしよし○契沖の説に曰此集の撰者ならびに時代の昔より説々多く一定せずされども一同に勅撰にハ定めかたし今此集の前後を見ていふときこれはありしに中納言大伴家持卿若年より古記類聚歌林家々の集までも残らずこれをあつく撰びよりしる外昔今の歌を見きくにしたがひてとらへてやしまことにこれハ記しあつめし天平

ム平城ハ奈良ノ帝七朝ヲ指ス
コノ集ハ七代ノ中ニ成シ
トカキテナニヤ
トヨミセタリ可思
平城ハ桓武ノ
平代
平城ハ桓武
ツキニメ即大同
帝ノ流ナレ

宝字三年までありしうた其外くさぐさのうたを部類もなくし
のこされぬを草案(サウアン)ありしを世につたへけるとぞ○古今集雑下
に貞観御時万葉集はいつばかりつくれるぞと問はせたまひければ
よみてたてまつりける 文屋ありすゑ
神な月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ
又同じ集の序にいはく いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よ
りぞひろまりにける 同真名序にいはく 昔平城天子詔侍臣令
撰万葉集云々 按ずるにならの帝といひしは元明天皇の和銅三年
に藤原のみやこよりうつしはじめられしより都となりてかれ
ぞこのかた光仁天皇の時代までの御代をならとはいひしなれ
とやせしにあらざれば此万葉集の編集なりしも平城天皇よ
り少し前の御代にて其撰者家持卿の平城天皇の延暦四年
に薨ぜられしなれば ともかくも平城と考ふべし 真名序に平城天子
といへるも大同帝の御事なるべしといへれど證は新續古今集の真名序

に平城天子詔侍臣撰万葉集已来(ヨリコノカタ)集ハ更(ヲ)二十祀(ヨトセ)逾(コエタリ)六百(ヲ)とあれど
大同年中より新續古今集の成りし永享年中までに勅撰の集二
十部成(ブナリ)て六百年を逾(コエ)たりとあればいはゆる平城天子
とあるはならの時代の大同帝なること決(ケツ)せり○今案ず
るに年山紀聞に万葉集は勅撰なりといへる説もありて云ふ 西山公
の釈万葉集にいへらくひとつ定まれる説もなく勅撰の
ならで勅撰の體(テイ)にはあらず 大伴家持私(ワタクシ)にあつめしその
まゝに撰(セン)遺(ドウ)の山しく論じたまひしを契沖考(カンガ)へられて
かの集中全国の歌凡四千八百首をあつめて書(カキ)とゞめたるの部
川よりのいつも此のいつもしきやせるせし時しげめやも
第才四巻と第十巻とをあつめ
とものしろ神つ代のうたえりうきたる世よりそむかれは
此巻も第四巻そのせく又第十一巻をもあつめ
さすがにしよりつけのりし后の○のきて中ごとに月ころつくり

此ことハ九巻と第十巻とにのせられたり。かやうの類なりけれバ撰集ともおぼえず。撰者のおぼえたるまゝに一集の中にかさねて出る歌もあり。唯一二首のみならず此説のごとく万葉にも勅撰にて諸兄公以下従ってこの丈夫らのえらびしにたまへりしかバ十首前は八巻と重複ありて四十八首までの歌さらへいふべし。さればこれハ家持ついで定むる事ありしかバ其書のせとりしかくいふならんとぞなるべし。又古今集雑下に貞観御時万葉集ハいつばかり作れるぞと問はせたまひければよみてたてまつりける。今按ずるに万葉集中に見る年号天平宝字より清和天皇貞観の初めまでハおほよそ百年にのぼりて此集のことさへおぼつかなく思すべき有季に勅問ありしなれバ勅撰なりしならめども諸兄公以下奉勅の集ならましかバ舍人親王の日本紀などにおなじからず顕然たる大典なるべし。又古今の詞書ハ有季が家集よりとりいれてしるしのせしかとも見えずいづれか信ずべき

勅問の序詞も私撰のものにはあるまじき事なれバ此事おぼつかなし。き勅撰のものとおぼしめさばいづれの御代のとたづねさせ給ふべうかゞふべきに其やうの事なきは此有季がかしこくもさるのたまひのぞのせたるによりてハ奈良の御時勅撰なりと或ハ奈良ハ奈良のみかどの時代の私撰のものなりと義々なるがゆゑに其おぼつかなし。奈良ハ七代おこしませし都なれバ此とも其名をいふまじくいづれの御代とさだめ此勅答此序のやうなれど又おぼつかなし。或ハ平城の帝とも定めがたき。平城の大同元年より貞観元年までハよめる五十四年になる故勅撰ならばましばかりまでおぼつかなくハ侍らじとぞ。○此集歌数総計ハおほよそ四千三百十五首長歌二百五十首此内なり。但萬葉有両説。奥五十首或ハ袋草子におよそ四千三百十首此内長歌二百五十九首。但本ゝ不同難用定数云々。○此集號万葉と名づけたるハ仙覚曰よろづのことの葉の義なり。季吟曰万葉集ハよろづ世に伝へる集といふことなるべし。萬葉といふ字ハ文選顔延年が三月三日曲水詩序

小招世貽統固萬葉としるせし萬葉は代也養老令詔無万葉
といへり義解に云毛萇詩傳曰葉世也契沖曰萬ハ十千なり和
語にハよろづといふ今ハかずしれず十千しるさまにいへず数乃
多きこと也史記魏世家ニ曰萬満也左傳ニ曰萬ハ盈数也葉歌ハ
義也釋名ニ白人聲ヲ曰歌ト歌ハ柯也如シ草木有ニ柯葉一也といへり此
うたおほく名ある人のよみしを撰集に金葉集玉葉集集南翁に
新葉集など名づけしも此集の名を取りたるにやしらせしれ
ぬまでし〇此集古点新点あり　天暦のみかどの御時廣幡の女
御のすゝめによりて仰せたまひしより源順　大中臣能宣　清原元輔
坂上望城　紀時文これら梨壺の五人に此集をよみときしめ　昭陽舎
梨壺におかせて万葉集に和点をつけしめたまふこれを古点といへ
り其後法成寺関白道長公　上東門院にまゐりしたまひて漢字の
外に假名をつけ分てしめたまふこれは藤原の通俊の子其外に
大江佐国藤原孝言権中納言匡房源国信源師頼藤原基俊

等をめして点をくはへられけり次点といへり又権律師仙覚点を加
くはへられ新点といへり此新点をば僧仙覚律師字に付て献上する奏
状あり此状天聴に達すよつて叡感ありて万葉得業のよ
院宣を下したまへり此すゑ八田林と、これを見るにありて仙覚が傳
へうけたる所の新点の本は正二位前大納言征夷大将軍（頼経卿光明峯寺殿息）
御本　松殿入道殿下（基房公）御本　師中納言伊房卿自筆本　光明峯寺前摂政左
大臣家（道家公九条殿良経息）御本　鎌倉右大臣家（実朝公）御本　六條修
理大夫経盛（刑部卿忠盛息）本（彼本者以六條修理大夫自筆本）左京大夫顕輔
（正三位修理大夫顕季孫）なり　右大弁光俊入道真観（按察使中納言光親息）なり　已上の
本を以て校合せしめ古点次点ハ墨を以て点じ新点ハ朱を以て
点じ〇契沖曰此集は部類なけれど五種とすべし一つハ雑歌なくの
勅撰の雑の部に同じ二つハ相聞これ贈答してたがひの
思ひを述る部なりけり十三巻七も男女の情のつく其外ハ君臣
父子兄弟朋友のなさけも述たり三つハ挽歌これハ死を哀傷せし挽ま

玉篇に引也與輓同しとあるハもろこしに葬送の時紼を執て
薤露蒿里の歌をうたひて轜車を挽ゆへにかくいへるに准して哀傷
のうたを挽歌とハいへり四つハ譬喩これハあるものにたとへていへるうた
をすべて五つハ四季のうた○此集の歌ハ万葉がなを用ゆるに
正訓義訓とあり正訓ハ花をはな月をつきとよむがごとし義訓ハ
春草をわかくさとよみ金山をあきやまとよみ冬風をふゆ
しとよみ向南をきたやまとよむたぐひにしてかくのごとくのやうし 日本紀の
かきかたにも千変萬化神代のことばくさぐさにて
義訓あまたあるこれをよむに○此集の真字を以
て假字に用ゆるに日本紀ハやすらかに音をとりて用ひたれど
き文字などにもあつかひて音も呉漢にかかはらず○此二十一字の歌ハ
三十一字を真のごとく真字にまじへて書たれば此集のうたハよみ
がたき文字ハまたひとつに音訓相まじへて用ひたり音に多く呉音を用ひ
て漢音ハまれなり和訓をもちひたるは無窮のことなり

んとつくるを 八十一 十六 左右 三 二五 喚雞 馬声 蜂音
青頭雞 などいひねもじず○又ハ假字ばかりにてかけるものもあり
を吉野尓在と書てよしのなるとよむハ尓阿及奈なる故なり雪
瀰しきりてゆきはじよむ幾轗切氣なる故なり○又古今集よ
りなかごろまでハかりがねなどにもあれども一首もたらずとするハ此集にハ
いはれもなしあるものも長歌ハ旋頭歌ともにましぬるし此集の内
中も聖武天皇の御宇の比よりのものハりたけたりやうもしぬるに
あるべき句体によるなし○此集歌の体のことは賀茂真淵が歌
意考にいふ万葉集ハいにしへのうたの体ことの歌といふ
し凡通ざさまに此世のありさまもかはりていづれもおほよそ此様を
いにしへにハ従ずたゞまづるよつけくらきよさをの故に言にいでゝ
うたもいとなをすれるも人の本の心づのおほくハ勝れて末のし
ことにあれどかきこし物あしてたゞれたる時をのしえたる人の心
それにてハこのひとしきものとすゑにハよしえるもしく味ひよろしの

なまめかしけるハ中より抜き出し或ハ未だおもてしりの方へつとひぢて
ひつくりかへりしもやぶれもせしもなしつらもかけあまたくろ
きのすゑれさる所も見えもしてぞはの世になかでものかきさびつかれん云〻○合
の抄本毎巻の首に目録を挙第一巻の末に仙覚の奥書を載第二十
巻の末に文永三年丙寅八月廿三日権律師仙覚の奥書 次に安嘉門
院印の歌 次に文和二年癸巳中秋八月二十五日 権少僧都成俊の
奥書あり 寛永六年三月上木す 外に活板一本あり○仙覚律師奥
書の趣ハ寛元々年鎌倉の将軍頼経源親行に命じて写さしめ
らる 其外にこれの證本を以て書すと二条家の本なと以て校
合すといへり

萬葉集抄　二十巻　仙覚律師

一名萬葉集註釈 一名仙覚抄 巻首に採者時代等の事を論
本文の点の中に古点の謬を論し新点をつけたり 巻末の奥
書に寛永刊本の巻尾に在せしものし ○此仙覚の時代ハ備國の風

土記いまだしらずしもこびすごして此抄中に多く其世に傳へしず
風土記とも所引用ありたり

詞林采葉　写本　十巻　五本　束門由阿

古抄ハ片よれてあけはねのなかハひりあれし万葉集乃中の名不ばならず
故に考難解を巻末に此集書様時代採者 點和等の事とあり
○此集四種書様あり一ハ真名假名 二ハ正字 三ハ假字 四ハ
義讀これを開きて七種とす 中に初く真名假名ハ古語を勘
ふるにあきしらかなり博士とす 次に正字に初く通正字あり 別正字あり
通正字とハ雪 月 花 春霞 秋風等なり 別正字とハ霍公鳥 郭公
茅子 萩 黄葉 紅葉なり 次に假字に初く全假字あり半假字あり
全假字とハ川津 蝦 日倉足 蜩 垣津旗 杜若 等なり 半假字とハ
乳鳥 千鳥 秋津羽 蜻蛉羽 打背貝 空背貝なり 義讀に初く全義讀
あり半義讀あり 全義讀とハ春鳥 鶯 三五夜 望月 水鳥 鵜 丸雪
霰 小沼 池 東細帯 横雲 留鳥 網 不行 淀 風流 由 日月 程 火氣 烟

多集 無用徒 潔身 入風 恋水 左右 磯廻 求食 喚雛、
羊八十一 追馬喚犬 馬声蜂音石花 半義讀とハ 金風ぞ
白風 商風 若月 鴨頭草 若兒 樂々浪 神樂浪 朝鳥
細竹 風流士 喚犬追馬鏡 暮三伏一向夜 かくれたるき七種のか
きやうひろく一部よりふかしめられ〇く古来ききつけのしるし〇奥書
ここ去ぬる貞治四年秋しは二条関白殿下冷泉相公よ作く条洛可仕し由
作下さるるよ依く今の五月中旬よ及へ今上洛於執柄家万葉集一部
令読進之其次詞林采葉集由阿抄出これ於上洗し備へなりしよ則ち是
て御なれ万葉よ副られけぬ仍く此草已よ私の抄をよ給しす就中第十
五巻よ至てハ冷泉二條の両流の差異これ抄たす豈人鷃の眼於以て
大鵬の翅をみるべけんや知るよ大陽の光ハ管見これ於知る迅雷の響
ハ愚蒙これ於驚かさるのみ因茲或ハ古集の文理よつきく或ハ先哲の旧
記よ任せく採擇せしむるところしあれども此おほえ門偏執の族これく
ハこれおゆるさずし十返く雑役といふすづきなし深く篋底におさ

め閣の外よ出すことなかれ　貞治元年壬十一月十五日　榆柳営邊
藤澤山隠士桑門由阿　春秋七十七

萬葉集宗祇抄　写本　五巻
巻のはじめよ萬葉集注抄書とあつせり仙覚由阿等の説抄書
しるしあるし是尾より借用はなきまでおしもちいられぬ彼なまく
の巻ハ五の外たやすくこれらしるすも作しぬなし愚案抽きし中ころ
此ゑかね作しぬ予ね多作り難ぬ太方そてまりあらし侍もあやまちし惠之
まろ以僧宗祇な誂奉謹さし書くしぬ積着於不許出閫而已

萬葉集管見　写本　二巻
作者つまびらかならず考ふるみるふ第一巻より第四巻よ至る蓋闕なし

萬葉集見安　二巻
一名萬葉集難義一名萬葉集秘訣作者つまびらかならず此集の
中の解しがたき詞どもをあげてあかせるを注せり

萬葉拾穗抄　三十巻　北村季吟

一巻二巻三巻四巻各上下 五巻六巻各全 七巻八巻各上下 九巻全 十巻十一巻
十二巻各上下 十三巻十四巻十五巻十六巻十七巻十八巻十九巻各全 二十巻上下
已上共に二十巻なり 惣て巻首に欽哉のよし 時代のこと 撰者のこと 歌
主のこと 古点新点のこと 諸本のこと 書様のこと 此集古人用捨のこと 其
餘半○此書の趣意ハ季吟曰先師逍遥軒貞徳ハ玄旨法印
にしたがひて八旬餘年ちかくに万葉集の注解をうけさし
かく諸本をあつめ諸説をしらめて吟読せしめに学者に講習
のいとまにこゝろをひそめ彼御堂殿の上東門院へまいらせられし古本
の万葉集をも見あはせしを見るにはけしいでいまだ見えざず
せしに敦隆の類聚萬葉はわかれ此書万葉のうた仮名書にて
真名はまじへず書くだしたり 童蒙初学ハこのうたを仮名にて
く八全部二十巻なれば書きしかれど眼病たへがたくて今ハ
こゝろざしはたさず 此筆受をばおのれちかんろのついで諸
説を勘へて注解をもすべしとて書かれしをもとめ

八二年ぞかれほどに第一第二の巻ぞできあがりしかれど猶まるすずし
して身まかりぬかれ草案のさまなる胸臆にのこれりしもこすま
前のことなれど忘却のことのくなじかれ先師の遺言をむなしくせじと
ぞうりに禿筆をとりつゞりし仙覚由阿が注の中に故実によりがたき
かゝるよらしずといへども亦これしが此すてゝ八代の旨趣のまく
つきはかしきなれどもあまて先師もこれを捨ず宗祇のおもとく五
巻作られし義を祖述し又万葉難義一名万葉見安といふものにより
詞の注こまやかなるを採ひ用ひられつりし此さびもひとつとろの
解によなししひく他をもあはせうしたへり仮名にて真名をかき
もしましまうへにいまひハ類聚万葉の和訓を用ひかき範兼の童
蒙抄清輔の奥儀抄顕昭の袖中抄八雲御抄詞林良材集等の中
にも此集の注義ある分をとり用ひられ和点をもすこへおほしく
られたるしきによてさかづりろの外日本紀続日本紀類聚國史和名
類聚抄等も此集のためになるべきをおほむね勘へあつめく万葉拾

穂抄と名づけ侍りしを今世に用ゆるものは八代集が中
絶もなく妙寿院の校正したまへるなりや歌の前書作者のかき
やう訓点等まで蒼敏夫の手になりて学者の益多く見えはべる
まへりけれども猶あやまり侍りし○今案ずるに陽明院殿の
上東門院へまいらせられし假名の万葉集は八代集の奥書によりてしらる
成寺入道殿下為令献上東門院仰藤原家経朝臣被書写万葉集之
時假名歌別令書之畢尓来普天移之云々此なのるを以て○此書巻
首に元禄二年臘月経筵侍講弘文院學士林鸞懲序 貞享丁卯
九月長春院法印武静信處の序あり巻尾に貞享五年冷泉家の
跋あり拾穂八季吟の別号なり

萬葉代匠記 写本 二十二巻 契沖阿闍梨

本書二十巻總釋二巻共に二十二巻とす 西山公萬葉集の世に
善注なくして其詞義甚明らかならざるを惜ませたまひて
はじめ雅は(?)の隠士下河辺長流に仰せられしがおほくは

きよし然るに筆紙なれども長流これを辞しけるまま
精しきもおこなひなくなめらかならずといへるかやうの人とり
なるく事ゆえに身まかりければ契沖の長流と共に撰ぶべき
るまゝせまほしく長流が黙さずりし万葉の抄を契沖に作
らせたまひて是を撰せられども千有余年に盛挙成
よろこびたまふの長流が志をしたがへて遂に著ものは
えらびし此今案なくさしつく遂に代匠記二十巻總釋二巻成りしとぞ
てさしげなる小閑巻第一首雄略帝の大御製に籠の字の訓なきを
ずして昔よりたゞことのはに読まれしを契沖はじめて加太麻と
訓じて神代紀の無目堅間を證とせしなれども西山公の卓見を
なよろこばせたまひしは此の素意にかなへるなりと奇し
まかせたまひし白金一千両絹三十匹を給ひたまひし
みぎは契沖がいふ序にも見えて今案ずるに契沖の人今井似
閑がかいしるす所の代匠記の自序によりしも 西山公の私

歌によみてより和書にいたるまでおほしめしたちて万葉集の新註を
ひらかせたまはんとおぼしけるが人のいたはりにやまうでたまはずなりてけれはせ
たまひけるやほどなく万葉代匠記草稿二十巻を編集してたまふ
たまふ今書写すべきところもなしされども公の御らんにいれまゐらせし
かれぞ世にいひつたへるかのもとにおもてにしたまつりしかど紀中に
何謬作文字脱字此点謬如此点しよへしと傍記したまひてあまたすく
なかりしずらかはまうく官庫の御本中院家本飛鳥井家の本阿野家
の本紀州の本幽齋本水戸校本等の秘書をあつめたまひて彼此校讎
をくはへてこゝろあらためしたまふべきよし此作にいひつけて此秘本
どもをもてふたゝび代匠記六十巻にいたるまで注釈をくはへたてまつり
しめたまふ公のこの説の玄妙なることは此ところせたまひければこゝろ
にあぐしたまふこと所々清撰の草案に残りおほくありつてぞ
ますくなからずしていつく身まかりければまでも代匠に餘力をかりん
ことを思ひて考へをまとめたまふことすゝめて清撰の代匠ハ西山に

のこしたまふ世に伝へつくしたまふ此名の序のはしにくはしくいへり此上臣序中に
つまびらかなり○總釋二巻これハ此集の部類をまとめて文字
小心訓義訓にいたるまでくはしくしるしたり其餘此集をよむにありがたき
れいをあげてしめしたまへり

萬葉集童蒙抄 写本 八十巻 荷田春満

此集古人註釈の可否を辨じてみづからの了案をくはへて一すぢに見る
蒙にさとしたまひけるに後へたやすくさとりがたくはなれども杜の中にも
の詞のさとりがたきをくはしくなほせりて毎巻東縁信書写の奥
書にいはく○此公羽のほとりは荷田とて倉に氏斎宮と林崇契沖の考に
国学の学にてはるかに賀茂真淵へつたへて著述の書にいたる
にいたるまで大やけに焼失して今なほすくなし此童蒙抄伊勢
物語童子問等と按ずる揚千蔭が万葉集略解に東方の
まし万葉集の古本として考證の一にあてゝ

萬葉集考 第一第二別記 二巻 賀茂真淵

同　第三第四第五第六　写本　四巻

此集第一第二の巻外に別記二巻一本刊行す第三巻より第六巻
まで八写本にて伝はれり〇此考は八いにしへより伝はれる本の巻
の次序みだれたるを考へて次第をたてゝあり〇考には此集今の
二十巻あれど実は一二乃巻と今の十三十一十二十四の巻とが本の三
四五六の巻にて此六の巻は万葉集にもれて後に加へられしもの
とす〇又二巻は此体古きふりにしありて奈良の代になり千年ほどの
次もいとふるくみゆ故に除きて考へて今はかくなむ次第すべし左の如し
一二 今の同じ　三 今の十三　四五 今の十一十二　六 今の十四　これまでを万葉集とす
七 今の十　八 今の七　九 今の五　十 今の九十一 今の十五　十二 今の八　十三 今の四
十四 今の三　十五 今の六　十六 今の同じ　十七同　十八同　十九同　二十同
右の七より下は家々の歌集にて万葉にはあらず此は委しく別記に
見えたり〇又古本新本とありて仙覚が考へ合せし時まではなど
かゝる名ありし其中に今は又板に彫りて字ごとに彫く出したる

のこれる荷田大人春満ぬし月よりあつめいさゝか古き此書をみんとて
はげみつくされもはらしかど今此本はやうやう伝はりつれど
あやしきに朱もて其誤をなほしかきしは助けとも見えし其本の考へ
よりは八今はこゝにすなはち古本より出しは八の早き時あらん
字ごとに彫て出しをし又奈良の若宮の神主がもたる古葉類要
集といふ集此中よく似たれどもなかなかのさだめがたかれとある所も
古本の中に又川此外のしるしは書ぬき出て後に加へたるもの
一本の中に入つ
〇別記に云考にいふごとく此集の中に古きは撰の巻は一の巻二
の巻にして其下つぎて八今の十三十一十二十四とす巻ども八同じ時撰
まれしならなんとおぼゆ何とならば其一二の巻は古き大きなる
して時代も歌の主も知られぬは八今の十三同じふりの風なくして時代
も歌の主も知られぬ長歌は挙四五には八今の十一十二同じふりなく
代も知られぬ短歌を挙六は八今の十四古き東歌をあげて

巻を結びたるなるべし一の國のいふ歌ハ國風を始としけり
これハ天子の先をさく國をおさめしものとおぼしくて今の
五乃巻ハ山上憶良大夫の歌集なりし今の七と十の巻ハ歌もいさ
さゝ古く集の體も他と異なりしかも二の巻ハすこしひとしかれども
歌ハ人の集也今の十五の巻ハ新羅へつかはせし使人の歌
ども又中臣宅守の茅上娘子と贈答せしをもて一巻とせし
もの又たゞ集めしともみえず今の十六の巻ハ前にもいへるごとく
いろいろの中にハ歌としもいはずとてもおもしろきを載て撰ぶ
となり中にハ河村王大伴家持の歌も入しばさき集ともいふべからず八
家持卿の集なるべしそれより今の十六巻まより四六八九十七十八十九
二十乃巻ハ家持卿の家の集なるべしさればそれをいひ一ヘ万葉
集といひつるハ右より六巻の歌をあつめ其外ハ家々の集どもなりし
をおほいくつの御代のやうにもあらざりし二十巻とハなりしなるべけれど
つまる處ハ一二の巻の外ハ小川をおもはるゝやうにも見えずとなど

いづれの歌ともしらぬ人多くありしよ次ハさもありしよりて
三より巻々の十六の巻までハ其年代撰も時代も月も又ありつける
あきらかなり故に今委しく考へて次第にいふべきものなら
二ハ今はなし次ハ今の十三巻とし今の十二十一二十四ハ四五六とする
もまたいひつべし今の十ハ七とす九古今など中に旅京の事ありしよ
めうじられたるはそれをもじめの集なるべし今の七ハ八とす是もさきの集の作
者なり今の五ハ九とす是ハ天平五年六月のことあり今の九ハ十とす
天平五年の頃遣唐使の発船するの事あれど今の十五を十一とす中臣宅
守ハ石上乙万呂といへるは時なれども天平十一年の頃のことなり今の八
ハ十二とす天平十二年と見せたる事ありて久迩の京のことなり
今の四ハ十三とすこれも久迩の京よりかしこへ帰りしときのことなれハさもあり遷
今の三ハ十四とす是ハ天平十六年七月より今の六ハ十五とす久迩京の
ありしこともみえし是ハ天平十七年九月よりなるべし十六ハ今の十七とす時代ハ
ともにみゆ十七ハ今のとし是ハ天平二十年正月よりなるべし十八ハ今の巻是ハ天平

勝宝二年二月までゝ十九年なり　末は天平勝宝五年二月までゝ二十年の也
天平宝字三年正月の歌までを載たれば　かく年月のついでもさだまれる
あやしくさなれどね　ふたつみつへに別れたるかゝしる事解し
其外も代々の作られし巻の次の次第まぎれ　しそろの餘
見え侍りおほくつれさせたるはいつくも侍し　年はあしくさむぞ○
又これらは仙覚が校合の時多く此をなほ以てすなはて巻の次の第
如いにしへはなほ今のごとくならんや　巻次の次第よしなら
ハ仙覚もさらんならむしねぞころ　彼此なれどや今本のごとく
はあらためられぬぞすでに見だれて　次もいかにしてすぐ向ふさまにば
いふのはじめのみだれつらんと　又古今歌集序に万葉集よりし
ぬものをくさくともわか今の集に万葉のもの七首ぞ入れたる
序にはいひしかば万葉なら必しみえずやこれもありけるいに
し万葉集よりは八二十と其外にも此巻の中にて他は家々の
歌集なるゆゑにて其中よりとりしを今二十巻にて万葉と称す

左は遠ざかりたれども万葉集と家々の集と別にて撰ぶべき
所もあれば二十巻撰せしは延喜よりは時も前なりん○此集今
の十一十二の巻などは人丸歌集古歌集のことなどにてはおほく
しるされし又此中今巻なども作者不知の人丸赤人歌どものこ
ふ勝れて多かれども猶よき歌の少しで集めたるに其代の作らさる新
又古今歌集に万葉の歌十二首入しが其中大歌所の三首八十までは
うたひものにて入りしかば猶も再びまて書けしを二首あるをも
除きて猶七首ある也　○巻首に大考四條あり宝暦十年三月刻

萬葉選要抄　二十巻九本　俊道恵岳

此抄本集の歌全首撰のせず初句を挙て注釈せり　○凡例に云
契沖真淵の説を取るといへども其取ざるもあるは必しも所
いまだ或人の說の謬りやよりては代匠記考よりては万葉考へ
○これ此序に云なるは僧恵岳が撰抄にて晴らさしめんと次
翼るなも又真淵が万葉考冠辞考などより合せてこれ

ハ契沖がいへる不審られハ眞淵がよしともさとれずまた考へつら
せしを猶もいのれるをつけをしるしく　安永八年六月　常陽雨川
山前住侯道恵岳自序　安永八年正月刻

萬葉集旁注　二十巻　同上

本集のかたはらに契沖眞淵二氏の餘説をあげて其註を後に凡例に
云万葉集作者の譜及び姓名考ハ代匠記を詳なれば爰にいはず故にこゝに
贅せず　誤字脱字あらバ改め或ハ補ひ並に圏をつけ作り加へてその
旁に注す　別に枕詞略注を作りて集中の枕辞に於て加へて及び
注を加へず　旁注に既にあるは又ハ選要にあるをもて粗その略注
のすこ〇又云予前にいへる如く選要にハ直にその歌の解すべき事どもお
しるし全首をあげず單にその句の五字をしるして以てこれを標す梓
行のはなはだしかりし一二の舛誤あるを悔つこれを却て代匠記
等の注を撮捨しまた己が意を附けて以て誤を訂し脱を補ひ
すべて旁に注すれバ先輩及び眞淵の考へもそこかしこに居るのすこ〇

天明壬寅林信徴漢字の序　同年松賦関脩齡序　同年常陸雨
引山老衲恵岳自序　寛政元年仲夏刊行す

萬葉考槻の落葉　二巻　宇治五十槻

本集序三巻の注し上下二巻に別記一巻を附す第四巻と下嗣刻〇
此考よ一二の巻をいふハ眞淵の考をまもりこ〇後二位芝山持豊卿の序
天明八年六月の自序あり

萬葉集略解　七巻　橘千蔭

此書第一巻より第五巻まで後刊行す〇凡例に云万葉集今本字
の誤のさかしらを見せ仮名ハかはりにもわらハ傍に書きて一例〇此注
ハ眞淵の巻々の考をよりて眞淵翁の家にも得らるゝ論せしを
れいしくみけ翁の考へりしされども我今その注を舉をく又云万
葉考にハ巻の次第を別にたてゝ其あれど此書ハ其本のまゝにてこ
ゝに又云目録ハ巻十五までを十六以下なきか今此ゆゑす目録
いらもあちこくなれよし仙覚が奥書によりて契沖ハすべて目録な

かしが正本なるべし初学のために便あらせんとてひろく出し或ハ左注は
よりはらひハされどし此料簡をとりくらべてもみなよく為ることにされ
目録なるべしはねん人の目安にしてよくまとむものなるべしいかにされば
もいふべくはあるまじきことなりともおぼし されどもこれもいと近き
世のさかしらのものなれバさだかならずといふやうなるものハあらざるを
いふべし 又云今一本あり東アリ翁の見られたるよし活字の本なれど一本にて挙
ある所ありしまた世に常ならぬ活字のさまなれバさだかにて挙
あり又伊勢の国人がもたる古本によれるを挙て其校合せしも
しるしをく今よりも挙る所は傍注(?)の字などもありて官本とも挙
たるハ代匠記に官本などハ校合せしものとして挙る所もあれ
拾穂抄にも挙てハ北村季吟の校合せる古本などいへるも此本
よりも見ゆる所の挙るといへども近ごろ出しものにあらず 又云
古葉略要集とも挙てハ東アリ翁の傍注の本ハ此本にあれ
またハ傍案抄に春日若宮の神主祐宗などあらはしたる本なりし

家に伝へし古葉略要集は持来りて見せし時此集の文字おほた
がひども校合せしよしはるかに賀茂翁ハ此集少名の本にて異同
おほかれバそのものにて近き比古要略類聚抄といへる春日若宮
の神主の先祖祐茂建長の比しるしたる江田世恭所持の略葉集
人のいたくかりしるしたるまゝにて其おもむきを同せり此略葉集
といへるハ異なるやつまびらかならずされどこの解ハ先翁のまゝ
されてあまたありし○寛政三年三月千蔭の自序ありて同五年刻

萬葉新採百首解　写本　三巻　賀茂真淵

万葉集の中より風体あるよしき歌をえらび出しておほく類ありともち
て註釈ありて巻首に自序ありて次に附記ありて世人の近作
のくせのなほすべきよしのべたるものなりいかにしてかゝる
ものをもとめしにや万葉集は常用のよしかはれどもしか世の
風俗のみだれしやうを神武天皇より当時までたびたび変じたる
を論せり○此百首の部立ハ四季 相聞 など世の常の部とはよくも同じ

羇旅（キリヨ）　遊覧（ユウラン）　古京（コケイ）　皇居　雑事（ザツジ）　宴會（エンクワイ）　賀　等をあつめたり

萬葉集玉の小琴　写本　一巻　本居宣長

今写本にて流布（ルフ）するもの也　集一二三四の巻の注也　○自序に云　万葉
集ハ此の御代にいできにける書なれどことに萬葉（サウ）なりど よく書伝へてたがひなは
ふみのうへまでハいとやすらかにしぬ文字よ写しひがめつことの多
かれバ後の代の世にハ誤字多かるをひがことハいさゝかもさらにひがも
じのまゝにもよみくだしきたれるはいにしへのこゝろにもかなはず
めでたきわざ歌なども紛（マギ）れたりけるをそれらの誤をていさゝかもしかりしと
せるも後の世さへハかくしもひがよみしつゝ文字のまゝに物しぞおほく
あれとひめがことに万葉ぶりのみやびのこゝろをかたしけなくハいたれるところ
今まさにかれをしてあらたにしらしめんとすることかくハいとゞもと諸ねも
ころよりこの考をなし 詞のさだひをもちひ此大かた世間にしるし
おくことなりとしひとのうしろ　後も人もあまりしとさだめてなほ
なりしれどもはるかに後の世のえがてもすがらかの物ぞひきなぐ

書ハつくえたりまたかれまんやあしたんやこれよりよの書あまた
たゞはまん人のためにも
かきつれすものをとし物あらしてまたけるはしりてきこえんにも
○書中より万葉一二三の巻ハ古例の考ありて世にひろまりてれバ
こよりは下ハ其書いまだ出ず○又世人古例の說（セツ）をもちひずおのれ宣
長ハ文通ありて今都二十巻なのしもてかりきところ撰二返まで
よひたりし○たれぞ真淵の說どもハみなあげてあるなれどはなれがたき
あるひがことどもハみなのぞきたり（ナニ）

萬葉類葉抄補闕　写本　十五巻

巻首（シユ）に妙法院一品法親王漢文の御序あり云　万葉類葉抄ハ近世中院（ナカノヰン）
前大納言宣胤（ノブタネ）の勅を承りて撰せられしもの也しかるに爾来年を經て星霜（セイサウ）を
經て一二闕巻（ケツクワン）なりしを浪花の入江昌喜（マサヨシ）といふもの皇朝の古学を好
むにより往歳（ワウサイ）今より其闕を補はしむとて　寛政丁巳春二月　○此書
言詞（ゲンシ）部　七巻　本集の詞をハ上の句或ハ下の句の頭（カシラ）字をいろは

乃次第はるゝくをのく注釈加へり○奥書曰云 奉妙法院一品法
親王令謹補権大納言藤原宣胤卿所撰萬葉類葉抄闕詞部
七巻 寛政九丁巳年二月 浪華入江昌喜謹識于時七十六○同名
所部七巻 名所を加へたるは歌かけたるに今案加へたり 奥
書云 右依契沖之海北若冲之請抄篇所編集也且聊加代説今
案而已○外に目録一巻を附す 凡例に云 此抄は契沖の説のみを加
用ゆ 題目によりて一にも二にも契沖の代匠記その外契沖著述のおほ
をとりて又若冲があつむるところの説を用ゆ

古葉略類聚抄 写本 五巻
此書原廿巻ありしかど今存するは五巻也
巻第八 里 関 道 衢 橋 井 等のありて巻末に建長二年
九月十一日書写花押とあり
巻第九 山 岑 坂 杜 草 花 竹 木 等の目録ありて巻末に
同年同月廿九日書写花押とあり

巻第十 目録 題 水 河 瀧 海 珠 貝 舟人 海人 等あり
此巻奥書なし
巻第十二 目録 題 老 病 顔 無常 由縁歌 無心所着 ありて
巻末に建長二年十二月二日書写し花押あり
末巻 目録奥書なし 行宮 御獵 刑罰 将軍 故都
其余残りし紙の片足らずして中に建長二年六月三日書写し
とありて奥書の一紙あり○此巻のうしろに又別紙ありて書しておけり
此巻中書目録脱簡加之張次前後錯乱最甚手写之次 訂正之
次者三十餘張其餘不可得而考也 又巻中に別紙ありて云 以下
四張聴入他巻此巻目録脱簡不可得而考姑入此巻末
○巻首に江田世恭が新写古葉略類聚抄序ありて云 奈良の古京
春日若宮神主の家に古葉略類聚抄あり 此集の古本にて伝へけり
よろしきところもあり 并上昌軌しるしてあまたのひとにあたへけり
しかもさきなるかな○此すしきことありしもすぐれたるものなりて

その神主の家にひめおかれけり其先祖祐茂神主建長のころかきうつしゝと
ありて古葉略類聚鈔と題号はしるしてはじめにもさてかれかけたる字かし
はなれたれば此書のさし万葉一部の歌をあつめて古今六帖のごとくわかちたるを
よそ十二巻なりけるもうらめづらしきのみぞもとの名にしくかうてちる世
のいまや今はらず巻のつゞき八より十二まで紙数およそ二百ひらの
ばかり此書は前のうちにくはそのすべしかるにこころめでたくさりしを
ちりうせぬればよみよりはつめたくしるさく紙のつゞきもよう
むかしいつもあれ端に目録かけて奥をはりてあはつけくひがしうりの
ぞくはしゝあまた所々にさとかしこに書いつて雨風ありしきとやその
れにまことの尤の数ひとつにてちもしれなくてつゞくひ訂
ざめべくそびりが本身ひとつは此ありし此書はゆかしくおもひぬる
此本かうくたびやしかるにやうしくろかしくみうつさめるくろの功
をとげたりぬさても此書は此中のよき古くへ世にはるり広まりしや世
にきせよ万葉の此書にて代匠記つくられけり契沖阿闍梨ろの身にて

萬葉緯はつくりて京の今井似閑万葉新註作りける人は海北若
沖はしゝとて万葉の古書はつめしのなかにも此書の名はあらずただ安
茂真淵が作れる万葉考の中にすこし此書を引てて古葉略類聚抄とい
へるなれども題号もたゞ此書のさしひとつもなくまた此れをさして
此集はさて人あしくおしもしらぬいひてやかくて今昌軌のち
りたてもちて金匱石室にをさめ大切のものとしす世におほくいでしつけ
おこなふのあつきもえうる代にうしし春日の神職の嘉はしずや昌
軌みづから二巻はうつし世本も一巻あらゆせりそのかく文字あれの事
えたのごとくもころによみよみがなし此書をあはせしますて昌
軌のかよれぞされまさにひぬべきたためそしめるに字せし中頃りく
昌軌の家につたへて此書の元始まてまでいそぎ安永六年十月浪速江田世
恭記○此書は五代致絃のあるを万葉の書あつめまされしきと
まねつけておまけるかなまとの巻跡をとゞめて虫損のなんかは今その
まもて補ひつのとなしは藍をもてうつて

萬葉緯 写本 二十巻 今井似閑

此書を緯と名づくるハ漢土の戦國秦漢に時ある緯書といふもの
あるにならひて緯ハ経緯の義にして布帛のたて糸を経とよこいとを
緯といふ故に聖人の経書をたていとしてまたくの儒者の作るところの
書を緯書と名づけしハ経書のたすけとしてものし両漢の諸儒を
なされを信用して古注のうちに其を引用ひたり孝経援神契春秋
元命苞等のたぐひ其書七部ありこれを七緯といふ今此書も万葉
集を経としてこれを緯となして諸書とりあつめたれハおもしろきの
万葉集のたすけとなすべきよしにて万葉偉と名づけたるものなる
べし巻首に洛東隠士見牛編輯とあるも見牛ハ別号にして偃蔵
亭と号す契沖の門人にして縦ふくらく不見の字なり二百餘部を
賀茂の神庫へ納めたまひし〇萬葉緯の目録を左にしるす

巻第一 日本書紀 厚顔抄 巻第二 古事記 厚顔抄
巻第三 續日本紀 本文畧 歌全 十四巻 一首 十五巻 一首 三十巻 二首

日本後紀 二巻 三首 三巻 二首 四巻 一首 五巻 一首 七巻 二首
八巻 一首 十一巻 二首 續日本後紀 十二巻 一首 十五巻 二首
十九巻 長歌一首 興福寺大法師等為奉賀天皇宝算満于四十長歌
日本三代實録 一首
巻第四 此章雖非古詠同類将有古語依而集于茲
中臣寿詞 祭文 神楽舞歌 祝文 壷碑圖等
巻第五 大嘗會悠紀主基歌 二十一代集 夫木抄 歌仙家集
巻第六 踏歌章曲并東遊歌 全写 内宮年中行事 二十六首等
巻第七 神楽 全写 巻第八 催馬楽 全写
巻第九 風俗 全写 體源抄 拾芥抄 今様等
巻第十 雑 和州薬師寺佛足石圖 歌二十首 古語拾遺 歌一首
日本國現報善悪靈異記 歌四首 聖徳太子傳暦 歌四首
扶桑略記 歌一首 明月記 歌道事 後撰抄 歌一首 曼荼羅縁起
歌二首 作者部類 歌二首

巻第十一　新撰萬葉集　巻第十二　日本紀竟宴和歌
巻第十三　真名伊勢物語　巻第十四　和漢朗詠集
巻第十五　出雲風土記　巻第十六　風土記残篇
巻第十七　風土記残ゝ篇　全写　巻第十八　諸書風土記　全写
巻第十九　樂詠并郢曲　全写　往古異年號
巻第二十　近世和歌　近世在於古風之人擬古歌詠歌集于茲ニ
契沖講竟述懐長歌一首并ニ短歌二首　莫囂圓隣新点
○一本　十七巻下　新撰萬葉二巻　真名伊勢物語二巻　和漢朗詠
二巻　右之部者世間刊行有之故略之都合二十三巻　名万葉緯ト
元禄十三年　洛東隠士輯之といふ契沖なり

萬葉集長歌短歌説　写本　一巻　藤原定家卿

巻首に万葉集長歌載短歌字之由しるしおほかた集全部二十巻の中にて今の世に長歌といへる短歌といふ又三十一字のをいへる短歌といはするはあやまり例を挙て巻末に濱成式喜撰式孫姫式清輔奥

儀おほ範兼童蒙抄等に引く長歌短歌の説古今相違のことをとかれたり○京なる奥にしるさる此一冊者以京極黄門定家卿自筆本或好士命手書不違一字令書写秘蔵畢于他然所不思議之依臣細申出紙数行ゝ字ゝ毛頭無違乱令書写則遂校合訖和歌之難義依此一冊始而分明也最可謂至宝乎究賢撰不可免外見者也　寛文九年臘月下旬　清宗川　正徳五年未五月廿九日令一校了○按するに契沖の古今餘材抄に短歌のことにもいはれたりし引て

萬葉集名寄　五巻　下河邉長流

萬葉集に係するところ名所のことばをあつめて国々にわかちて傍訓あり自序ありて

萬葉集千歌　写本　一巻　揖取魚彦

本集の中よりよろしきを後の人の模範とすべき風体の短歌凡千首をえらびてひとつにまとめたるなり

萬葉集浅茅原 写本 二巻 澤真風

奥彦が千歌に於ひて雑歌を初めとしてそのうちより

巻上 天象 春 夏 秋 冬 禽獣 方域 述心緒歌

巻下 神人之部 相聞上 同下 羈旅

寄物陳思歌等

○序に云此書はえらびとれる人ら代擬古代にならひて

いにしへのすがたをしたひてよみいでたるうたどもなれば万葉の

ことばをえらびて摘あつめて浅茅原となづけたるなん

おのづからしらべもさはれる歌のさまいよいよ正しくなりてかくしつべき

ひぬべし

萬葉集佳調 二巻一本 長瀬真幸

本集の歌の中よりすぐれたるをぬき出して古今によれるさまに

べきさまにあつめたるもの也 長歌ものせず 四季 相聞 雑の部

わけて載たり ちらし書にせし

萬葉集佳調拾遺 一巻 同上

上巻 短歌 旋頭歌 下巻 長歌

橘千蔭 本居宣長等序 平春海跋あり

春 夏 秋 冬 別歌 旅歌 恋歌 哀傷歌 雑歌 長歌

旋頭歌 東歌などをのせたり 巻首に本居宣長の序あり 巻尾に自

跋あり 寛政十一年四月刻

撰集萬葉徴 写本 四巻 田中道麻呂

此書は二十一代集の中にて万葉集の歌の撰ばれたるを挙てその

本集の巻数をしるし その訛謬をもただし 撰集に入たる歌と本

集の歌とたがへるもの 或は撰集にはよみ人しらずとして本集には

作者あるもの 或は撰集には人の名ありて本集には作者しれざるもの 或は撰集に

あるもの 或は撰集と本集と作者のたがへるものなど細かにしるし

考へたり ○此書上中下にわかちて目録一巻を附す 目録に

縦横に格なるをしく上席を下席をわかちて数を
しるしくい一説に誤なりといふ○此書ハ乃ち古の万葉集の歌数
五百八十一首内長歌七首旋頭歌五首し○撰集に入る万葉の
歌 古今 十一首 後撰 十七首 拾遺 百廿二首 新古今 五十八首 新勅
撰 五十七首 続後撰 廿一首 続古今 四十七首 玉葉 八十一首 続千載
十七首 続後拾遺 三十二首 風雅 五十六首 新千載 二十首 新拾遺
廿八首 新後拾遺 五首 新続古今 十首 ○撰集に万葉の歌を載
ざるものハ 後拾遺 金葉 詞花 千載 続拾遺 新後撰也
○天明元年辛丑四月の奥書あり

萬葉東語栞 写本 一巻 同上

萬葉集第十四巻第二十巻の東歌の詞を五音五十字の次
第に類聚せり但し臨時によりて他書を引けり

萬葉集答問書 写本 二巻 同上

本集の中に難義を田中道麿の問に本居宣長の答へし

萬葉集作者履歴 写本 五巻

本集の歌の作者帝王諸王より大臣卿士諸氏に至るまで
履歴の考ふべきものハ是を引き日本紀 続日本紀 延喜式
姓氏録以下諸書を挙げて撰者詳ならず

新撰萬葉集 二巻 菅原道真公

一名菅家萬葉集といふ道真公の撰なりといへり一説に是善卿の撰
とす 按ずるに扶桑略記に曰宇多院寛平四年九月廿五日菅原
道真公撰新撰萬葉集上下弐巻云々 此説によれば菅家の御
撰なる事うたがひなし 此書上の十首の歌ハ寛平年中后宮の
歌合の歌どもにて毎首真字にかきて其左に七言絶句を
のせられたり上巻の首に漢字の序あり寛平五載秋九月廿
五日としるし作者の名をあらはさず

上巻 春歌 廿一首 夏歌 廿一首 秋歌 二十六首 冬歌 二十一首
恋歌 二十首
下巻 春歌 廿一首 夏歌 廿二首 秋歌 廿首

冬歌 廿二首　恋歌 三十一首　女郎花歌 十二首　一本無女郎花部一以テ恋部ヲ為巻終ト

○此書下巻の絶句韻字あはずして上巻にはすぐれたるおほく拙(ツタナ)し決(ケツ)して菅公(カンコウ)の作にはあらず好事(コウジ)の偽撰(ギセン)なるべし又巻ころつるそのし○近ごろ本居宣長著(アラハ)すところの玉かつまにいふ菅家万葉集上下二巻ある中に上の巻ハよろしきものなるを下の巻ハその本字のさまも上の巻とはかはれるうへにおとりて菅原の大臣(オトド)のものとはきこえずかの抄の作とはおもはれぬものにてすべてあしくそのうたのさまいとつたなくて七言四句よしのつゞけざまもおぼつかなしことにいふべき韻字(インジ)もあはずそのつゞけざまもいひしらずつたなきものなりこの下の巻ハ後の人のさかしらにて加へたるものなるべしさればこの集の下の巻ハのちの世の人のあしくしなしたるものなればなべてのまじりものと見るべきなりかゝる人もよけれどもさて見(ミ)んもの

しるしたるところもなし序も下の巻のはじめに白紙の後にみえて作者もおぼつかなし○按ずるに藤原明衡(アキヒラ)の新猿樂記に曰古萬葉集新萬葉集古今後撰拾遺抄諸家集等以見了(テオハンヌ)云々此古萬葉新萬葉といへるは万葉集と此新撰万葉集とをさしていへるなるべし○刊本(カンホン)巻の尾(ビ)に寛文七年三月としるせり

三代集　六巻

古今後撰　拾遺なり三代集といふ○清輔が袋草子にいふ高遠云古今後撰拾遺を三代集と号(ガウ)す以往(イニシヘ)ハ万葉集相くはへて三代集と号せり拾遺出来てハ万葉集を捨(ステ)て拾遺を用ふ○契沖云古今集の歌なれば拾遺に重(カサネ)てのせしなりこの集を後につけたるそこにて略(リヤク)しけるにや古今撰者もてあそびたるよし知られたりまたよみ人しらずの歌あまたありてひとつにあらずされば拾遺にかさねてのせたる歌もありけるにや撰者の名は拾遺に見えず又のせられたるうた共をやはり代集ハ何となくいひならはしたりけるにや誤(アヤマリ)くさ(?)多(オホ)く入りたる歌多し○千載　新勅撰　続千載を二

八代集　　十六巻

拾芥抄に古今集後撰集拾遺集後拾遺集金葉集詞花集千載集新古今集已上謂之八代集〇此集為備證於以数本再三令校合畢　文明第八三月中旬　牡丹花判

刊本奥書あり　正保四年三月刻

二四代集　　廿巻　一本

舊名八代抄といへり定家卿八代集の中より撰ひ出されたるなし

古今　五百八十九首　後撰　百三首　拾遺　二百十首　後拾遺　百二十首　金葉　二十四首　詞花　二十一首　千載　二百四首　新古今　五百五十八首　此内合点歌　二百八十六首　都合一千七百九十一首　黄点歌勅撰抄後鳥羽院御撰らるゝ也　巻尾に承久元年九月九日民部卿入道息に又参議從三位行侍従兼伊豫守藤原定判の奥書あり　安永四年九月刻

八代集抄　　百八巻五十本　北村季吟

此抄第一巻より第八巻まで古今　第九巻より第十四巻まで後撰　第十五巻より第二十巻まで拾遺　第二十一巻より第二十八巻まで後拾遺　第二十九巻より第三十一巻まで金葉　第三十二巻より第三十三巻まで詞花　第三十四巻より第四十巻まで千載　第四十一巻より第五十巻まで新古今なり〇奥書に云茲拾古今集直載古抄其餘之七代集或襲先達之註解或用前人之訓説定為百八冊名曰八色抄刊布而寿於久遠嗚呼吾薄識浅見安足窮其淵微唯欲為童蒙之輩行千里進一歩之裨世居蓬蒿而罝言於勅撰之和歌竊比種玉老人訓釋萬葉集等云　天和二年仲春時正日北村季吟秉筆於拾穂之菴下〇按ずるに此奥書に八色抄と名付られしハ八代抄の古きなをかりて集ごとに表紙の色をかへてかくれあれバなるべし心目にたよりよけれバ其名のしるしす捜索のたよりよしとてしあんなりとそのまゝかりて〇此抄古今

集の巻首にあり 此集ハ故金吾基俊朝臣より五條三位俊成卿に伝授
の故ありて京極黄門より世々此流に秘口訣二重三重に伝
はりて不審齋宗祇 牡丹花老人なとにいたりて伝授のはしめ十箇條の
制詞をあらはしのこされたり季吟ぬしにいたりて霊瑞院法皇の御ときよ
り御伝授ありて彼不審齋より九世の血脈をたてまつりしかども
其御伝の書ハ彼十ヶ条の制詞をとりあつめてみづからせんしたまふを位兼名卿
なれバ冥加恐れあれバ今はたゞ書にハのこさず御伝の事すらはゞかりてしるさず飛鳥井
井の雅中納言雅親卿に御のぞみありし其外は成恩寺殿の御
おのていかに顕昭か密勘僻案抄などのたぐひにて其外は成恩寺殿の御
説かず一かどの名あるまじき事なり文明の頃飛鳥井
一位雅康卿に御ゆるしありてより御伝の事をのべられて
しかれども此御添削をもとめたまひしは彼御家の風体を伝へ
させ給ふにあらずしてこの七代集撰者のあとを
とりてしるし八代集の初撰より一つらに其御伝のすぢなり

ころの制詞とかいつけしも伝へられしにこれハあながちに伝ふ
べきにあらず其中に僻案抄顕注密勘抄なとの外のおほくは
ハ此書に見えたり小書にして学者のたよりとなりぬべし此書の
秘めたる意味をひめつゝ書とくのハ口訣とて書きあらはさぬ故なり
ながき年月をへて此家伝の説ハ別にあるべし子孫に残し
伝へられし○天和二年五月上木す八代集の哥数凡九千四百八十九首

九代抄 一巻 五本 宗祇法師

古今 後撰 拾遺は拾遺抄 金葉 詞花 千載 新古今 新勅撰 続後撰
以上九代の集の中より一千五百首の歌を抄出しくはしく釈をとくへ
きものなし○奥書にいはく右一冊従古今集到続後撰集只拾遺眼銘
肝之作書者一千五百首九代抄也云々文亀第三暦孟冬上旬夢庵

九六新註 一巻

これハかの九代の集に六家集を合せ抜書して歌ごとに註をくはへ
抄子在判

作者牡丹花ともいひ肖柏ハ連歌師なり

十代集抄　一巻
八代集のうち古今集を省き新勅撰続後撰続古今をかへて抜出しるせり撰者いまだつまびらかならず

十三代集　五十巻
新勅撰　続後撰　続古今　続拾遺　新後撰　玉葉　続千載　続後拾遺　風雅　新千載　新拾遺　新後拾遺　新続古今　已上十三代集と称す

二十代集抄　一巻
此書ハ二十一代集の中古今集を省きてこれを抜出しるしたるものなり撰者つまびらかならず

二十一代集　五十六巻
八代集十三代集を合せて二十一代集と称す目録拾芥抄にみえたり

二十一代集分類　五十巻
巻ゞ此次第にかゝはらずして部立のまゝにとりあつめたるもの也

古今和歌集　二十巻二本
六十代醍醐天皇の延喜五年四月十五日詔を奉じて御書所預紀貫之棟梁としてこれを撰す大内記紀友則前甲斐目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑等これを撰す仮名序ハ貫之真名序ハ貫之の命により紀淑望これを書す萬葉集にいらぬ歌をえらび但し七首まで古の人ハ名をしるさず或ハ左に注す当帝の御製を入ず延喜五年に作をほめしく延喜の末に奏聞するといへども此集撰者の内大内記紀友則ハ貫之の従弟なりしゆゑにこれも此集を撰じしが延喜五年の二月より六十一歳にして卒せしかバこの集の哀傷の部に紀友則身まかりける時よめるとて貫之のを入たり○古今集と名付るハ此集の仮名序にいへるいにしへのことをもわすれじふりにし事をもおこしたまふとて今もみそ

なをしなほせもつてまれなりとみゆ万葉集にいらぬふるきうた
えらびしのをもたてまつらしめたまひけれんとそれしの文とその
ふかきなり○真名序曰各献家集并古来旧歌曰続万葉集於
是重有詔部類所奉之歌勒為二十巻名曰古今和歌集とこれ
あれは按ずるに此集をはじめは続万葉集と名づけられけるの
万葉ふるきのごとく部立なくしるされし故に重て勅詔ありて細
かに部類せしめられて古今和歌集とあらためられたるなりとて此集
名序の作者紀淑望ハ中納言長谷雄の男なり一説に八貫之の養子
なりしゆへ若し此集の序を作られしとぞ此淑望を撰者の
如くにおもはれしかはた此集の奥へ入られたりといへり○仮字にて之
書けるは此集の序并に大井河の行幸の序をはじめとすれ
ようおかしかれ漢文もくさけり此後鴨長明の無名抄にものせたり○
按ずるに此集をよみてかく序のうたかは説一定ならずしてあるべき
淑望が作しく撰せしめけれ説ハ基俊の説しかるに定家つねに自筆の

古今集にかかく貞応二年の奥書に嫡孫に伝へて将来の證かと
しかしかれらが貞応本と見えしハかれかその序にあるかをしか入れ
まてへ嘉禄二年四月九日の奥書あり此本はもとより此序の
みなくく真名序なきのせず二条家にハ貞応本が用ひられ冷泉家
にハ嘉禄本が用ひらるといへど此序のことハ万葉ひとり詳に撰
集撰せしめ時の此序が載られんとぞしめしけれど当時にはあらく
ほどの人なりしくさやかやうなるまつりたる序ハ本紀文辞に
ものせしかれは仮名での和漢朗詠も此序の内の六句が入られたれども
づきなる名の作なりし○此集證本のうち定家つねのなき先世
流布すなる両様ありて嵯峨院の本ハ嘉禄二年四月九日よりせなる
つると本ハ嘉禄とや後成にて用ひたかつなの通りをし又旧時代
りく貞応二年七月とせなりしく傳于嫡孫為将来之證なりとし
奥書のなか貞応なるよしかれらつけの本序ありて実にせなるべし
代々なるよく陽明門院御本を見自筆これ延喜御本相伝しなるべし

綱翁九十九歳まで其れ悦しく故公信翁只のしらく焼失す
ける序なし小野皇太后宮の御本書うつし假名序をあつかはく焼失
す俊成卿の流通家翁九自筆これし其由表紙に記す同左大臣
の御本書し妹のうつし序是閑院太政大臣の本悉しく改るを
玄上旨法歌大概おあり故禅閤作せられし書し奏覧の古今として
ふなとゑへて至宝なりし真なるし とのさまつりし故に定家
にてなさぶもり付諸本お取捨して了簡ありくこつく将来家
の證なとし奥書に明らかなるふり二条家をなしりんともかしは京
極義つけまのなりへ用ゆべきりけるぶ和哥しき○後世名おこ歌人の
作ものは化書し基俊俊成し古今集のお作ぼりし二条家いお世
つくり頓阿に作つく経賢孝尋尭恵尭孝東野州常縁宗祇逍
遙院実隆称名院公條三光院実澄細川玄旨法印と作来しく
八条殿中院度鳥丸度なとしれ玄旨より作ふへ又は宗祇より肖柏
拗へ作つらまし流は堺作松ようひろまり南都饅頭屋作へし

或奈良伝受よりよしあし按ずるに此饅頭屋よりよ八林宗二のよこ也
源氏林逸抄節用集等の作者也○榻鴫暁筆巻十七云行人
古今をうけゝるの其名隨身の秘事とてとし入伝る

ふるとしの巻 才一　をりひの巻 才二　花なつの巻 才三
初秋風の巻 才四　ふうせの巻 才五　初時雨の巻 才六
さゞれいしの巻 才七　旅立の巻 才八　もろこしの巻 才九
うぐひすの巻 才十　あやめ草巻 才十一　あさ茅の巻 才十二
そひねの巻 才十三　むらげゝの巻 才十四　おぼろ月夜の巻 才十五
みなと川の巻 才十六　浮舟の巻 才十七　いすゞ川乃巻 才十八
夕だちの巻 才十九　初春の巻 才二十

○部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　離別　羇旅　物名
恋自一至五　哀傷　雑上下　短歌　旋頭　誹諧　大歌所　○歌数
八雲御抄云　千百首　袋草子云　千九十九首

顕註密勘　八巻

顕昭の古今集の注に定家卿の勘物加へられしものなり慶融これを
あつめしるせり 慶融ハ為家卿の子也

古今和歌集鈔 六巻
巻首に古今和歌集両度聞書とあるなり 此書ハ宗祇法師東野州の
講釈をきゝて書付の書なり 文明四年東常縁の跋あり 万治元年
七月上木す

古今和歌集深秘抄 六巻
真名序の注ハ應永の奥書あれどもいかなる人ともしれず 仮名序ハ宗祇庵主
書誌一帖以被見常縁所存少々加筆加詞者也門弟随一思召
に仍て我ほか他にもらさず此詞耳 文明四年五月三日平常縁在判 又
文亀元年九月日 宗碩在判 文明十四春正月日 宗祇夢菴判

古今栄雅抄 二十巻 十六本
飛鳥井雅親入道栄雅の作なりとぞいへりつまびらかならず 此書一名
古今秘密抄といふ

古今抄延五記 二十一巻 堯恵法師
古今集一部の聞書なり奥に堯孝の名あり 真名序の奥に
永禄八年乙丑二月堯恵自筆の本を以て重て校合す 同次
年丙寅の四月に至て又々堯憲法印の本を以て校合す
ましの奥書あり ○延五記と号するハ此集延徳五年にな
る故なるべし

古今序註 十巻 五本 了誉上人
仮名序の注釈なり 應永年中浄土宗の僧了誉此作也 了誉ハ
和歌の道を頓阿に学ぶよし伝ありとぞ 巻末に應永丙戌仲秋
了誉誌之とありて六十六翁としるす 了誉諱ハ聖冏 関東佐竹黨の人の子也

古今集傳授 一巻 今川了俊
此書ハ了俊の言塵集のうちより抄出するものなるべし

古今餘材抄 十本 三十巻 契沖阿闍梨
真字序ハ漢字を以てしるす 契沖みづからの自序あり また季吟

もまた假字(カナ)づかひハいましめておきたり毎首(マイシユ)古今六帖新撰万葉ま
なるものハ歌のうちよりこれをあつめけるハ下河辺長流が考へ
置たるを後二書の考究をあつめたるを相考(モツハラ)とかきり○此書
ハ餘材抄と名つけたるハ　西山公の作らしむ万葉の代匠記つ
くりし時あまりの珍書籍(セキ)等おいひろく考へたまひしをつぎ
家をつくるにハかならずあまりの材木あるがごとくの万葉のあまりを
考つめるぶんのあまれるをもとめしくつれるゆゑおなじくぞ
くはしく名づけたまひしと序(ジヨ)のうちにみえたり

古今和歌集打聴　二十巻

此書ハ賀茂真淵の講説(カウセツ)しるし古来の諸注ハ齟齬(ゴ)するをのぞ
きてそれぞれ古書によりてくろ代々の時代を考へ潘紳(シンカ)家伝のまた
説にもよらずしてすなほに釈(シヤク)せり假名序の中も名所でくるにハ
もらされぬ無(ゴ)じ契沖の餘材抄を難(ナン)じするもあり○古来
毛利家よりたえしもひろよりかきの考訓の講説をあつめたるよ

おしさまてあらかじめ枝葉(カシイ)しつらへしの声をつたもろてく也
秋成上木す

古今通　写本　二十巻　十本　五井純禎

此書古人伝来の説を用ひしかずあげしかし行と闕(ケン)いはいく増補(ゾウホ)
せり

古今集真名字解　四巻　菊池春林

古今集一部の真名(ナ)をあげてこまかくその字義(ジギ)をよくくらべその意(コ)證
きよしめんがあり　日本紀　続日本紀　三代実録　文徳実録　万葉
新撰万葉　古事記　古語拾遺　拾芥抄　江次第　文選　白氏文集
遊仙窟　史記　これらのみをあつめいくつもあまさるの文字ともあ
げてこれをしるしたる巻尾(クワンビ)に明和壬辰中冬於(テ)洛陽(ニ)下出雲寺道祖神(ジン)
祠(シ)下(ニ)隠士菊池春林述ともあり

古今和歌集鄙言(ヒナコトバ)　六巻　尾崎雅嘉

古今集の歌を俗語に訳(ヤク)してあたへたるの意(コヽロ)ハりかくし契沖

の餘材おハまさにひかならし私は密訣の説ともあり注釈の事
ありてもよろしきへきするもの児女の一端よろしくもの者なむ也はさる
べきなりとす

古今和歌集両序劄言　二巻　同上

假字序真字序ともに俗語に譯し故に何よりすとも八九の事抄り
て用ひし俗語はのみに注釈す真字序のよろしくせハ叶雲阿闍梨自
筆の巻に依りせり

古今集遠鏡　六巻　本居宣長

此ものもちらしく俗語はもちて歌はく譯しあるハ一二三の巻をも
つけくるのは何かを上下に直りつく添はまえて長歌ハ譯を省けまえ
餘材お打聴等の説おもけかくまたハ餘材まれし打聴まれし
かくよしもあり巻首に木綿苑千秋序おも凡例あまたく数十條
の譯例を挙ぐ

後撰和歌集　二十巻　二本

六十二代村上天皇の天暦五年辛亥十月大中臣能宣清原元輔
源順紀時文坂上望城等に詔ありて昭陽舎梨壺にありて
万葉集ははよみとかしめたまふつかぐまことにはえしめて
一条摂政伊尹蔵人おはるの時和歌所の別当たりけれは其
源順つとめて宸筆をもさせたまふ此文は順の文粋巻十二にあり
○此集證本のるは伝ふることなりしは朱雀院塗籠の本に表
紙これは後よりのなりしきこれのかハ今の世に伝はらずや伝ふらん
季吟八代集おに見ゆまるハ假定家卿の真筆本にて大殺乃
ものおしちくが勘へあはせて成りのものは世も古きをも抄にまとめ
なりしがしろいまそれの裏書こゆ○字本奥書に天暦五年
十月晦日於昭陽舎撰之古蔵人左近少将藤原伊尹別当宣旨寄人
讃岐大掾大中臣能宣河内掾清原元輔学生源順近江少掾紀
時文御書所預坂上望城等也撰之梨壺五人也始自二年九月
二日辛巳於和歌所許不得之家在之意用不又之河内

仕うる歌撰也　同三日令読合條々事有　古今漏脱字ヲ拾フ部類尚料ニ
あつめし　又一本ニ云撰者の中ニ宝亀◯此書紀貫之撰してたてまつる
是ハおほよそ和歌の撰集ハ万葉集よりはじまりしといへどもすべてみ
かどにて大成せしハ古今集なれどこれまでにもよりて撰ばれしへしこと
古今集のはじめ撰せられしをいへども後古今の撰人を
もいてり◯八雲御抄に云梨壺の五人めでたしいでも彼古今の撰人をも
及ぶべからず能宣元輔ハ末代の人也元輔ハ順又歌よみの
その後城外又ハ父が子すらむかしよく◯長明世名抄云は撰者
よりて古今よりつさねくはいでほどもつかりけれど古今ねがひて
すぐれたる歌はすくなからずといへり◯同序に云は撰者ハ
やさしきさまにみえてぶりもさもありて梨壺の五
人々やかりけん◯部立　春上中下　夏　秋上中　冬　恋自一至六
雑自一至四　別　旅　賀　哀傷　◯歌数　八雲御抄云千四百二十
首　或本ニ云千三百五十六首

後撰抄　一巻
奥書云此書中院入道大納言通方卿不令撰作之代ニ余ル僻事
有他人而已◯又古書目ニ成所の撰集ニ作る也
拾遺和歌集　二十巻　二本
六十六代一條院長徳中大納言公任卿撰すといふ花山法皇御撰とも
又拾遺集序通俊云花山法皇ハみづから撰ばせたまふとなむ
いひつたへたるこれハまことにや彼世よ遠き人
の説にや但新古今序の趣にも法皇御撰よりつたへたり中◯以子本
奥書云天禄元年仲秋中旬以七旬有餘之盲目重以愚本書
之八箇日終功此集世之所称者諸説不一而多旧本校合候見
取其要猶非無不審　哥数五百九十四首其中恋上　中納言源氏
或本無之此撰之　赤染衛門
おもひてへいしもとてかなしものをうつろかなりけり
我やもの思ひはしもなかりけりすみかれいで◯これ

廿二首集ニ不レ見歟し　五百九十二首集抄それ遠し　桒門融覚判
此後の事、勅撰者京極入道判　○八雲御抄に云、古今の様の哥ハ入りて後
万葉の哥いれたるハ多くいりたり。後撰は一条院の御製数首入
すぐれ　○長明無名抄に云、拾遺集の比より体ことのほかにかはる
てこよりくはしくいはれず。すゑなきな事おほし　○賀茂真淵
例云、拾遺集ハ何人の書集めけんこと定かならず。万葉集の時は
いやしきたるもたゞしくおとなしかりけれど、廿二集の様は
拾遺ハ今の代集にて延喜の比までの歌をあつめたるにて
たまへるよしなれど、もとより花山院の御撰なりといふ。甚しきひがことなり
よしなきことを後にしるせる也。廿二集の人のかゝ
りの歌ども多くハよみあやまりて入りたるもあれば
万葉のくらゐよ　○部立　春　夏　秋　冬　賀　別　物名
雑上下　神祇　恋自一至五　雑春　雑秋　雑賀　雑恋
哀傷　○歌数　八雲御抄に千三百五十一首　紫式部集に同じ

拾遺抄　二巻

紫式部集に云、拾遺抄ハ五百八十六首、花山院勅撰ニシテ一條院集
ハ花山院抄ハ公任卿撰しハ不同し　○或本ニ拾遺集奥書云抄ハ
抄ハ五百九十四首、上二百四十五首　下二百五十九首とあり　○いまく
見えたるおりひつの歌とも、おほくは拾遺集の歌のみにして
いはゆる集よりハ撰びぬきたる也　○拾芥抄に云、旧抄ニ云所書傳ニ華
山院御自撰　若又長保寛和五年以前之頃、于時其ノ月
不知也、公任卿抄出為二十巻一破勅撰而自由抄出スル者也、故多
用二抄字一

僻案抄　二巻　藤原定家

古今後撰拾遺三代集の歌の中に先達古賢の註するところ不二
失なきにもあらざれども、定家卿の撰ぶところのもの也　巻尾に嘉禄二
年八月、民部尚書判とあり。これハ定家卿のことなり。又
延応二年六月　桒門明静の奥書あり

後拾遺和歌集　二十巻　二本

七十二代白河院の應徳三年九月十六日中納言通俊に撰進せしめらるこ
れより先承保二年九月に此集撰ぶべきよし詔命を下されけると
いへども公務にさまたげられて打捨おかれけるを應德元年九月に撰
ひはじめて十月中旬に奏覽せしむ撰藻抄には通俊撰者ときこえ丹後のよ
し袋草子にいへり其年十一月堀河院受禪の後は撰ぶことなかりしを
寛治元年にかへされし事を序にいへり此後も八雲御抄袋草子によ
拾芥抄等にいへり○通俊の序文に古今の撰者の
およびがたきをもいひ此家の集をおくられしにて其ほどの
いにしへの人くはしくもなかりし事を序ならずといへりて人の謗をさけ
して今の世の事をとりものせられしにいはれて目をつけたれど
とがめられし○八雲御抄に白河院は拾遺集撰ばしめし
經信卿も撰ぜられしかば通俊これかかけたりこれ末代の不審なし
またこれをもけるあなどりとし御集八大きなりおとしけり通俊これ

なりとも此よう此集をはしく袋草子にもさまよひけるこれ撰者を
ほうにやみくき切とかし○此集澄なりと袋草子に澄か八雲黒主と
燒表紙のたぐひ澄俊は此清を奥書に長二年正月十九日以
礼部納言自筆本書手件本奥書に寛治元年九月十五日書校
了世乃本也下官所持の一校し是在世本にて遠々と百餘首不可信用
件本其由奥書目録序通俊　又寛元四年又寛二年寛正二年亦
の奥書は○袋草子に云後拾遺は末代紀撰の集なりとあるは撰者も
彼時に撰くの誹謗ありし先序別撰し給ふ沙汰に稱国所させたり
なりき難ありて此入ずと撰しく不審なれ件人ら四首皆以肝
膽に染これ耳目の謬なり○八雲御抄には拾遺今集の
比より此ほどの人さへおほく平懐なる體なれどめでたきがちいりとて八は遂
○阿仏房は侍には拾遺の外につきて十かよひて世わかれとはれし
うきうきもまかせなは此雅は拾遺よりもの多くみなれ八代つ
かならずしもあらめくさまざまのるつろるもいやん○法輔

こゝに雅経拾遺といふものゝ世に傳はるの序あまたありし近世俊撰するの子息俊恵が語しは吾妹女房死去の後彼遺物を開見るに件の雅経拾遺の草案其中にありと見ゆ故郷の書籍に残し給ふ人ありけるとぞ○其外井蛙抄略に挙げたる勅撰より入たる名どものは拾遺をもて小鰺を取し名の如く撰ぶ墓小鯵取をなしてく撰者の心ならむの如く続集に入たりしの其名あれこれ○部立 春上下 夏 秋上下 冬 賀 別離 羇旅 哀傷 恋自一至四
雑自一至五 神祇 釈教 誹諧 ○歌数 八雲御抄に云 千二百十八首
此集の序もなかりし

金葉和歌集　十巻　一本

七十五代崇徳院天治元年白河法皇の院宣を以て前木工頭源俊頼これおほく入れ撰す天治元年よりうけたまはりて大治二年に上奏す奏覧するところ両度返却ありしゆへ三度めのたび中書の草案をもて奏覧する件の本左右なくおさまり手ぬ仍て撰者のもとに

はなかりしこと件の本は故待賢門院よりめさるゝに今は相国寺にありかへりくこれは書写したるこの本は大乗院経宣がよみ弃にて集拾遺集の如く等これは入拾遺は柄なくして除弃置せんの也よてこれはいかにも此本は巻頭のこと書かれたりしの心ことにのるあいつきしてのこゝかしこ此本は世に披露せし世の流布の本は其二度のかし近代の人はそれを写し但し此のこと弁に其様お撰よれ奏入巻頭は故将作の筆うちかなしき中にて奏覧の本は遣紙とありけり故に基俊そのもの名づく和歌の髄を○より也撰者にするに俊頼ありしいつもこれなけれどより此不法の事とする以上後葉集に八雲御抄おもての難し○八雲御抄に云は拾遺金葉の時よりはさまのこと古く平懐なる体なれしぬけてすこぶる人は又此集し○長明無名抄に金葉集はわざとおかしからんとしく興じたることありし○其外井蛙抄略に見ゆなり金葉集抄に臂突集といふ名をせられしことなし○同集の奥書

なし其外の子五首非奥にのせたり○部立 春 夏 秋 冬 賀
別 恋上下 雑上下 連歌 ○歌数八雲御抄に六百四十九首 又連歌
仙覚が子には六百五十四首 此外連歌十九首

詞花和歌集 十巻 一本

七十二代近衛院天皇の御宇崇徳院院宣を下させ給ひて仙洞の勅によ
りて左京大夫顕輔つかうまつれり撰すへき天養元年十一月二日よりはしまり
そうして仁平元年中によろしく奏する所のはなはたしたかふゆへに御製
お、花園左大臣保盛源家の歌を除きたまひてすなはち法輔
お君御仕として顕輔の判に於て参す
輔八修理大夫顕季の子にして法輔顕昭はかれかの兄として和歌の一
流の祖たりしくはなし八條家といふて○奏覧の本八本目のうち後の事
子子顕輔のつかゆるにも八雲御抄に捨芥にくはしくかたりたり○捨芥
におゐては撰ひけれは作者入べし古今作者不入とかく○詞花集の名八古今
の序に夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也此集名

御用ひしく詞花の字数しめてくわしれしやや○一本奥書に云
以前藤大納言為世卿本一校畢以大貳重家本写之作者并歌数相
叶目録無相違 校本云奏覧之時雖入依勅定被止哥等有之今七
首ゆゑに○言塵集に云詞花集ハ撰者もこゝかしこに才学もすくれ
たまはずありしにより一体むかしをもむけられたりとあれとも代々の歌よ
おしてうや ○部立 金葉に同じ ○歌数 八雲御抄に四百九首

千載和歌集 二十巻 二本

八十二代後鳥羽院の御治世四年四月廿日後白河院の院宣によりて入道俊成
つかうまつれり奏する道世の人撰すべからず八代集撰のうち和歌所に准ぜらる 此集序に
有後ては寿永二年二月に院宣被下さる三位中将平資盛つてにしけ
たまひし○明月記云文治四年四月廿二日戊子晴巳刻許入道殿令
参院給為勅撰集奏覧也日来自筆御清書白色紙紫檀軸貝
鶴丸羅表紙組紐外題中務少輔伊経書之納蒔絵 廿四日庚寅
入夜権尚書定長奉書云撰者之詠之少猶二四十首可副進云々

可撰進之由有御返事云々○假名序　後成て代くられ給ふよし拾遺
集にえらびのこされたる　上は正暦のころほひより下は此の今の世に
いたるまで乃やまとうたをえらびいれてまいるべきおほせごとなんありける
の除にうちかへしこのことをしりうたちもちゐずまうまでをよびせんとものがたり
まりなしよなかなかんれアもよりもとしるもかへしく今ゆくとあるもまる
よしさりんなめ此集撰名づけく千載和歌集とはいふ云々又後にこの
の秋なかげつのなかのよに撰ましてひとつもめぐりのみらる○袋
草子云金葉の名ニ心中傾思其故佛欲入涅槃之時世間金葉花
雨云々以之思之金葉の世ニ流布するハ不吉也しく此集の後白河
院崩じ撰者又逝す又云詞花の詞の字乃音死の音に通る禁忌
はりしあるへしから雅仁云々或云此名の不吉也へ崇徳院外迁
の院歌きはましくいつくし先二代の集其名ハ俗称にさえて此集ハ千載
と祝義をあらくえつけたまふ云々○字か変もなし或中の歌一そと
のす○部立　春上下　夏　秋上下　冬　別　旅　哀傷　賀

戀自一至五　雑上中下　短歌　旋頭　物名　○歌数ハ雲隠抄云千二百八
十四首又短歌有之

新古今和歌集　二十巻　四本

八十三代土御門院元久二年三月廿六日にうちの院の院宣によりて　参議右
衛門督通具大藏卿有家右近中将定家前上総介家隆右少将雅経
撰進す寂蓮撰者に入といへども奏覧以前に卒去するゆへ歌ハ上皇
御合点ありて定めらる其故に序に叡策のよし見ゆ此たびの撰者
は採集梨壷五人の例によりて五人と定められたるの雑に撰く
の撰し此時和歌所の開闔源家長開寄人藤原清範鴨長明藤原
秀能也假名序ハ後京極良経公真名序ハ良経公の命によりて大納
言藤原親経これを書す親経ハ日野家嫡流の儒者也○この序の
词云むかし今時をわかず　たかきいやしき人をきらはず　めにみえぬ
神仏のうへのそもうばたまの夜のゆめにつたへてまでひろくもとめ
はやめくあつめしむ云々万葉集にいれるうたはこれをのぞかず

古今集よりこのかた七代の集にいれらるゝ歌どもこれ撰の中よりすぐれし
云々○元久二年三月に竟宴ありとこなたされ承元三年六月迄切継す
べきのよし仰せられて此集或ハ止められ或ハ新しく加へ入らるゝ
已上明月記の趣し○拾芥抄に云披露しけるに撰直官位有に遠す
所謂通光大納言或ハ左将つ撰者の○奥書に見たる哥五首入りたる
なりとこれハ隠岐の院より改め直させたまへる書目に
隠岐本と称することのしるし此時隠岐ハ扶桑拾葉集にのせらせたま
へる○阿仏房口伝に云新古今むかしのやさしさすぐれたるにて
おらざりぬべき詞の心ひろくきこしなんどするむかしのにしらせ
なとかへべき歌にかゝりよきそれすじく歌のさまなかりめでたき
とて新勅撰ハ歌ところなくまじきと云ふされけりな
とぞうけたまはり侍りし○按普光園院の近代風体に新古今ほど
おもしろき集はなし歌人の人々にこゝろえてくるべき人ハ此集にて
いでけりうべき見えず歌よくは姫のある首の作者まで心得らる

くハ名人の歌撰まで勅撰にハ後拾遺までかしこくさき但今
ハ金葉詞花千載新古今などまでよりたしかに何のあたりもあるべきにや紀左
相府も中行まし歌に新古今まで一体よしと詠歌に近代の哥
よみのみしるべし歌も用ふべし○貞慶ハ校する新古今よりすぐれてよきされ
ども新古今ハ至極を立てしてかもほとんど不及あらはれ
つまりして庚りしすきあれどもさしてお家の後は撰歌温和にやす
らかなりけくあたれし○部立 春上下 夏 秋上下 冬 賀
哀傷 別離 羇旅 恋自一至五 雑上中下 神祇 釈教 ○歌数八
雲御抄云千九百八十八首万葉歌入之古今歌皆不入之

新古今和歌集抄　四巻　平常縁

巻首に新古今新抄とあり又四巻抄とも云○奥書曰云此抄書
連之法先達之説少々又加了簡書置一冊也云々　平常縁在判
○慶長二年丹山隠士玄旨奥書あり

新古今増抄　二十巻　加藤磐斎

毎首にはじめに古抄の説をかゝげ次におのれの考へを述よせり磐
齋の自跋あり〇資芳が口授をうけて新古今四巻抄あり 盤齋が
増抄もこれにしたがへり

新古今集美濃家嚢（ヅト）　五巻　本居宣長

門人大矢重門が需によりて此集の歌どもの心ばへをときあかし
たるものにして論ずる趣（オモムキ）をのべたるは家づとにもなしてとらせし
ものなりけり〇書中此集のうち拙難しき説をめし尾
張なる戒定序 同秦鼎序 其後大矢重門が序等あり

美濃家嚢折添（オリソヘ）　三巻　同上

これは新古今集をつぎて附録（フロク）として巻首に宣長の歌を
あつめたるこれらをもあはせ例の如くしるし

上巻　新勅撰の難し　此中契沖の新勅撰の説をも又載せり

中巻　續古今　續拾遺　新後撰　玉葉　續千載

下巻　風雅　新千載　新拾遺　新後拾遺　新續古今　千載

いはれぬことなりけり、ぬきがきして難じたり　巻尾（ビ）に寛政三年四月十三
日夜書終（オハリ）ぬとしるせり同九年三月上木す

新勅撰和歌集　二十巻二本

八十五代後堀河院の綸言（リンゲン）に依て貞永元年壬辰十二月二日前中納言定
家これを撰す〇拾芥抄云貞永元年六月十三日召（メシ）に依て参内（サンダイ）殿上
の外座に候す蔵人頭（クラウドノトウ）右中弁源資雅（スケマサ）朝臣入江戸相逢て奏上す候（コウ）して由
帰（カヘリ）出上古以後和歌撰進（センシン）すべきよし是を仰す称唯（イシヤウ）して退出（タイシユツ）す同
年十月一日先序奏之（スヲ）目録天福二年五月内より仰に依て奏覧狼藉（ソウランニラウゼキ）
草本（サウホン）不被返下同日十一月日依下（テンカ）被返下止給ふ歌を上して撰（ヲ）給ふ
て清書進ぜらる〇進定（シンテイ）の本清書する所能は八代能古の
手なるし〇假名（カナ）序真名（マナ）序なし假名序定家卿の作とせられたる
いと傳ふりのもしつもて詞作のよろしきかたはありてなからむか
とすゝぎがれしなのくしかなきをめてゝ貞永元年十月二日これを奏
すとく〇天子井蛙抄云新勅撰をば宇治川集といひける武士のおほく

入らざりしとぞ○契沖云新勅撰ハ此集におほく武士の歌入られさ
せて異名を宇治川集とつけゝるとなん云ふの外十ヶ所川よりよ
言はれり後成恩寺消息に云新勅撰ハかくれたる事なけれど中納言入
道在なりし人のしてはじめてたゞ撰ばかりしたるのなく
ひさしくありめてこの御ためたち人もいとせおそしまさずろいこれな
き陰ぞなり御製とてはやもめられずうちかはしはひかりまよく
えしへとはつまた御歌ありしてはひかざんと持明院のおりして入道の
えりおさせたまふ歌七十首とかやまのひしきるといふず歌き
うらみひきとく奥にさにいへ人は後は撰の時越部禅尼後成恩女消息
先年書置きとぞかゝれぬ借失したる洩或仁令書写訖九
月九日融阿　右の消息の中に御歌たちとは後鳥羽土御門
順徳院此三院の御製を入らざる故にいへれども其天気許
容なりしにもあらず是関東のをはしかりし事なり定家卿しもありけるや
百人一首の終に後鳥羽院順徳院の御うたをかゝれ帝の叡慮を述懐乃

御うたを載られけるお家にて後に撰集に二首ながら入られき又父の
てのうちさし撰補なされけりしハつひに撰されりきとぞ○今川了俊
云新勅撰集ハ定家卿一人うけたまはりてえらばれて花実相かなへき
れ集ととく○光広卿云新古今ひすぶくととく新勅撰は定家の
くすくくいはれたりとく○部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀
羇旅　神祇　釈教　恋自一至五　雑自上　○歌数　拾芥抄云千三百七十
一首　此外短歌四首

新勅撰抄　写本　二十巻　沙門尭真

此集一部の註し尭真宣阿と称す又梅月堂と号す草庵集諺
解蒙求の作者也

新勅撰集抄　写本　三巻　沙門契沖

一名難勅撰又新勅撰難注と号す此集の中一わたりよめる歌を
加へ難じ巻頭の歌よりはじめて難じゝに越部禅尼
の消息が引く此集を論じ古へ宇治川集と異名せしことなど

とも奉れり○奥書ニ元禄十二年五月廿六日　摂之江南沙門契沖

新勅撰和歌集抄　八巻　沙門祖能

此抄ハ流義の秘田正業といふ人の集抄せしを取捨して了簡をくはへたるよしなり書中ニ梅月堂の説を徹し契沖の説を駁したるも見ゆる澄月の序ニ寛政十一年とあり

續後撰和歌集　二十巻四本

八十八代後深草院宝治二年七月日勅命ありし建長三年十月廿七日に後嵯峨院の院宣によりて民部卿為家に仰て撰奏せられし拾芥抄ニみえたり○今川了俊云続後撰は撰集ハ為家の撰しられさる秘勅撰の餘風残りてく其頃の集にて撰者たちの秘曲おしつくしひくなりし作よおもむきも得しやとく○光雄のか抜言続ハ撰ハ初中後に遜ぶしき人にてありしかハ常にもはえかるへしず○部立　春上中下　夏　秋上中下　冬　神祇　釋教　恋自一至五　雑上中下　羇旅

○歌数　拾芥抄ニ千三百六十八首

續古今和歌集　二十巻三本

八十九代亀山院文永二年乙丑十二月十六日後嵯峨院の院宣を偁て内大臣藤原基通入道民部卿藤原為家侍従藤原行家入道右大弁藤原光俊法名真観四人これを撰す假名序真名序あり假名序ハ藤原基家なり萬葉集の内十代集の外の歌これを撰す或云正嘉三年三月西園寺にて庚申御会の次ニおほせて勅撰を奉ず為氏ハ初中奉らいでども勅許なし融覚為家の法名は例の八条門の撰者祖父俊成千載集を撰すの例に外に求むるらずて撰くなりすべきよしにて弘長二年に撰者五人定まる此内前内大臣家良公奏覧以前早世○此集をはじめにて家々一人に詔ありしかれに撰者ちからをつくされけれどもおほく述懐の歌多く玉葉集のみより基通ハ清性ちる通公の孫にて為家ハ秋補の孫光俊ハ葉室家の歌人法名真観これぞ歌王和歌のみちしおほせ時分れしく法名融覚ともつくり○假名序はくいかにも古今の傍を

おほせらるゝためす四人のなをしるされき これよりさきにもやく
万葉集のうち十代集の外をひろくあつめしめられしかどもあつめて
たてまつりしかど とかくとゞこほりて つひにさらにえらばれざりしが
けふ續古今和歌集をえらばれしに 此集を續古今といへるハ延喜の
古今集をえらばれしにならひて 他の勅撰よりハつぎてえらばれしとえ
人々新古今となづけられしに 古今の字をもちゐられしハ ならひて
此ふたつの集をもちくらべて しるべきに あひつぎて長き
代までにつたへんもありがたなげきなれハ このうちのあるとのミ二代
の古今 新古今 ならびたるかたちにて 此集ハ續古今のよしをめでたくひとつ時
にありしにおもひつかなふべしとて 文永二年十二月廿六日えらびけ
集あらはしをりあつめき ○部立 春上下 夏 秋上下 冬
神祇 釋教 離別 羇旅 恋自一至五 哀傷 雑上下 賀
○歌數 拾芥抄に千九百七十二首

續拾遺和歌集 二十巻 二本

八十九代亀山院の院宣によりて文永十一年前右大納言為氏これを撰す弘安二年十二月廿七日奏覧す○此撰者為氏ハ為家卿の嫡子にて為氏の母ハ宇津宮弥三郎頼綱の女なり頼綱法名蓮生歌人なり此歌撰集に入れり○部立 春上下 夏 秋上下 冬 雑春 雑秋 羇旅 賀 恋自一至五 雑上中下 釋教 神祇 ○歌數 拾芥抄に千六百首

新後撰和歌集 二十巻 三本

九十二代伏見院正安三年後宇多院の院宣によりて大納言為世に仰てこれを撰す為世ハ為氏の嫡子にて嘉元元年十二月十九日これを奏す○是を井蛙抄 楊鴫暁筆等に此撰をバ誹家ハ津守集とよ住吉神官の歌多く入りたればなり然るに今世ハ勅撰ろしきものハ是れど名つかきほどの力ある人もなかりしやしらず○部立 春上下 夏 秋上下 冬 離別 羇旅 釋教 神祇 恋自一至五 雑上中下 賀 ○歌數 拾芥抄に千九百七十首

玉葉和歌集　二十巻 四本
九十四代花園院正和二年癸丑八月伏見院の勅に依て大納言為兼
これを奏す上古より今十三代の外のうたを撰するに為家の孫にし
て為教の子なり○光院ミ集のうち風体よろしきハ風雅集歌のさま
きハ玉葉集と云○部立 春上下 夏 秋上下 冬 賀 旅
恋自一至五 釈教 神祇 ○歌数 拾芥抄云二千八百二首

続千載和歌集　二十巻 四本
九十四代花園院文保三年己未四月十九日後宇多院の院宣に依ておほ
せ大納言為世これを撰す○目録詞云千載和歌勅撰のかずにより
て続千載とおほせの撰せしめられけり○部立 春上下 夏 秋上下
冬 雑体 羇旅 神祇 釈教 恋自一至五 雑上中下 哀傷
賀 ○歌数 拾芥抄云二千百二十首

続後拾遺和歌集　二十巻 二本
九十五代後醍醐天皇元亨三年七月二日綸旨をなしくだして民部卿にお

ほせられ為藤撰するよしきこゆる所に為藤正中元年七月十七日に
おほせて薨去の間子息権中納言為定に仰られ続てこれを撰す正中二年
十二月八日これを奏覧す是より勅撰なずらふの例なし或云為定
ハ為世の孫子にして為藤の叔父なり○部立 春上下 夏 秋上下
冬 物名 離別 羇旅 賀 恋自一至五 雑上中下 釈教 神祇
○歌数 拾芥抄云千三百四十三首

風雅和歌集　二十巻 四本
九十七代光明院貞和年中花園天皇序自撰し給ふ貞和二年丙戌十一月
九日竟宴ありて此なすこと竟宴の例ハ新古今元久二年四月にありそれより二
百年後新古今竟宴第二度なるべく真名序仮名序ともに法皇の御
作也此集の清書ハ青蓮院入道二品親王尊円なり其系ハ伏見院の皇子
なり○仮名序云元久のむかし此詞を撰ひて
しるしきこしめしきんとなつかしひあつめおもかげ
せられし貞和二年十一月九日よあんまことをかきつらねて○櫻雲記

まうに正平元年 北京貞和三年 今年北京ハ風雅集を撰す宗良親王
これを聞て是より先ハ清を拾遺集を撰し給ふ。そのさまいと
て作者ハ漏ぬ今まて田舎ハ候を撰者もお定にハ成すと見もすまり
けり歌きく
いかなれハ身ハなくもなりぬらんもののかくのこしまさまん
このたひハかつけりしすまもそしはまかりくるものしし八せし
○部立 春上中下 夏 秋上中下 冬 旅 恋自一至五 雑上中下
釋教 神祇 賀 ○歌数 拾遺おほく二千二百十首

新千載和歌集 二十巻 四本

九十九代後光厳院延文之四年六月十日にこれを奏す 同四年四月廿一日四季
の部奏これを奏覧す其後の清書も論旨を依て入道大納言為定
にこれを撰す○論旨案 上古以来和歌可令撰進之者依天氣言上
如件 六月一日左中辨時光奉 進上御子左入道大納言殿○為定
ハ為氏の嫡なりしかとも為氏早世故祖父為世の猶子につけて和

歌のみちを人とし○二光院に於千載集ハ歌まても同しみすし集
なとしてこれ集より白みしんの歌悪なとりもあし肝要なり
○部立 春上下 夏 秋上下 冬 離別 羇旅 釋教 慶賀
恋自一至五 雑上中下 哀傷 神祇 ○歌数 二千三百五十八首

新拾遺和歌集 二十巻 四本

九十九代後光厳院貞治二年二月二十九日民部卿為明に論旨を下し
てこれを撰すなり八月升資定同四月十六日奉旨同二年四月廿日
四季六巻且奏覧す返納以前同十月廿七日撰者に逝去すり仍て
の事よりて頓阿法師ハ恋雑の部をお継て撰ましめらる○於奉行
え勘解由小路二品為右て清書又其勅撰を治定ハ貞治二年三月十一
日内く武家ハ仰せしすの同十五日和歌不五條室町ハ武家より
為右え宋殊以て論旨を撰者はとらしむまし○撰者為明にハ為右
にのみよしく為世の孫しりなつて為成の子孫にしく能ちのんさ

新後拾遺和歌集 二十巻 二本

一百代後圓融院永和元年綸命かうぶりて御子左中納言為遠これを撰す○拾芥抄云六月廿九日丑刻綸旨到来其詞云上古以来和歌可令撰進給者依天氣言上如件　資教謹言　六月二十六日左衛門権佐資教　奉　進上御子左中納言殿○為遠ハ為定の猶子なり此集編纂のうち永徳元年辛酉八月廿七日乙刻撰者為遠頓滅せられけれバ同十一月為重をして相継で撰進せしむべきよし勅定ありかくて永徳二年壬戌三月十七日四季六巻を奏覧す和歌所にありける同三年癸亥十二月撰功を終て返納す数返錯乱大略弁撰せしむる至徳元年甲子十二月定まる返納す同二年乙丑二月十五日撰者為重敵人のために害せらる○仮名序ハ二條太相國良基公の作也此序ハ権中納言為遠卿かたへおほせくいまゝでつゝきのまゝにてこそありしめたまひつるを良基公ハ公方義満公より沙中よりし此集の名を武家より作せられたるよし申すハおのれの孫おやのおほやけの姪男也○部立　春上下

夏　秋上下　冬　雜春　雜秋　羈旅　戀自一至五　雜上下　釋教　神祇　慶賀○数積　千五百四十八首

新續古今和歌集　二十巻　四本

百三代後花園院永享五年中綸言に依て飛鳥井大納言雅世これを撰す其名序仮名序ともに一條攝政兼良公の作也○拾芥抄云上古以来和歌可令撰進給者依天氣言上如件　資任謹言右中辨資任奉　進上　飛鳥井中納言殿　同十年八月廿三日四季奏覧同十一年返納せらる○撰者雅世ハ雅縁の子なり栄雅の父なり此集の功をはりて此集のはじめに仮名序をかゝしめられしかどもやすからず御世にはまかでおほやけごとにおよびけるを千ひろのつゝみにしたがひかくてなりけり永享十一年八月廿三日になんまゐらせてきめられし○此序の後にも廿一代集といふ○元亀天正の比ほひまで末乃集このかたつゐに勅撰なし

らく○部立 春上下 夏 秋上下 冬 賀 釋教 離別 羇旅
恋自一至五 哀傷 雜上中下 神祇

續古今玉葉風雅拔書　三巻

第一 續古今 第二 玉葉 第三 風雅 此三集の歌をぬき出して連歌付合(シケアヒ)の用にそなへたる西順(サイジュン)自筆(ジヒツ)のまゝ刊行(カンカウ)せしものなりとそいふ

新葉和歌集　二十巻四本

南朝は村上院の御子は醍醐(ダイゴ)帝の御孫長慶(ケイ)院の弘和元年に中務(ナカツカサ)卿宗良親王これを撰せしめ給ふ親王は後醍醐帝の御子にしておはすなり和歌の道に御心(ミこゝろ)をふかくよせたまへりし○巻末に勅撰集に擬(ギ)せしよし綸旨(リンジ)を収載(シウサイ)す○假名序宗良親王の御作にて序の詞も古今にならひて呉竹(クレタケ)の代々の御つぎをかたるに人まろにむかふとも三代の御つぎ(?)こそのしれたまへりしなひてはなかなかうちかはしのもとりもしかあらんに玉のむかしをかはしめしは世のなかもうちはぶきすとひえけむものをとそれきんかとのみのこにはうすめる今はしまねのさりくべき山にもかけまくかしこき老のみを(オイ)もなぐさめたりし末の世までものこさんためにこゝに弘和元年のまつりごとなくして世乃みちのあひだうけたまはりおほやけ弘和元年十二月三日これを奏す(?)

うめめる今はしまねのさりくべき山にもかけまくかしこき老(オイ)のみをもなぐさめんためにこえ弘のたしめす末の世までものこさんためにこれは世乃あひだうけたまはり弘和元年今よりさきおほやけのいはふことのそこかしこ えらびしるしてもちはべりしそこにおもふ和歌集となづけくれる心もしかくなへりおほくはひとつのうたをおほしたりのちのかたこそとおもひさだめしもてはこびしがのちのいかなる御ことにはありけむ かくて今勅撰(チヨクセン)になずらへ(ベき)よしのみことのりをかうむりてことのひのぞうえんよろこびのかぎりなきによりてこのあつめたるうたどもを弘和元年十二月三日これを奏することとなりぬ○今此刊本(カン)承應二年の奥書あり

私撰類

新撰和歌集　四巻　二本　紀貫之

此書ハ古今和歌集撰集のはしびの集乃中よりてえらみすぐれたる歌どもを撰びつぎよし中納言兼右衛門督兼輔ノ勅を傳へて貫之に命せられしが其ほど土佐の任に赴きしかの國にてこれを撰せられ任満て帰京ありしに醍醐帝延長八年九月に崩じたまひしかば奏覧に達せずしてやみけるとかや此歌集ハ真名の序ありて自序にみえたりその序に云蕃頭従五位上紀朝臣貫之上ルとあり序に曰抑夫上代之篇義尤幽而文猶質下流之作文偏好而義漸疎故抽始自弘仁至于延長詞人之作花實相兼而已今之所撰玄之又玄也云々爰以春篇配秋篇以夏什敵冬什各相闘文両両雙書焉慶賀哀傷離別羇旅恋歌雑歌之流又對偶惣之百六十首分為四軸云々○此序によりてみれば古今集乃うちより中えらみ

うしろなき世々にえらばれしうたゞひハ弘仁より延長までの作者の哥
をあつめしなり
巻第一 春秋百二十首 初ハうぐひすのなくにはじめて秋霧
と目ありやあらしのつゆとなりしのせ 巻第二ハ夏冬の哥を
一首づゝならべのせ 巻第三ハ賀哀傷の哥 巻第四ハ恋
并雑のうたを類をならべのせたり

續詞花和歌集 写本 二十巻 二本 藤原清輔

清輔父顕輔は詞花集を撰ぶ 二条院の御時にも此後撰集
を撰せられしに二條院崩御ましまして勅撰に准ぜられず
拾遺の趣を此集の巻尾にも此趣をかける 清輔乃
漢字の跋は又其巻に俊成卿の正治奏状に云 清輔か後撰集を
あながちに撰ぶの中ありて二條院の勅撰の中からんとしけれども
しかも俊けいの上りしに 此俊成卿の説ハおの説によりて撰
○自書ハ以九條三位隆教本を 撰者自筆書写校合畢 又 ○部立

春上下 夏 秋上下 冬 賀 神祇 哀傷 釈教 恋上中下
別 旅 雑上中下 物名 戯咲 ○歌数 九百八十八首

雲葉和歌集 写本 十巻 二本

撰者詳ならず 巻末に家隆つかさく家持人丸等の哥より後嵯峨院
の時代の哥までの哥を撰り ○部立 第一 春上 第二 春中 花部
第三 春下 第四 夏 第五 秋上 第六 秋中 月部 第七 秋下
第八 冬 第九 賀 第十 羇旅 ○已上歌数 八百七十四首
○按ずるに恋部以下闕たり 全部は二十巻なるべし 今存するは
かられでし

金玉集 写本 一巻 大納言公任

四季恋雑をわかちてよめる七十八首の哥を此の世々の作者ハ
躬恒 忠岑 重之 中務 忠見 能宣 貫之 業平
花山院 伊勢 高遠 友則 安法法師 人丸あまた撰ぶ
巻首に撰者の名なし 俊成卿得業生柿本末成撰と記せり公任の

乃作名なるべし

玄々集　写本　一巻　能因法師

能因眞字の自序あり永延より寛徳の比まで上王后より下士
女に至るまで○作者ハ一條院　三條院　後三條院　後朱雀院　四
代はしめとなり○此集作者を以て漢土の詩選の例に
似たり　圓融院御製二首　長能十首　清少納言一首　花山法皇三首
水魚瀬女一首　道命阿闍梨一首　かくれたる人名ハ歌の頭より出
はぶく事あり

玄玉和歌集　写本　七巻一本

此集ハ序なし採者つまびらかならず序の詞にいにしへ近き代
の人々歌をあつめて玄玉和歌集と名づくるよしあり十
二巻　しかれども一の巻神祇歌ハ○をつけて釋教をわけたるよし
第一　神祇歌　第二　天地歌上春夏　第三　天地歌下秋冬雑
第四　時節歌上春夏　第五　時節歌下秋冬　第六　草樹歌上春夏

第七　草樹歌下秋冬　以下闕なり　作者ハ　俊成　慈圓　定家
家隆　俊恵　有家　乃因　雅昭なとし○奥書　延暦二年書写
散位中将祐仲これをあつめたり

今撰和歌集　写本　一巻

採者詳ならず四季恋雑にわかちて　法輔　雅昭　雅廣　俊成
につのちどめ此名をし　登蓮　小侍従なとの歌をのせたり

柳風和歌抄　写本　一巻

採者詳ならず四季恋と次第して其の部の奥より下へ並びあけ
たり　作者ハ相の兼ホの時代と見えたり

夫木和歌抄　三十六巻　藤原長清

此書ハ遠江の住人勝田越前守藤原長清　法名蓮昭の撰し昔中
比の歌にていまだ家集なとにものらず代々勅撰にももれてありしをひろ
ひあつめしものにしてその趣意ハ今よりはのち勅撰のためみち道をしへて
かくしおかんとのことなりとて世にあらはさずしてかくれて夫木和歌と

名づくる事今案によらず此鈔の名は古案にして出しよりそこ
なる義は此中に白衣の老翁一人来りていはく汝が撰するところの和歌
の於は我朝の重宝なり末代の龍歌なるべし和国の風俗なれば扶桑
集と名づくべしといひて消えうせけりと云々これは誠に然るべく覚りけす
ることそひかれど称へられ和歌の名を附しめし中納言匡房卿に
そのしよて義をあきらめよしかば次の書つぶさに相でよせられけれど尚ほ一て
せる希代不思議の霊夢末代の奇特なりしに秘府の深秘のなりと
但し扶桑は日本国の惣名なれども此なりけるぞ一し扶の字のつく
桑の字の本なりより此からせて夫木和歌集と名づけられけるとかし
とそく長清存生の間は秘蔵して外見に及ばざりしが逝去の
後高駿河守なにて依て一本書写す其後武蔵守師直一本を
書写して両本都と鄙とに散在すといへども已上跋に與へるの
趣なし○部立四季恋雑をのぞく巻首に目録を挙て大むねの意を
あらはせり雑の部ことに多し○此書写本刊本ともに誤字多し

與中の枝なり

夫木集抜書　二巻

浪華の桑門西順か集のもちより連歌の付合になりうべきを
ぬき出して刊行す

夫木集類句　写本　三十巻

山本春正が古今類句の例にならひて此書の歌の下の句を以字数い
ろはの次第によりならべて考索にたよりす

歌林拾葉集　十二巻　四本　小幡正信

夫木和歌の故事故語をあつめてこまかに和漢の書を引
て注釈す西順書写の本をもって刊行せり

藤葉和歌集　写本　六巻　一本

よつて此撰集のさまは歌をあつめて四季の部の次第をわかち已下八
部巻々卒業なりしかど未だ大成なくして撰者未詳○一本奥書に云新葉集
藤葉集風葉集これを南朝の三葉集と號すとぞ○又一本の例

紙にしるして云 此集撰集の時代年紀并に撰者等つまびらかならず但し或説に云南朝の撰集といへども此集に見ゆる作者及年号など多く北朝によれり按ずるに後醍醐天皇吉野の行宮に於て此撰定ありしか又云此集始終全篇不遂して止らるゝは乱世なるゆゑ也○今なす所は四季の歌のみ六百二十七首

風葉和歌集　写本　十八巻　四本

此書は撰集の體になしてひろくいにしへ今のものがたりどもにあるうたをあつめたるものなれどものがたりばかりはうつしたれば又すなはちのがたりぞ其の六義にもとづけるもあらずとて風葉集と名付られし也序によりて又序の後に云これよりさきにある物語の撰集に入る人は河ほの作といへるも拾遺集に入人はそのかたに入あひの逆歌は小一条院の御子とも云 此序の終に云なれど其書のやうせちにかゝずしてほとんどこれ故なるとはいふべしとあり○此集撰者つまびらかならず全部二

十巻の中十九二十の両巻闕たり○部立 第一春上 第二春下 第三夏 第四秋上 第五秋下 第六冬 第七神祇 釋教 第八離別 羇旅 第九哀傷 第十賀 第十一より第十五まで恋一二三四五 第十六雑一 第十七雑二 第十八雑三 已下闕 ○歌数今なす所千三百八十首 ○巻尾に元禄三年庚午中冬露睡子の奥書有り又備前ノ野村尚房の跋ありて云 或説ニ云風葉和歌集者南朝之御時於テ吉野山ニ皇后所ニ撰著スル之物語ノ和歌而ニ二葉集之一也云云然ルニ序中ニ奉リ國母ノ仰ヲ千歌餘二十巻文永八年進獻スト之云云 非ルニ南朝之撰ニ可シ知ル之ヲ撰者誰人乎可キ尋ヌ之者也云云 宝永四年丁亥冬十月散人尚房 ○尚房一枝軒と号す梅月堂宣阿の門人也 ○此集の歌乃作者作ものがたりのなをしるして其物語の名をもひはその主をしるせし代々の名は書つくせりしゆゑにまぎらはしく作りける のちの名も右大臣 明まへてくらく子曰に作りける者のなひなき 何ほの行幸 かたくなゝし今ろの

物語の名いつゝ八巻の名ともは此集に出たるものを左にしるして古
きあとをもあはせ考ふる一助となすのみ
かそへの志め中宮　源氏のすさくゐん　河原の右おとゞ　仲頼
おちくぼよし人大将　まゝまゝのねよし人大将　いせの一条院女三宮
志したゝりの女院　志のぶもちずり右大臣　大井川中納言宮
ひかるかゞやく日の宮中宮　うきなみの若中納言妾　さかけ刈の関白
末葉の露の皇后宮　いはでしのぶ麗景殿女御　こまのくれ竹侯
雲井の月の女三の宮　ひちぬいちの女三宮中将　大井川乃中納言
女すみの若右大臣　梅めけの中納言　いはでしのぶ三位中将
いはらしれ皇后宮　志のぶ草の入道宮　大ぎみやどりの中将
おやこの中の院　いもせ山やの太政大臣四君　よそのおもひの院
いはもりの大納言　ねざめの関白　よそのおもひの院
あしたの原の内大臣　四季物語中宮　川音の内大臣
あさくら中将大納言　なぞへもあ皇太后宮　いはでしのぶの源大納言

かくれみの六の宮　みかさ山の内大臣　雲ゐの月の左大将　菱浪よし大納言女　くりふの兵部卿　みつせの中川中納言　たまもにあそぶ関白　こまのなかのの若宮　いはやの右大将　ありあけの太政大臣　かはづの三位中将　とりかへばやの関白　わかれのうちの大将　うぢの岸下の宣耀殿女御
ゆめ志るしの乃みかど　風につれなきの宮の民部卿　さころもの宰相　こゝろたかの宣旨　さころも乃あやし　源氏のゆかりし人大将　世にしたがふの左近府生　秋の夜ながの右大臣　はなやかりの大宰権帥　むもれ木のおほい　しのねのさいの大将　藻に住むしの権中納言　あはぞりのおとゞ　吹きまふ風の峯の中将
みづからくゆるの入道式部卿宮　はなざかしの源中納言　むぐらのやどの中将　なまめかしの三位中将　こけのみの右大将　ふせやの若狭宮　たゝずまひの中将　はつせの康　なげ月のかぎれ乃中宮　くれせ川の新中納言　別当乃さくらのみや　志乃ぶの院　菱かりの前関白

いそぐ濱の中納言
秋はなほしとまずの帥
はちび貝の左大臣

ちくさ川のなかの君
みせさぬの内大臣
こゝあつ菱の大君

かくれみの侍従
身すつる頭中将
すゞめは拾遺の中将

はれさくの大納言大君
つらこの式部卿宮の北方
うたゝねのうつしの尼

そぞろ川めうのこゝ
あひ住しき内大臣
有明のうらみの帥

すゞしひの侍従のすけ
露のやどりの按察大納言
いそやは左大将

しら露ぬの中の宮
竹とりのかぐや姫
のじまの三位中将

はなさくらの太后宮大納言
ひとりごの弁の女御
あさ浅の中関白

みせ左の真にし北の方
つらすゞめは左大臣
やまづきの三位中将

みせこの源中将
はなかてよき鹿子川の右大将
見はてぬあふのかみ

うちの代川は右中納言女
いそしほ川の社の大臣
母はなしの登華殿の院参子

苔れ八重むき按察大納言
御かみしすの准后
松浦のよは参議氏忠

かゝるとはめゆの按察大納言
やせ人の法つのすけ
あのびねのこゝろ

みかんすゝみ右大臣
のちくやしの御かど
ゆきのみかど

月乃みかど
露ふかゝず右大臣
衣浦の頭中将
鹿とはぬせ大納言乳母
秋身かゝるの女院大納言
うきのはもれ右大臣
みかの源大納言女
よし乃ゝの中宮
なきつゝの内侍のかみ
はしの御の新撰帥
こゝろのまゝに
まれ人の武蔵の親王
ものおもの侍つき君
めぐり逢ふれかな

こゆるぎの大納言
小金ちらめの女院大納言
小車の麗景殿女御
水あさはの冷泉院
いそのかみの朱雀院
はなちるの尚侍
あさぢの院
桂の関白北の方
なみだにすめる霊景殿女御
やまのゐの大納言女
志げりしほの中納言
そしのびの母
人だつ乃このかみ
かくれ家の女御

こがくれの源宰相
右近の桜つぼの女御
ちかひつる按察使大納言
世ばかりの女御
藤ねの左大臣の大政大臣女
めぐみ后の宮
すゑしの関白北の方
よもぎふ宮の左大臣
女乃すせたちのまつのおと
はなぞれの中宮の主殿
里のあかの武蔵のこの大君
志のゝまの太政大臣のむすめ

いしろの宰相　あさくらの秀才(ミツサイ)　初しぐれの中将
ゆめあは中納言女　ときはしもりのおとゞの女
夏引らいちより入全か　夢見あかしのはなさきの八　石山の大将が母
はかなくやむ源大納言女　たいすくしく人志や　さくや此手つくだまつて
ほのめかしの内大臣が方　川のおとづの中うし人　やえむぐらの左大臣
人まちわびの大臣　んかけちの内(?)のみし　こゝひろの(?)みかど
ほどゝの(?)かけの式部卿親王　錦の(?)の将中将　芸乃衣の一条大臣
たゆしなきあの中将　有ときの姫の乳人が方　老人のうらの源大納言
二葉乃松乃中納言　こぞしきの大納言女　あまくだりの左大臣
二条の源大納言女　かりの太郎　烟のたつのうへの女
松のなかのしきの女院　人やらの秋の少将　花ざくら此中将
すゞ(よし)せものひじり　う浦の烟の中納言女　世ながちの川のほとり
見はてぬの乳人が方

古今和歌六帖　十二巻

一名紀氏(シ)六帖　貫之女子(ヨウシ)の撰なり　故に號(ス)紀家六帖(ト)兼盛重之等歌載せらる又云和歌四千六百九十六首此中長歌九首旋頭歌(セドウカ)十七首但なし不定也云々

第一帖　歳時　天　第二帖　田野　都　田舎　宅　人　佛
第三帖　水　第四帖　恋　祝　別　第五帖　雑思
服飾　色　錦綾　第六帖　草　虫　木　鳥

己上紀乃題をもとしてそれ條々の下に題の題をかけたり

新撰六帖　五巻

家良　為家　知家　信實　光俊　己上五人六帖の題によりてよめるなり　作者の名の上に點(テン)ず青黄赤黒紫をもて點を加ふなり

袖中和歌六帖　二巻　小澤蘆菴

古今六帖新撰六帖の題によりて五首づゝ載(ノス)撰者みづからの歌をもつて題下の歌(カ)にすゑつゝ契沖の校本

まへうり　小川布淑序　寛政九年六月刻

材林和歌集　写本　五巻

採者つまびらかならず自序にいへるは春の野のつばなをぬきてぞうるぬきにもあらぬ書なりさてここに三千百九十餘首あり万葉集を初めじめく古今は採拾遺に及びなしびに紀氏六帖歌仙三十六人の家集堀河院両度の百首のうち後拾遺にさへ若般の集後撰拾遺の家集ハたくさんに萬葉よりとりてあらはすべきものにてこれはろつなり

第一　天象部　天の示　日月　ほしより　つゆ　霜又　大隊　虹まで

地儀部　山　岡　谷より　寺　墓所　神社　仙境まで

時節部　春　夏　秋　冬　朝　晝　夕　夜　曉

第二　居所部　都　大内より　家　そや　山家　田家まで

人倫部　親子　男　女より　たくし　のうひ　友まで

人事部　恋　祝　離別　旅　述懐　夢　擣衣　遊宴　等

第三　衣食部　衣　帯より　酒　飯　薬まで

器財部　琴　笛　弓　太刀より　つり　縄　烟まで

第四　草部　草　苔　竹　等　木部

第五　鳥部　獣部　虫部　魚部　等と　あつしまでれあふ（まで）わかれあふ

河まで也り

温知和歌集　写本　一巻

雑経定家より逍遙院徹書記宋世道堅ホ乃にいたるまで四季恋雑混雑して次第せり何人のあつめたるにやつまびらかならず故さながら温わく新しきを知るの語によるか

伯母集　写本　二巻

此書も四季恋雑の次第なりて集めし作者の名諸にしるさず其中に徹書記の名をもしるす○一枝軒寿甫といふ伯母集ハ或説に一色集の伯母乃作しるし集の體古今已下古歌新歌近代に至る作者をあつめたるなり

林葉累塵集　十巻　五本　下河邉長流

此集公家のうたを入ず武家の集ともあらず農夫あき人桑門
のともがらまでのうたをとりて四季恋雑と次第
して撰集のさまに編て歌ね一千三百六十餘首のうち長流が
うた歌をも百五十餘首入たり自序に世に名をもらしたる
人はよにもなかりけれバあらはれぬたぐひのうちにうもれてハかれもこれ
歌のすがたうしなはじとてその八十氏人おほくあり
して何ハ今まてなげきしてあるハ六田まうでする凡夫何ハこの
しき歌にてはあやしくもあれ捨人のうたのさまさてありけれる
とばこれ撰びいでむとし此集をまうでしてつらんとし付あつき
代の人ハ撰えらぶべきの集ハ古今よりは十五六代とうちかへるのか
うたまのがらつきたる乃集ハおもむきもよくこれ撰集をまして

萍水和歌集　十巻　二本　同上

しりん歌抄どの世じとすらく

これハ累塵集の拾遺にて其集成てハ遠きにてもよりも平生
ものすてがたき詠ひつくくのせたりこれハ時代ハおくしらず
されども牡丹花かたちのごとく拙なくもけがらひこれはまじく序なくてその趣
意趣のつてに安中の歌おほく入たり

家集類

歌仙家集　十五巻

一名三十六人集といへり大納言公任卿の撰しける歌仙の人々の家の集なり定家卿の詠歌大概にことにみならふべきものは古今 伊勢物語 後撰 拾遺 三十六人集のうちことに上手のうたこゝろにかくべし云々 自注に人丸 貫之 忠岑 伊勢 小町等の類とあれども今世間に流布する刊本写本ともに定家の時代のものとハ見えず好人の附会したるとおぼしきところおほし ○按に拾遺集の序にいはく大納言公任卿むかしのうたよみのうたをぬきいでゝこれかれとくらべさだめてうちがきをいはしむ又うたのかずいのもとかうへのうたをえらびてこれ公任卿三十六歌仙を撰まれたる濫觴也 ○按ゆゑに三十六人集ハえらびしにあらずはじめの人のいひつめたるもの

はり貫之集などのやうにえらびしにはあらずたゞいにしへの
まはんおぼつかなきうたどもぞおほくてはふにはつめてまうきを
まなび残らざるはしらず又藤原秀喜撰黒主貞文棟梁元方千
里深養父忠房等を除きてこれらはみなまぢきはの作者を
入られたりおぼえておぼつかなしそのうち千載集雜中に大
納言実家のうた十六人集をよみて又かはりけるやうに
故大炊御門右大臣此集を作りけるきこしめしてかりつけれ
く作りける　大皇太后宮よ
新撰のうたもありつめぬることのはをとめれ枕のうち続
かし　後大納言実家
うめりしよかくことのは聞きてひまなきうけのなきうらみを
かきしものまゝ此集とものゝ此名はすこしもこれにもぢめりやう

柿本集　二巻

人丸の集也　下巻は国の作名ならび隠題にあつめたる六十六首

はり丹後筑前の両国うけたれど壹岐対馬入ざるゆゑに六十六
首となれり壱岐をわれてゆきしけるちしよ御ことばがき
ていはく　柿本人丸はうたしるせる京極をおくるけるをとく
のぼりんとしるひりわれどいさゝかさりのうたえのぼしぬよ正月
まつりなるまゝにていと春なかきことにしなくなくさあそびる
さころのよまはるゝ家の名相よしけることれなんわかりるよまるう
らさうつまでうためんじかきとところまれてかのてりけるく○契
沖曰人丸の集ハひとつよ信じかたきこのやうもありくく万葉集
のやうめしあてぬるまでぬきいでてらぐ六十よらくとこのみ
まとめきさハことゝ角ゆまたちぬものしされども後のすぎさ
延喜天暦のはれ作者のまじるさなかるべし○雅嘉按ずるに此国々
のうたは才二首よやまよ相よあまと
新撰万葉のもりんいはしての中乃歌も志けるともはゞ
此哥拾遺抄よえ輔として一首入られども此六十六首の補の

すなる物はけんこうぎさなるて人九集の中に収めてなる
べし契沖拾遺お物考へりしされすまやるの伝となれず

躬恒集　一巻

延喜時代のうたよみ入りし此集まなり

素性集　一巻

此集のうちよ天暦のみかどせさせたまひし河内のふみに宇まま
せたまひしにめんとやしにをしまぜたまひしところせか
あさんてはよろしつけさせたまふ
續々あるをしこのままひかしようおりへくつてぬ
契沖か此天暦のみかどせさせたまひてはかに時代お遠きうへ
ぐよしよりと八素性のすみれさいのよみの良因院かれぞ
良因物和訓しくつけさせまひくろせいはよしま寸まて
今まであしとかれしの降らかるかしおこのそとし八方の学も宇
ありさしもおさしてなづけたまふとよりは云へとはべく

ならんで物おもしまゐせんまでもさるべきすね因なかりしてかずろ
こ物おひんとよりしいつりや○雅玄旅梅すまよ寛平は
金歌の跳物仍むの時に村は物良因物まは後せまりてよ
てめさゆくむしようれ鈔とこじせし也くまやハ昌泰之
年十一月廿一日のもし清補の撰草子まえりて

猿丸集　一巻

契沖か此集の中古今集のよみくみしたもの歌あまた入るう
ものせよ
春のよ自つかもあらはよまたるかけしやすきみのひ
此まりより古今集その人まてずおもしき緒此集の中な
らず家持集も入り

家持集　一巻

此集も古今集のよみ人すしまおをかへりつ
もまたこころさる故とりおよさけるまるのきもひやとえ

契沖云此集は家持卿の長歌のもじを抄出せる物なるべしといへり

業平集　一巻

大抵古今集より出たり○契沖云此集の哥は
前はいつれもあやしきものにて業平の哥とも見えず
いせのものがたりより出てはべれど
なのめならぬあやしきまでゆがめたる所おほく人は注あやまてり
寸白などは撰集にもなきうたを雑したれど其まゝ批把大臣中納言
公ありしとぞ此人伊勢を通はれける業平が代つて伊勢物語
集にも批把殿かれぞなりけりといふ事あるべくして撰じにくきは
せる人の誤写ての古き本にけふ氏も藤原をとりてありけるの
いかでかもありはれもせず批把殿はちかく撰の事とも及びあるゆゑの
ありし○雅喜按ずるに更級日記にも在五中将集に今の
かねすけ家集のうち業平集といふ事なるものなるべし

兼輔集　一巻

敦忠集　一巻

此集の奥に
これはこのたびかくなしたるにもあらずはしるしをも附けたりしや
契沖云此集は小町集も小大君集も發句滅のあしくなれり

公忠集　一巻

これも書写の書き様をひとつにて作りて書きたちるなれ
さうし一本をよみつくしてゆくらしと考ふべし

齋宮集　一巻

宗于集　一巻

清正集　一巻

興風集　一巻

是則集　一巻

小大君集　一巻

奥に新古今より出たる哥を附す

敏行集　一巻

能宣集　一巻

此集ハ人のもとにつかはしたる哥多く入たり　友人江田世恭いへり　予いまだ見ず

兼盛集　一巻

貫之集　二巻

此集ハ部類なく延喜延長承平の比の哥を人々よみ給ひしまゝにのせたり○契沖云貫之家集大鏡によりいだしけるといひてはば拾遺集雑四につらなる貫之が集かくして返すとてよみ侍りける　恵慶法師

ひとまきにちゞのこがねをこめたれば人こそなけれ声はのこれり

かへし　紀時文

いにしへのちゞのこがねはかぎりあるをあふはかりなき君がたまづさ

かくよめるを見れば貫之が集ハはやく世にちりうせたりけるにや

あらたにえらびけるのちなれば此集ハ古今の後の哥多くのせたり　ときの哥ハ雑の部に多くありて僧正遍昭が女よりも家の集なりしのちにえらばれたるよしいへり

伊勢集　一巻

契沖云拾遺集雑秋に天暦の御時伊勢が家の集めしければまゐらすとて　中務

しぐれつゝふりにしやどのことのはゝかきあつむれどとまらざりけり

詞書し

むかしよりありけるも此のちもれこれかさね落つればこそ

かれこれ集も入りけるが中にはおほくみえざる事ども

いまあるハそのかみの本にはあらぬにも録しおく

赤人集　一巻

遍昭集　一巻

源順集　一巻

此集は天禄歌合のころ人々よみし順がよめる和歌の題序並
よみものせられ○契沖云内記あるの代歌序がかくべきの本なし
ことわりあり
考られるなきこの歌のうち孫志川あるよみ掛まぎれや八尺る
ものつかは
かみとの和歌をもつしぬあさけれの哉さつまつ志川にてめかん
右の例とて歌新古今集にあやまりて順のことのせしるとく

元輔集　一巻
朝忠集　一巻
高光集　一巻
友則集　一巻
小町集　一巻

本居宣長此勝るは小町集八いともうけがたきものなく小大
君が歌の多くまじれるは小大を小町とまがへしりしつかなるへしと
新古今にのせし小町集よりもいとく入りまじりて
混かりみに栄花物語なしまでぬ叢乃をも侍りつかしなきたね
うつそらつるものによりし人春ゑの女ある人小大進ともの前は條
被なりし歌小町集もあるとく

忠岑集　一巻
忠岑よりし、此集はなぐさとの多し今此本の奥にも雖入集
不見家集歌として入る

頼基集　一巻
契沖云此集の中朱雀院御屏風子日に和歌詠ける歌にとき
子日するのを通ふ松かげにつまてしつるやまとみとかひすゑかし
此外それを集むる能宣もす彼あるもみなしいつく

重之集　一巻
此集は百首のしるんまわりて人にて百首よりるは古き集を
てハ此人もしめともてをもし契沖いつあましく常かをて候

信明集　一巻
時なふく歌よみしれどあまき

元真集　一巻

仲文集　一巻
集のことも俳諧体なり

忠見集　一巻

中務集　一巻

已上三十六人歌仙家集なり

三十六人歌仙歌集解難抄　三巻
歌仙家集の中にし解しがたき歌の解し細川幸玄旨法印の作なる或人の附注あて本は奥書ありて三十六の家集ハ常ならずらつべきよし詠歌大概に見えれども大部なればたやすく見がたしみえてよくおぼえねどもとらずとも手にて詞をとるのは今用捨して童蒙のためとなし伝ふるとの可秘とし天正

十七暦林鐘念二日　法印玄旨在判　○此奥書の趣意貞徳の堀川百首肝要抄の序にもみえたり　元文四年刻す

菅家御集　写本　一巻
菅原道真公の歌数書あつめたるもの多く写本にて種々あり紙数もすくなし淄濁并の秘歌妙法天神経のごとき夢想の連歌なども入てあれど偽書なり幾程もなくして古今集の類字名所補翼抄などに引る菅家御集ハ此一冊のよし聞す故に古写本なるもの又菅家御神詠七千首の中の秘歌百首といふものは中古ものの作の類なる耳

元良親王御集　写本　一巻
底訳も百首の中ハ信せしめもしるす

西宮左大臣集　写本　一巻
他人の歌しるしもよ百六十餘首入す

高明公の集なり 治承三年七月二日書写挍合 又建長五年四月廿三日貞観の本をもつて書写挍合するよしの奥書あり

大江千里集 写本 一巻

はじめに真字の自序ありて それより百餘首おもしろく白氏文集の詩句を題として今ここに家集といへり

伊勢大輔集 写本 一巻

奥書に従三位行治部卿平朝臣判とあり

康資王母集 写本 一巻

一名伯母集と称す 此伯母集といふもの今一部あり それハ平某のむすめの伯母のよめるなり 一枝軒尚房の奥書に徹書記のしるし或ハかきくはへたるものあれバ他者をまじへたり まづしく入りまじれり 今ハ伯母集と称すハ康資王母のよめるなり 又類聚の内に類名なるも所あり

祐子内親王家紀伊集 写本 一巻

前大納言公任卿集 写本 一巻

此集のうちに左京権大夫百首の中廿九首入れり

加茂保憲女集 写本 一巻

はじめに長き文章ありて もじさへうるはしからぬよみ うたどもはかきつらねたるもの也

経信卿母集 写本 一巻

大納言経信卿の母ハ権中納言道方卿の室なり 此集の奥書にのたまへる此経信卿の母乃琵琶の上手なりし事 その子の経信卿も悦学をもて多芸なりしが 琵琶の名人なりしも大井川の三船をのりし 牧馬玄象勝劣の事を奏せしもこの母のをしへによれるものぞとぞ 此母のをしへによれるなるべし

赤染衛門家集 四巻

此家集ハ江匡衡の妻のよみしうたどもなるべし

刊本ハいとあまたあとさきにみだれたるもあり

曽根好忠家集　一巻

又ハ毎月集といへりそのはじめに毎月の序ありて一年三百六十首

のうたあり かはりはいづれのあつめたるものゝ類なるにやまたよ

めるは十首のうたとかぞへあり此刊本ハ下河辺長流の校本なれ

どなほ誤りもしつくしてはたさず されど此刊本今世におこなはる

一名曽丹集ともいへり

紫式部家集　一巻

式部のうたをあつめたる御堂関白道長公のそばにありしころのうた

もこの集にのせてあり 紫式部日記とも見えたり

六家集

かぞへてあるし

俊成卿の長秋詠藻　後京極殿の月清集　慈鎮和尚の

拾玉集　西行法師の山家集　十八巻　定家卿の拾遺愚草

同員外　家隆卿の壬二集　以上六人の家集なり

長秋詠藻　二巻

俊成卿の家集なり皇太后宮の大夫なりしゆゑ長秋の二

字をもて集の名とせり漢土にて皇后の御殿を長秋

宮といひしによりてなり

月清集　四巻

後京極摂政良経公の家集なり此公仮名を式部史生秋

篠月清といはせたまひしによりて集の名とせり又此集

のうちに南海漁父西洞隠士などいへる別号もみゆすべて

除目の時仮名せしことはいにしへのならはし烏丸家伝説なりと云云　寛文年

中奥書に此一冊以東山長嘯公翁本書写了云云

拾玉集　七巻

慈鎮和尚の家集なり刊本奥書に云　和尚御詠類聚之事

右十月中浣とあり

度々御百首を嘉暦之頃類聚已訖今所ゝ残懐紙旧草
自然擬作諸人贈答等也重集之御瑚子九人令清書之
と云 貞和二年五月廿二日吉水末流尊圓親王記 ○慈鎮和
尚もさまざまの作名ありけり 此集の中に花月百首とハ楽門時
貞とかのミ建久二年の百首ハ学生安成とす 住吉社百首
にハ我立杣門人三部傳法阿闍梨とかく建久五年の百首には
ハ比山樵客とをし又禅林かき木ゝ志賀都逸民心法金剛流轉比
丘往生加法師九西山隠士信光なともかけり ○第五巻建
久六年前右大将頼朝卿と贈答の歌あまた首入てあり

異本拾玉集 写本 二巻

初巻にハ春日 難波 送佐州 四季雑 秀歌 厭離欣求
句題 略秘贈答 古今哥百首 神主康業百首 能季卿に
代る百首などをのせ後の巻にハ種々の哥どものせたり 此本刊本
よりハ歌数すくなし いづれも刊本にあらざるハ今得がたし

を往生傳の九品のそりかえ人のもとへ入てあり 初巻の奥書に云
右慈鎮和尚御詠等採摭旧草仰慶運令類之 斯言若堕名ハ
将来可悲ゝゝ 今任先賢之金言令集 祖師之玉章一偏
存真俗一致之旨莫貽内外異論之嘲 于時嘉暦之年
五月廿一日 難波津末流我立杣不才 尊円親王 判 記 書進此草
子之次慶運詠云

あひにあひくきみそろしいにしへのまけひりや君がもろこえ
かしはきもしらのふゆよきさつあくいくよかりけるたねかおもん

よし

いにしへのあをりなさしるて袖うらけんけふのもりしひ
ありつらする友うれしきかかりしの末をみかのあぬえらあれ
梓するに此贈答多く拾玉集と名づけけん心なるとぞ

山家集 二巻

西行法師の家集なり 今刊本の六家集の中の六家集ハ

後人のはつれてうくミうりきこゆるも多かりし○
古写本の目録よる家心中集とちてゆへいかなるものか
いまうんずれどもいまだ見およばず

異本山家集 写本 一巻

予が蔵するところは古写本にて利がよりいみじくすぐれ奥書に
まま此集周嗣禅師不慮被相傳西行上人自筆之處於
法勝寺僧房焼失間尋他本書写之
けれどもあやしき事もありてみる事をなどもとしかりよ
此西行上人集蔡花園上人此本巻始和歌十一首銘興書号頓阿
副一首新野被灑翰黒墨也雖汁消遺恨之心爪聊擬残芳
之手澤而已 観應二年七月日修行者周嗣判○雅春按
するに草菴集によりて見くらぶるに周嗣ありし人自筆
の山家集は法勝寺僧房の火のためにやけ
きゆれば又料紙の様などよりのぞくしてたがひもかく

侍りしかど是は此うちにはなかりしとあるを又
按ずるに頓阿の高野日記に西行上人のしりたまへるかきたま
へる山家集は周嗣にあつらへ置けるが法勝寺僧坊の火
の時焼侍りけるよし書たるはこの奥書にかなへり
侍りし此外にも誤もしくはあるよし書ありたるは考へ合
すべく予が蔵本の山家集などよりは猶まさりて見たるもの
よし自撰のにはあらずとぞいふなり ○周嗣は禅僧よ
千載集よりも後の頓阿時代の人とおぼしく其の中乃
人かなり

西行法師家集 二巻

山家集とは異なり抄出にて尤もすぐれたるものもあやまりおほし

拾遺愚草 三巻

同員外 一巻

京極中納言定家卿の家集なり建暦九年侍従の時

ゑらびし名づけし号とせしより拾遺ハ侍従の唐
名なり建久年中およびハ建保の比の事なり異邦の鳥
ゟハ百廿八首の讃歎七言律詩の韻哥なりとて○烏
丸光雄卿の口授にて拾遺愚草かのこしよりのかれ
ども見んとせしと○中院通茂卿にて拾遺愚草の名の
御五文字をぬき出しくちつきをあらはし
ますとて出せしよりて全集にわかさまれんであくしより
溪雲問答にみえたり

壬二集　三巻

従二位家隆卿の家集なり壬生の二品とよばせしゆへ
壬二集といへり此集の名ハよくせミ二シフとよぶべ
きなり光雄卿の口授なり家隆卿古今の名人にして
秀歌あまたよミたまへて六万首をよみしといへり今伝ハ
るハわづか二千首斗なり○文此集の名か王吟集とも

いへるよし此の名集のこえかゝし○巻首に位署法
性とあり嘉禎二年十月廿二日病に依りて出家七十九歳
名佛性同三年薨八十歳云々

為家集　七巻

これハ藏する所の古写本二冊なり四季恋雑に分ちて
奥に百首の事を附し其ほかのあつめうたものせられ
凡神のすがたをもそへたれハよむ者のことし新撰
六帖ハ大木ハおよびしちの千首なとも其ほかのあしく
へりし○職仁親王和歌教訓をいへる家集にてハなき集も
つとも優にみやびたる○武者小路実岳卿の教訓にある集するか
おもしろきことの後の集に優にみかれたり

檜墻嫗家集　写本　一巻

文章多くいれるまゝく此中の文狭衆拾葉集とも載
られたりみ此集のうちにみゆ

ふるかれとよまれしもあしかくむまて老ぬるかな
よしこ俊頼の家のうひ作ての集ものせすいかゞ成
ゝ是なりとおもふべからず

明日香井集 写本 二巻

参議雅経卿の集なり 刊本に飛鳥井集とあるは雅親卿の亜槐集なり 此集とあやまり混ずべからず ○古写本に奥書あり 元仁四年卯月四日 戸部尚書在判 以雅孝朝臣本書写之畢 嘉元二年十月 此集相公之御集也 家之正本紛失 依仮借冷泉前大納言為富卿之本 仰治部大輔藤原為継令書写之 彼本書落字錯繁多 以正本重可改者也 飛鳥井大納言入道殿御判

俊成卿女集 写本 一巻

明応二年十一月令書写之 一校了 同三年五月

二ちよりおく文章の入りあり

散木奇歌集 写本 十巻 二本

藤原俊頼の家の集にして四季恋雑をわかちて奥に詞の文あり ○按ずるに此集を散木となづけしは荘子に櫟樗を無用の材といへるによりて寄歌の寄の字ハその謙遜のこころあれど本の二字をかいつまんでなづけしとぞ 奇の字ハ初めは異体なりしもかの一奇の字を用ひて寄の字をあやまりしもあり 契沖の考には奇の字ハ弁の字のあやまりなるべしといへり従ふべし

林葉和歌集 写本 二巻

俊恵法師の家の集なり 俊恵ハ歌林苑と号して毎月歌会ありて名ありし人なれば此集をも林葉と名づけたるなり 其外に頼政 清輔 忠盛 教長などの名もあらはれ 入道などの名をそへよまれたる歌も多し ○奥書に云 右林葉集者俊恵法師 俊頼朝臣子也

有之此写本者将軍家常徳院殿以御物御本令書写之本也

金槐和歌集 三巻

鎌倉右大臣實朝公の家集なり四季恋雑にわかてり奥書に云最初部類ありといへとも不審なる所あるゆへにこれを改むといへり 実朝公ハ定家卿の門人にして常盤井相国衣笠内大臣鎌倉右大臣とて三人相並ひてよき歌よみなりけるとそいひつたへたる古風体のすかた万葉体のこと多し ○定家卿のいはく鎌倉の右府ハたけたかくよみたまふとこそおほせられけれ此ハまことにこのよしのうたよみなりけんかし ○賀茂真淵此公の歌をほめたゝえてはらからの歌意考にいはく ひとりますらをぶりのまことをうつしたる此集のうたも殊に調つけてよまれたるあり ○そのこと此集を論して五ケ条をあけたり○うひまなびにいはく鎌倉の大まうち君の御うたハ今の京となりての一人なりとみなたふとみ給へり 古今歌集の詞にくらへ見れハ似るものなくいとたかくすくれたる本のよしなるを詞のすかたにこそ心のまことをもかくし給ひけれ万葉集のことはをとりて今の世の人のよむさまにハたかひてよみたまへるもの多くなりて古の詞にかなひたるもの多しこれをよくおもへハ萬葉集の梅の花の初花にもならへる梅の花の本にしもかへるへきさまの梅の花にもならひてかへり見れはむかしのほとりを梅開歇雨にうちまきたくみなるもの此集のすかたをよくおもひてよみたまへとそ の京をはなれて人々さとりてよむへきに此集の歌をよみてせんとてあめつちのことはとならてハおほかたのこと此集の古今二集いつはりなきよしの歌をおもひてよみ給へりとそいふ

いはゆるこれ古調古意なりこれ古調ならずやよ世の
すがたなるがまじれりかくても此のいやしげなるまじりきや
うたなどをまさきまへよ此抄に老たるまでおもしろかるべき世
のはかなすがたにすすみたるまへべきを知しるべし。○又
此集はよろしくみけるこそのちにまつらく此歌は
のよみでたまつりてこれにならひの後のちのきさらぎ
て太宰にまけ給ひのぼし太神しの弟子等もうちけいづきて
ありてこ菅相きらり風のごとくひらめきてたふとを
しらしくさやびたいましつのすがたよみたてまつりけれども
みこの此みやこに入てこそいまさいはちはじめなるやまと歌かな
とみゆゆふれぞはじめなるにはぶれる世のあけげなるものゆかし
なりしも一ふりさしてとし世の中のこそ新まことつけら
らずされ此ありいはすでにてもすたでまかりてけがれ
ふるもののかなしひすれ謝ちとおもうござきてふんて
ちすさらはさし給ひつけたり凡はかな人のひとつのかきのうたかた
みつけりつかのしん給よせくいましてのこころなけて彼撰者と
なしいはづきいつ給をずてつてでなくいひ尽かられつてよう
たまさんばあまたにてよくつけなりれてことよしつの
世にたびびなりすなり出もこれ給ひて志の人も万葉ふうく
志こつのさくらうかそこつぎこの万葉集はましあやかれまし
まこと高きもさきるやことのの心はれてまれどもの心ある
しかし給志のてこゆへりかけまがへすしあつまりけるもの
假字もいましておつてりけるはしすぐあきは世のおもしき
いにしえてじゆらの人でいなさん人いらいしかの歌つ心ずまりつる
このうたはよしずつまらかくるよろみやありけるうたちらちらもて

登蓮法師集 写本 一巻

りれらく
これは廿七首給ひのせたり残缺のかよろしいかりて登蓮は

頼政家集　一巻

西行同時代の人なり

頼政は武将の中にすぐれて和歌に名人にて俊成卿にも称美したまへり頼政の父兵庫頭仲正頼政の子伊豆守仲綱同じく歌よみなり頼政の女二条院讃岐仲綱の女宜秋門院丹後はいづれも名高き歌よみなり此集巻末に南禅寺の惟肖和尚作の頼政肖像の讃を附す美濃の蓮華寺より出たる写本のよし

寂蓮法師家集　一巻

二本あり古写本なり又一本は奥に四字題の百首をのせたり刊本もあるなり

長明家集　一巻

刊本なし寂蓮集に附して流布するものすくなし全集は見えざるものなり

右京大夫家集　二巻

建礼門院の女房なりし人文章にすぐれたる歌よみなり其集の中なる文なるを扶桑拾葉集に載られたり其のせし比の文ハ拾葉集にものせず刊本なし

忠度家集　一巻

これは薩摩守忠度の百首なり家の集にはあらず

後鳥羽院御集　一巻　三本

そのうちは百首の御製にして終にハ嘉禄二年の撰歌合にて判者家隆卿なり奥書應長元年十一月書写これ又御判あり

土御門院御集　写本　一巻

はじめに述懐十首同百首の御製ありて家隆への点詞書ありてまゐらす又詩句題五十首両度の御製ありて家隆へ詞書ありてまゐらす又其かへしも奥に十首百首等の御歌入たり

順徳院御集 三巻

紫禁和歌草と号す これをはじめに百首の御製どもを列ねられし ○古今帝王此御方の御ごとく時の帝の近代名家の御作なり

橘為仲朝臣集 写本 一巻

此集二本あり 一本ハ始闕たり それより …… 奥書云右之一冊以西行法師芳跡并外題者定家卿真筆之本不違一字写之云々 又一本ハかの …… 周防内侍のおとゝ …… 真奥書云 治承四年二月五日自筆書畢云々

讃岐入道集 写本 一巻

藤原顕綱朝臣の集なり 奥書云此本子息道綱之家本云々

瓊玉和歌集 写本 十巻 一本

鎌倉の宗尊親王の御集なり 春上下 夏 秋上下 冬

恋上下 雑上下とわかてり 文永元年十二月九日奉仰真観撰之

……

奥書云 此一冊者以禁中御證本写留畢 慶長三年三月日 左少将基任

隣女集 写本 六巻

飛鳥井雅有卿の家の集なり

基集 写本 一巻

津守国基の集なり ……

海人手子良 写本 一巻

歌数九十二首あり 奥書云 私云此書者大納言師氏之

作也とゝけり

安法法師集 写本 一巻

恵慶法師同時代のへとんしく贈答のうたあり

李花和歌集 写本 二巻

南朝の中務卿宗良親王の御集なり四季恋雑とわけてあり

文章いとまさなるく北朝と合戦の間舟中よりうかれめさ

進かくしうよみ給ひつる哥欲しもちの軍中かれしけのりはとも

此ふ書中の文扶桑拾葉集にのせらる○奥書云此本

書先々兵部卿師成親王出家号恵梵筆跡也数代相傳之

時享徳改元仲冬廿日多々良朝臣在判 右以本阿弥本写

し但彼写本於防州大内文庫而落字石おし次第尓今借

用半日馳筆ゝ落字等多ゝ猶重而以證本可加校合者

也 于時享禄四暦極月廿七日 兵部少輔中原遠忠

元可法師集 写本 一巻

俗名薬師寺橘公義の集なり応安年中の人にて又法名

浄弁のりとそよめるうちびのうたあまた世間のかくなるを

まりむしよしえはひり数寄の人なし

兼好法師家集 一巻

古写本なり二ちまてくらうすずつあらず○巻首よ家集哉

うく古実ななくしくいふく 家集事 哥員事不可定之多

少随意或十六首或七百九十首三百餘首ありしや 長歌連歌等

相交贈答多論也 又非贈答他人歌随便多書載之 部立

事全不可有之雖有所申人不可然先甘心者也 巻頭事

無部立之上者可任意恋雑等又秋冬多論也 哀傷哥事

自巻頭第十五六番書之恋哥集如此 詞事 如日記物

語長書續又哥合判詞是非故実等以次書其才学常事也

已上得此意可書之 ○奥書 写本云 此一冊者兼好法師自撰家

集草本欤彼集不流布于世如今幸覧之秀哥之能書寺

観何者如之不堪感悦聊誌之寛永第三暦初秋上旬 長
員外監通村判 右以照高院宮道晃法親王御本通村公自筆模
写兼好法師自書写之畢写本処々歟斜有不審故走筆
而倉卒書之 萬治第三暦季夏下旬ーー判 ○按ずるに此奥
書抔を見て兼好の自撰なるべくと思ふる也
ものゝ集書損の故実なりともおもはぬ族なりの叙しき
すゞきのかくべし

慶運法印集 写本 一巻

四季恋雑にわけて題のもと録しとゞきほどこゑげなるべし

草庵和歌集 四巻

続草庵和歌集 二巻

頓阿法師の家集なり判者の奥書に尭憲の筆跡のよしあり
此集歌数二千二首 短歌二首 物名二十三首 折句十
首 旋頭歌三首 回文歌一首 誹諧歌十六首 外に連歌百韻と

のせて部立四季恋雑にわかてり○此集二條家の正風よろしく
近體の歌なりとその常なれどもてあそびつゝ古人の説しるく
くわしく挙げてまあらず近来の御説にてハ烏丸光雄卿の口授
まゝ一部よりきりぬきかゝるべきことのハ草庵集雪玉集又
柏玉集など又御つくり集ならびに何がし家の集いひつゝてもおな
やうなれども耳におもしろからぬやうなれどもあまりても
とむかしのうたあひて世にもてはやされしく何もしるしてあれば
よしなくもゆかしき代くらべのよしもしらずして ○職
仁親王御教訓に家集にハ為家の集にそ光雄卿をも優美にしもやうなる
草庵集此作者ハおろかにいひすてゝ一つもてなすとはいへど
らしくしてくしりかなるおほえ一順とけふとことのはなめてく
○元禄の此此集のことばをかきあつめて奥に句題
百首太神宮参籠の間の百首瀟湘八景并に勅撰集に入て
此集にもれたるうたを近世に加筆の奥書あるなり

て小冊としけれ二口又玄子といへる人奥に其人の跋あり
書のさまハ類題の部によれり

草菴集蒙求諺解　二十巻　梅月堂宣阿

巻首に梅月堂僧宣阿編　梅仙堂平景新訂正とあり又故郷周
宣阿自序にいふ撰やかりれけれおのが編輯するもの多く故郷周
防なる岩國にゆかりある人につねく螟蛉などのためにとて書きと
ときをしへ侍りぬいふまでもなく彼よみ方のほどりけはれぬ也
けくも同じくハおのづからひかれける平懐のことども俄にかきたる
いとたまへとや其ところどころはあしくぬるまじ俗語にてもしく
一かうりようく蒙求諺解と名づけぬまく享保九年三月
日僧覚真宣阿洛陽桃花坊の梅月堂にて筆をとりぬるとて序
の次に凡例あり又頓阿の系図と集の褒美のかずかずに注釈
の引書二百二十五部を挙ぐ二十巻の内五巻も後集とし
とのく俗語に述さしとかれにてほせり　○聴虫集二巻　烏丸光

栄公へ地下の門人某よりひきゐりて蔑の浮橋のすつ梅月堂
草菴集諺解を傳授とまうし其作いふべしやうなる作者下
またハさやうにいろいろおかしけつく蔑よりよそのハ系まても江戸
のまかえ大坂までも江戸をもえる遠きところあるをもはそ
えるゆつて橋よりよさて目さるところやさゆるそのかすゆつよ
浮よりあつしと

草菴集難注　二巻　櫻井元茂

此書ハ梅月堂の諺解の誤どもを難ぜり此櫻井元茂ハ和
州郡山の人にて北村季吟の門人なり享保己酉八月友人南
部服元喬同十四年十月柳里恭同庚戌十月長崎平君舒が
漢字の序いまだ次に又かれの自序あまた巻末に谷元淡漢字の
跋あり享保十五年十月刻す

草菴集玉箒　九巻　五本　本居宣長

續草菴集玉箒　一巻　同上

此書ハ草菴集全部のうちまゝく宣阿の諺解元茂の難註ふなりなどしく撰ミしの如無じるうひハ頓阿のうへ加も発じてるみふまよゑうり○此書ハ玉箒と名づけてしるし淺解疑往かよの塵ゝくたまわりあつる草の菴をさき清むんもてなりけるよし稲垣棟隆がかれの序よ見へかり又須賀正蔭真字序 村岡橋比古の跋あり天明六年秋刻す

草根集　写本　十五巻　二十本

正徹の家集なり正徹東福寺の書記なりしゆへ徹書記と称す又清巌と号す此集をはじめより百首五十首三十首等の歌ありてあり此中よ一日百首一日中三時百首なりしハ宋雅点の五十首なども第二巻 永享元年より次第よもしるせる作歌の日記なり第三巻嘉吉二年十一月までの歌あり第四巻より第六巻まで次第不同しく日記なし第七巻宝徳元年試筆の歌あつくこれより次第しく第十四巻長禄元年の二月

よ終る此年代五月九日よ七十九歳よしく卒せしまへり第十五巻ハ草根集残葉と標して次第不同の歌数のせたりはんの拾ひあつめたるものなり巻首よ一條禅閤兼良公の序あり此序ハ扶桑拾葉集にものせられたり○此集よく正徹一世の歌を見えたり永享元年正月のころより年より春日西洞院よ乏居の終りしも後すて終らく一条室町のほとりよ旅のやどりをしてありし後移らし又永享四年卯月二日夜中務大輔のよしをより移るよ夜半そこるよ今熊野の草庵が坊の乳火よ和け移ましし暁げ告来るしるもうひなまるそのまかう移りし老花のもしまつらしきなましし二万六七千首そ十余年よかきとゝめもひとつも残らずてつく和歌拾翁自筆秘してかねを殺とつくしくむなしき烟となりしかれど今ハ此道ぜむ益よおほえくなかるじまよりうのぎましきみひなりぬる流しそもほどあるじき年の末かれそまげるよたらんもそとなどにあざ

らんなどすゝめらるゝにも侍るよしなれどもありがたき事と申て
おぼしめされずかしこまりても申さで猶(なほ)御みちをも
はゞかりのなどかあるは又何をかはしらで侍るべき
されば是を侍るべく同十日春日京極のほとりより御(ご)落(らく)飾(しよく)ありて
条坊(ばう)門(もん)西洞院のほとりより京極のほとりにうつり給へり
又このころ五条の十月廿五日にうつりて春日西洞院なる
菴みえけるにもなりにけりかくてその宝徳二年十二月
廿七日右京大夫家より使ありて今はなにのゆゑか御(ぐ)辞(じ)可
有御(お)辞(じ)退(たい)しかされ侍りしかばそれよりうつりてひく辞退の
返しにて同八日礼のためまうでゝ申すを頌(じゆ)状(じやう)のせて
あつかしき早(はや)く辞(じ)退(たい)すべしとあながちにすゝめ侍るほどにその心
がゝりてさらにはなせめしかなりしは十二日をしめて一座真(しん)
行(ぎやう)ありしにく又宝徳元年八月廿五日より千家(け)続(ぞく)
これ光源氏の物語(?)談義をはじめて中書并中納言雅(まさ)親(ちか)

卿(きやう)講(かう)釈(しやく)此日関(くわん)白(ぱく)も侍らんと申されしかば同八月十日より
秋(あき)かれ(?)稚(ち)児(ご)をかしくまりしにあるに又康正元年八月
廿八日此四人のほか千年ほど講(かう)せし光源氏の物語(だん)義(ぎ)
はじめて廿二日結(けち)願(ぐわん)せしよしもとはべりし人々さかくさ
せまりけしてやまれしゆゑ保(ほ)安(あん)
しらちうる今の大千代をかり侍りし人のひらき奉る
又其九月廿五日に行(ぎやう)盛(じやう)などともなりくさるのほとりより
ありて霊山に行(ぎやう)縁(えん)をはじめ同(どう)宿(じゆく)して五十首の和歌をさぶらひ
てそれみしゆゑに懐旧
かかるきんもとしれかをもおもてもあはれをひしをうれしみきり
侍(じ)従(じう)の行縁も八十にあまれる秋の鬢の名残を申すなり愚(ぐ)身(しん)が二親よりうえ
しんあてきんの事しろうる侍るにく去(き)八月大(だい)名(みやう)御(ご)所(しよ)
子(し)三歳にさぶらふ事石(せき)塔(たふ)をたてておきしより(りやう)侍るか
かかるものしらぬく又同二年九月廿三日五條(?)領位中家

田庄より生在所当時代の安堵の御判ありけるを人々住
せしむるによりて又云十二月晦日まで八旬のよはひに
近し出家して法名廣貞可中節しよし余流一門かけてよしハ月末より
とも記して見えたり又云長禄元年三月廿五日の夜近衛東洞院
路より火出て家々焼亡やけやぬる条西洞院なる所宝まさに
よりて四月中旬くりし侍る四月廿一日より家居新造ありけり
又侍べる又云同三年三月廿六日に般蔵主正統上人出家名を
号けるなり手擧一首をそへて示し給ひけり又云四月兵部
少輔の許より寄量子の阿弥陀仏の表紙にしてそへてよ
思ひよしろ代の春の久しきをいはひてよむものはひと
このものちからすのうけれひをちよくにとさだめしれてそのゆく
此歌絶頂にあらん○心敬さえめでたる清巌和尚にかたりて
なをしひしとあんぜさるにいふなきし毎々人の心にあはじと集
じ侍るほどさまざまにきこえしと○烏丸光雄の撰集と

和歌の集ハ付こそあてなるべしへつらひ徹書記な
どいへるもとしきをあくるべしとて○光栄公ハ峯白集
徹書記のよろこびをつくしまうけたるなり風体ハたゞしく撰集
に入られぬるし侍られける聴玉集にみえたり

草根集寄書　写本　十巻

草根集ハ此徹書記の家の集なりえらびてよせてあつめたる
ごとくのふるき古き代をしるし所より古今のかたよりものなし

草根集抜書　写本　一巻

一條禅閤兼良公草根集全部のうちより撰ひ出しさるひ
しるしそへし一名正徹手そへしといふ

亜槐和歌集　三巻

四季恋雑とわかちて飛鳥井中納言雅親卿法名栄雅の家集
なり今刊本は飛鳥井家集と題せしものなりうち亜槐集
なりしも祖雅経の集は明日香井集といへるごとく倭く

此集ハ撰せしものにあらず後人の書ざしまじへつらん

三玉集　三十四巻

後柏原院の柏玉集　西三條實隆公の雪玉集　冷泉政為卿の碧玉集　已上三部を合せて三玉集といふ

柏玉集　十巻

後柏原院の御集なり第一巻より第八巻まで部立にて第九第十の巻ハ百首の御製どもなり○烏丸光雄卿撰せらるゝところまた一部ありきこえなかりしがつぎハ類題の部を分ちて集又柏玉集といふ

雪玉集　十八巻

西三條逍遥院實隆公の家集なり法名堯空別に聴雪と号せらるゝをもて家集ハ聴雪集といふ後人雪玉集を編めるものなるべし実岳(?)の校刊なる聚雪集俗号ス雪玉近代堪能にて類なし二条家の眼目とすへし○烏丸光雄卿口授ニて雪玉集

随分当流のすぢにもちひらるべき趣なり清書ことに歌の手本にもなるべきものなり○此書をはじめとしてその類あまたのせたり

碧玉集　六巻

下冷泉家の祖大納言持為卿の息大納言政為卿の家の集なり部立にて○元禄の比中院通勝卿の門人松井幸隆三玉集の中にて類題に変じて刊行す其ものハ類題の部に入せり

三玉挑事抄　二巻　五本　野村尚房

三玉集のうち七百四十五首和漢の故事あるを合せて註す此書ハ故事の引證をのみしるせり和歌の註にあらず仏書などもひろく考へて百三十餘部の引書を挙げて又三玉集の外續撰吟抄一人三臣抄一字御抄などの中より引たる作者のなをあらはせるものなりしかれども

へしるしけり○此書の作者野村尚房ハ備前岡山の人俗称権六一枝軒と号す梅月堂宣阿の門人なり○巻首に正徳壬辰九月松井河楽 梅月堂宣阿 二人の漢字の序あり巻末に尚房仮字の跋あり享保八年霜月刻す

称名院公条公集 写本 一巻

実隆公の息右大臣公条公法名仍覚の家集なり およそめ巻末に原安八郎立ける かくし百首五十首なとの歌ありけり適の奥書あり

三光院実澄公集 写本 一巻

公条公の息内大臣実澄公法名豪空の家集なり 巻首に大永五年の着到百首有く実世 十五歳 とあり 次に天文十年孟冬の百首に頭ニ係り梅大納言為家実世とあるもの百首ニハ実澄とあらす又江東逸士と志しるし細川ら位法印幽斎の跋あり○此集百首の歌に部立ありてめでたきよし

翫まれけり

堯孝法印集 写本 一巻

四季恋雑にわかちて題詠のうた多し 光院也足軒通勝の奥書ありて浄光院法印堯孝とかゝせたまへり

源孝範集 写本 一巻

宗祇太田道灌なとの贈答のうた又持為て徴書記 等褒みのうたあり

常縁集 一巻

東左近大夫下野守平常縁の家集なり法名素伝よ文明の比勅をうけて古今伝授ありて巻末に系図あり又祖代和歌の家にて八代の先祖東六郎胤行の子始めて勅撰に入集は採集の作者として中ひろかつのつちにもしく頭の道一と称せし人にて法名素暹といひ其子東六郎行氏法名素八ハ新拾遺集以下の作者 其子時常法名素阿

ハ続は拾遺集以下の作者其子氏村東下野守法名語阿続千載集以下の作者其子東六郎行氏法名素暹は拾遺集以下の作者其子東式部少輔胤行又名益之法名素明其子氏数東六郎法名素欣新続古今集の作者其子常縁東左近大夫下野守実ハ胤綱の子なりとぞ○此集の中に宗祇より和哥の事ならびによみくだりしことども見え剃髪入道忿念よ山田の庄を押領せしを返したるのちよろこびて其ハしられざるのちをりのことしかりけるも見え○按ずるにけハ鎌倉大雙紙にもしるしたり

宗祇集　一巻

此書ハはじめに詠草ありて末に宗門宗祇とかきてしるしらるゝばかりくのうちにて禅師ずしこの中にも明らかに東下野州常縁より古今集伝授のことなどあり相伝のことを知のかたよりよくしるしたりとも見えず

慕景集　写本　一巻

大田伊豆守源持資　後備中守　入道して道灌　静勝軒と号す　此集の名を慕景とよぶハ道灌の居室の号は慕景楼といひしによりてなし其よめる人々の西国の道の記に見えたり○此入道ハ家のしかしく智勇忠烈の人にしく和哥を好めり其履歴ハ世人の知ところなし○按ずるに本朝之国志にもさる扇谷の定正将としこて管領扇谷の謀略に陥られし道灌ハいつはりして害せんと謀れしも謀なすまでて入るなれど何となくうすはし討ぜやし思慮ありめぐらされけるが文明十八年七月二十六日道灌を城中にまねききたりくふさハへとに道灌ハ浴室に入しに入々何ごころなく浴室に入りけるに討手にまちめてそのまゝ時にはうかびりし入く三方より鑓にてつきけり時にのその詞にいう道灌年頃なにし　和歌の道ハいふよりよ入人の笑もあへず絶かしきたなかりしことばをてしくまて止よ

声やかしよう
いかしきさしうゐのちみむしめしひてかなら身しおもひとけ六
いざつけしありつけく侍に一期の思ひより侍しけるこく今出
暮景集如老かつるに征夫なり保なり此ものは康正元年
の冬宿坊の役にかくこの都京のもてつくたてし男うつる中村
治部少輔茂頼とく京家の人の世の沈しく兵部に扶持
せられて侍りしあんするの男は彩毛なるてまのうくに二引
両の竹にばり紋の紋つけてしそのなかりけり遠目なれども紋の
をいかめしう見えけるよきぞたかひく泡物あをせし目
のおよびける男は見たりしかやぞて中村にたびし首をとり
てよく我陣に来つてあまりかんしきうれしさいまだ壮年には
たらぬ男にて白りしくたけうれつきとらしきう鬢のほと
そへてなりしすたまひめでたくあさましもいやまさりあさましき
うらぬおもかげなり中村茂頼けらぎくのやさしさそひぬめの

しくたむけてすあぬれなれとそぞれもひとく　ひと付き
ましめのこくかへし　治部少輔茂頼
なりし身こはおもふれもつよく今はよとをとしよ
世まよかくみゆしくえてすられ侍らの軍中の名として信ず
よりてすくしをうつしぐし○此集は静勝軒是西堂の蔵なれば
以く天正二年三月侍従藤原朝臣共宗のうりてあつたちのは
奥書あるんしたり○又按するに此集残缺のもくく寸歟覚えたるよ
ろ十七首あり又を以末に西国のものを作しそものを

慈照院義政公集　写本　一巻

此集部立なし巻末に寛永十年八月水無瀬三品氏成卿の
奥書あり是にいふ公方慈照院殿義政号東山殿延徳二年正月七
日前征夷大将軍従一位左大臣准三宮源義政薨歳五十六法
名喜山道慶太政大臣を贈らる慈照院と号す嘉吉三年
より延徳二年まで治世四十九年なり東山東求堂に閑居あ
し

銀閣におゐて古画筆をあつめもてあそびたまふ世に東山殿流といふかゝりしを此代より室町殿公方義昭まで

常徳院義尚公集　写本　一巻

義尚公は義政公の男なり此集のはじめに家君とかゝれたれば政公のもとに詠る歌なるべし巻末に真田の院の廟前に陪して詠る五十首の歌あり従一位行権大納言源義尚とありて其百首の奥の跋文より第六孫王の餘裔にして柳営代々盛なり武家の元祖とぞ聞ゆる今天の下代々うけつぎたまふ田の吟跡をつぐ四海の安危をとりむすぶ

沙玉和歌集　写本　一巻

これは後崇光院の御集なり

紅塵灰集　写本　一巻

後土御門院の御集なり

桂林集　写本　一巻

従五位下源直朝の家集なり直朝は三光院実澄公の門人なり法名月庵と号す○直朝数年の詠歌を代々中抜きて光院撰せしめて序の詞を書てまゐらす其序文は扶桑拾葉集にのせられたり

桜井基佐集　写本　二巻

桜井中務丞基佐法名永仙の家集なり

春夢草　三巻　一本

牡丹花肖柏の家集なり肖柏は久我家の庶流にして摂州池田に閑居せしめしより此集をはじめに百首をのせ次に部立したる巻末に三愛の記を附したり肖柏夢庵とも弄花軒とも号せり

園草　写本　一巻

飛鳥井雅俊卿の家集なり大永代より一二年の間の詠歌を載せたり数代中の残缺なれど新類題に引出でたるも廿一首の

くはへられたり

濟繼卿集 写本 一巻

姉小路濟繼卿の家集也此集を撰びつる次第に従ひける歌なり一人にて歌合をかく考行せし作者のごとし略せり部立なく雑月抄などなし

細川幽齋家集 五巻

細川藤孝法名玄旨法印の集なり写本にて傳はれり衆妙集と題せりもじめに百首のせ次に部立の歌のせ侍る又東國陣道記と附す

鷗巣集 写本 四巻

後水尾院御集なり四季恋雑にわかちて奥に御製あまた又八条宮智仁親王御点の御製中院通村公の点あり何の歌もて御添削のものせられたり時々御自撰もありけり

後水尾院御集 写本 一巻或二巻

御自撰鷗巣集の外に諸家に傳はりたる宇喜多等のあつめし御集と称するもの數本あり名所御百首八景御詠歌の入るもあり又物名の部に拾遺集の歌混じ入るあり女人の歌も入るなり考訂して古今傳授の歌のべし ○寸帝の御撰千首あり又あつめたる中に入るを引く圓浄法皇とあらはせたまへり

水日集 写本 一巻

一名緑洞集といふ後西院の御集なり部立なし

桃蘂御集 写本 四巻

靈元法皇上の御集なり四季恋雑部次第しくことく年月ありてせらるの真筆なり いかく稀なるによりて詳田各の二部なり詳かなり御製壹萬餘首のうち奥に御百首文章ありなり略せん二千首ばかり入れり

黄葉和歌集　五巻

烏丸光廣卿の家集なり資慶公の真字の跋ありて刊本
古板新板あり

秀葉和歌集　写本　二巻

烏丸資慶公の家集なり巻首に百首ありて次に部立なり奥
にも御記しるしてかやうの記あり考ふるに年月日附あり
光栄公漢字の跋あり

栄葉和歌集　写本　九巻

烏丸光栄公の家集なりはじめは四季恋雑にわかちて
のせ奥に百首などあり終りに年月をしるしあり○此集
近代勅によりて栄葉と名づけまゐらせし光祖の真
字の跋をそへられたり

不昧真院殿御集　写本　二巻

不昧真院は光栄公の諡号なり此集は何人の撰ともしらず

私に何れも分つことなし

後十輪院集　写本　二巻

中院通村公の家集なり部立なくして年月日附あり

老槐和歌集　写本　一巻

中院通茂公の家集なり部立なく年月をしるせり
せり其集も末は又地下作者の歌なり

通躬公集　写本　一巻

部立なくして年月にて時節は何れもわかつことなし

芳雲集　写本　一巻

武者小路実陰公の家集なり芳雲の二字ハ　桜町院の勅
銘なり芳雲類題といふものハ類題の部にのせたり

挙白集　十巻

豊臣若狭少将勝俊の家集なり勝俊東山に退隠の後長
嘯子といひ又天哉翁と号す○此集第一巻より五巻まで

至りまで歌の部才六を以下文の部とハ翁の辛は蘐庵の門人公軌これをあつめをさしおきて軌身まかりければ同門人山本春正それをうけつぎて刊行す春正の跋にくはし此集の文章多く扶桑拾葉集にのせられたり

難挙白集 二巻

作者詳ならず尋旧坊といへる作名にてかけり自序あり云公翁の得すハ名におほえし歌人なくきの世の詠ハりふれたる人の市のちまたなずしけきれとぞれゆよづまるりのめも田たしくまゝなふましてんきまよりてハぞうやはらんとのれ身いやしくんおろそしくいふぞくきこえありてよこもぞ様つけたるく

○此書挙白集の歌の難するさへの頃きこしてゆかまるるもの多し又の部も二三篇難せり寛文十二年二月上旬尋旧坊謹識しゝ譏るまるんとてり

挙白心評 一巻

一名挙白集難とも号すそじえる長嘯公翁の履歴をのせて東山に退隠せしまでしるしつぎめ次に難挙白集のしゆいせしものはうしつぎくいそくおりふしに此難ハさまでの至極もなく軌ら行ぞぼしけしてしみ春正ぞそのしをなりよくえらひたるものおほしめりとんちらく又此次まで長嘯の三くさちえにをかれ論せり作者詳ならず

遊遊集 写本 二巻

松永遊遊軒貞徳の家集なり刊本あり八貞徳家集とも名

廣澤輯藻 四巻

貞徳のつくる月長孝の家集なり長孝初の名ハ長好いつり廣澤に住しとそのや此号ハ号す此書一巻より二巻まりにてハ歌の部をしくのせ末の四巻ハ文章部のせてく享保十一年刊行す天明年中有賀長収此集の歌の外彼のいはしゝ此家に傳はりしも拾はせそしくく桂也集

類題しるしくはへて刊行す

左京大夫集　写本　四巻

奥州岩山大守若京義恭朝臣の家集なり此集しけり
の詠をは依水尾院道晃親王通村卿通茂卿実陰卿なとの
添点たまへりその頃の世に出て古くより点者の序などはへて
されたり貞享年中葛山散人坂以乃の奥書あり

草山和歌集　一巻

深草元政上人の詠草しるせり萬治不可思議と号
す詩集は草山集といふ

漫吟集　写本　二十巻

契沖阿闍梨の家集なり部立は下河邊長流契沖の
生前よりえらびおかれし序はけふ序の詞いまた満誓沙
弥かすきさとのえんはにつくいふなりけるとありけり
おてまよなりその音をなしくいうをさぬかのくましてし

のくれえそさることはえいてこのえらいふのしるる
いたりてハいひのこせるもあり常陸の国にたる長歌ハ其の
ことのおほけるをそのうちよりその院のまさしきつく
せりいまする國よりる長篇はいれざるの人の十とせ
御つくなせりしよりこやこの代の賦をいひつくつき
えし○梅ずる世の流布するものは寛まるるも才十八巻よ
りなりと但し其れなりしおほすくしかなのるしひめはり

晩花和歌集　写本　二巻

下河邊長流の集なり長流の死後に契沖その遺稿を
はりあつく晩花和歌集と名づけて序かかれその序
の詞にまこつひよりの翁はりかくしきこりなのですむ
むかしのえなる川の下にも下河辺と氏としおもてるかなは
老をうけはほりゆのえれなりおほむ晩花と名をせられことしれ
をけんはむのくく月の猶ふすのはしるのくるのけるとり

のゐもしおちゐきこのまゝやくそひ物つりしん物の二ず於い
子とかつりこくちくハうきゝおかよりたんしかれを七旬
子のうさうそのりそりのしおほとこしくおそくぐきとき
もかきりけ於今くの藤よくしつくたつるらちゐめつち
しハうきひやまたやまつとも弓かひきたちねうきさハ
為やくりしきんしおほ中さしえまりく中の序し○此集の
おくし文章ねを備とのせたり

三家和歌集 写本 三巻

才一巻 長嘯 才二巻 長流 才三巻 其沖 此三人
の家集よりえらひ出てそれとも拙者いかさつまびらかならず

長雅集 写本 三巻

長雅の門人風観齋平間長雅の家集なり一二の巻ハ歌才
三の巻ハ文章なり此よのをしんけつきおもし

長伯集 写本 二巻

長雅の門人以敬齋有賀長伯の家集なり奥ニ文章ねを附
したり

酔露軒和歌集 写本 三巻

河瀬菅雄の家集なり菅雄ハ凡あるべきさな美ホの作者

年並草 写本 二十巻

似雲法師の集なり享保の中より法すして志をせり似雲
ハ武者小路実陰ちの門人しく和歌ほ好ミ諸国ほ遊歴す世
ニ今西行と称せられたり家ハ京ほあらく河ほの弘川寺よ
住む此集中葛城百首十百首窓の曙ホよ風早実積への
跋あり近きころ似雲集類題よりホ小冊を刊行せしハこの
しかちかゝれはうちより採ひ出てし

樗葉集 写本 三巻

葛岡宣勝親臣の門人井神寛齋親陽の文集なり自序あ
り歌集若干巻ありし散失しく伝りしず

春葉集　二巻

稲荷の祠官荷田春満の集なり　上巻　四季の歌雑の歌をのす　下巻　自筆古今の序　信みの臨写　國学校を立んとせしときの漢文の上書をのす　巻首に上田秋成橘経亮荷田信美およびその序あり　巻末に寛政乙卯の秋稲荷祠官荷田信郷の漢文の跋あり○信みの序にいでやそのびとは
知らしみえる御なれどもおもひとりたてゝかんがへしほそく
うけいまそかりしが我の教へなりしてあながちよみなをひでりしに
皇御国のいにしへ人はすめらしく人をよろしくまなびしをしるさるを
はやくれつるなりしに我まなびけん神代のみやびをあひきさちよのつたへ
にはあがりまきしは他は御かづらしてこゝろき代をもちて
なきふ昔の人てがらにいとうぶ歌をもおもうしけるまよ御の
ふるしくさくみちをとる女のなゝしひ何されのとのみもせんみ
もいたしぬあふぐめいかるひとびとはまる歌のほいなす

まじ点の記をよみ侍すとて○春満ぬし姓ハ荷田氏八羽倉と齋とかし称す賀茂真淵がをし

県居歌集　一巻

かの真淵の集なり　つく葉の家の長上田秋成これら
よしそのもの四十五首し於遊でて十餘でハ秋成がまうあつ
もめのもしく長歌もまじれり　此乞秋成の序はなし　又わ
かの二月静舎にて宇万伎の跋あり此跋のさしえ古渕
ことのし上はかれて返雅のしく四首ずのせられたり

静舎歌集　一巻

真淵の人の弟子宇万伎の歌をあつめて上田秋成のしよめ
てんその八十餘首県居歌集と合刻してせられける巻

古河乃多　二巻

末にて秋成の跋あって
真淵宇万伎の師弟代歌ともあつめたるなり　上田秋成序

かう此書ハそのでゝあつけたる二本の校の人ぞつかさど

文布 二巻

志渕のつくへ倭文女の事をしるしゞめよいふ人のゆゑなり又
ゆゑしれぬ文も古人のえらしし跡せしハ遠江のくにもろし
末の尾よ倭文子か墓石よかきたる志渕の又朋友の所
しるせるなり寛政八年八月村田春海の序なり

むしよもだれ 一巻

近江の僧海量くぬめづくるあめるよ詩との中をめぐり
あるく詩歌日遊編といひ又は一夜花と又五畿内より諸國
次第しるくとのしるさる古跡のしるし巻中にめづらし天雅
以下数人の画ありしをせり嵐山春望 琵琶景勝 塩竈秋
霽 立山遠望 鳴門真景 博多勝景 あし天明六年本

桂山集 二巻

居宣長其餘三人序自序あり

長伯の門人川井立牧乃家集也 宝暦中田力立斎其家
に刻す巻末に諸家の詩春曙百首など附す自序あり

三藻類聚 二巻

冷泉為村卿の門人京都宮部義正同室萬女同男義直
三人の詠歌をあつめ四季恋雑に分てり

三藻日記 二巻

同じ人々の詠哥を明和九年より天明七年迄かきしるせる中にも年々の
事ありける

相生乃言葉 一巻

義正夫婦の詠草冷泉家贈答のうたなり此中にあまた
の御添削あり巻末に為村の奥書ありて夫婦のうたの
きりつめたるを宮部の文庫におさめてたふとびしを
此ころの世の中に伝へりしやよしきこえしその後のしるし
まくひろめ人の為に世の中の人々のつたへさせたる

一帖かけん　やすくかなしよの文字のしかたをしるせり中ほ付　小倉
山荘老樵澄覚

三藻五百首　一巻
三吟毎日一首づゝ五百日よみあつめて作者の点合せる
おもて牧斎よせし類まとめけり

三藻續千首　一巻
已上五部八巻合刻なり

鈴屋集　五巻
本居宣長の歌集なり一二三の巻近調のうた四の巻古
風のうた五の巻長歌なり本居春庭の序あり

志野乃葉草　三巻
宗固翁乃遺稿にしく烏丸光栄卿の作者の付て門弟等のありて
師点のものも一千餘首を四季恋雑にわかてり○天明六年四月
つくる小野茂語序同年大家孝緯漢文の跋　男わが長うれの跋あ

うけて其家に刻せしもの也○居士姓ハ源名ハ貞辰宗固ハ其別
號なり幼くしより幕府の先隊騎士たりしが病を以て隠退
しこれより後ハいよいよ意を和歌に留めて権貴に交らず
已上大家氏の跋語に見えたり

歌合類

寛平歌合 写本 一巻
巻首に寛平御時菊合といへる詞ハ菊ノ名所なりこれを
寛平の菊合ともいふ十所の菊をあはせたまへり

寛平后宮歌合 写本 一巻
古今和歌集に寛平のおほんときさいのみやの歌合のうたとて
のせたるハ此本のうたなり 春歌 夏歌 秋歌 冬歌 恋歌
おの〱二十番なり此うち百七十首菅家萬葉集に入らせた
まへり

殿上根合 写本 一巻
永承六年五月五日菖蒲の根をつくらけるしるなり
五番 題は 菖蒲 郭公 早苗 祝 恋 と上五そく

禖子内親王家歌合 写本 一巻

巻首ハ祺子内親王家庚申夜歌合といへり 題ハ春夜月
帰雁 かすみ くれのはる 早蕨 すみれ つゝじなり 十番 歌
人ハ女房 宣旨 小弁 小式部 出雲 美作 中務 武蔵 甲
斐 式部 少将 なとなし

十二番歌合 写本 一巻

建暦三年八月十二日歌合なり 題ハ音羽山 石瀬山 生田杜
布留 高橋 など廿四題なりされなし 歌人ハ 女房 山 良平 野
頼範 因 範基 浦 範宗 橋 為家 河 光家 江 康光 原 永光 杜
志女遊婦 池 など配分せり 判なし

歌合 写本 一巻

建暦三年九月十三夜歌合なり 題ハ江上月 旅宿恋 暮山松
十五番 判なし 作者ハ 女房 良平 定家 雅経 為家
家衡 家隆 志女遊婦 俊成卿女などなり

仙洞歌合 写本 一巻

同年閏九月十九日 題ハ深山月 寒野虫 寄風雑 十八番
なり 作者ハ 女房 順徳院 有家 定家 家隆 家衡 為家
光家 なとなり 判者定家つかうまつり 判詞あり

御裳濯河歌合 一巻

宮川歌合 一巻

此二川の歌合ハ何れも西行法師自撰の歌を番へて今判者へ合
剋す此歌合の由来ハ古今著聞集にみえたる圓位上人ひとしくよみ
川うじみとりて作る歌を撰ひ出し歌合三番にて作り給ひ
くるもするハ歌合となづくるもの紙をつゞけ慈鎮
和尚ハ清書を乞ひ俊成卿ハ判の詞をかゝせりしに一巻となる
河歌合とかりけくこれを内し奉りつゝ定家卿の五條の
従ってゆりける時判せさせたり 諸国修行の時もおひ文て自身
をそなへさりけるを家隆卿のいまうしく坊城侍従とて奉
進ぶむこうく同ありけるにみゑりておひりけり八本信ハ

往生の期すでに近づきぬ此歌合ハ愚詠なれども
秘蔵のものし末代に至るまでうしなはじとおもふ
ものなれバ附属しまゐらせんとおもひて二季の歌合なり
けるを取出して遣しけり御つかひに元代の歌人
よしなくちせおはしますべき新古今の撰者にそなへ給ふ
代の達者定家つねにびくびくれ名が残せるハうらやましけれ
またもやねがふものハしたしく千の人の名をならべんける
に極官に合まいらせられたりけるの旨奏せさせたまひける
ある帝は末代の人丸とかしこまれるをもちぬれはれ
かさせたまひけるにかの人のおほせし道をも存ひ
合せしむべくめでたく背ざりし彼二巻の歌合ハ宰相
句のかたみに伝へらるゝにや

千五百番歌合　二十巻　十本

土御門院建仁元年百首歌合なし作者　女房をはじめとして

じめとして時の名匠三十人なり判者巻ごとに別あり
後京極　慈鎮　忠良　釈阿　定家　顕昭　季経　信定
並に　師光　法名生蓮なり　此中判の詞なきものは判詞と附
ことの葉を後京極摂政ハ七十五首の絶句を綴りて百五十番
の判の詞に代らまし後京極摂政ハ折句のかたちにて判の詞とし
させたまひおほん後京極心蓋結ちて判詞をしるしたまへり

六百番歌合　十巻

左大将家歌合とあり作者ハ左　後京極　良経なり　季経
兼宗　有家　右　家房　経家　隆信
家隆　信定　寂蓮　定家　顕昭　歌ハ百首にして　判者入道釈阿御
書のおくに記して
俊成のおもかげあらはれてやさしきハ十首ばかりあるべしとは
左の軍師定家がかたうど
言の外にあはれなる老の俤けだかしの格もあるらん

堀川院艶書合　一巻

堀川院御時の内にて勅して男女をば左右よりをちらく艶書の歌を合せしめたまふ　作者　公実　國信　忠教　俊実　俊頼　俊忠　顕仲　為方　顕時　正兼　女房にては周防内侍　康資王母　院大進　女所伝の百合花　前斎院紀伊　肥後　四條宮甲斐　中宮上總　一宮紀伊　女院の安藝　小大進なりとのく日比定めく艶書の料紙なしとぞいくろ流とてされたりしとそ〇今刊本は詞花懸露集一巻阿佛の気色して一巻を附し共にくわしくす　ゆかしき集は古き歌共のうちこそかしこみやかなるあしえきものし

南朝五百番歌合　写本　二巻

南朝の天授元年内裏の歌合なり　作者　左　女房　右　無品法親王仁誉　兼内侍　前関白　春宮大夫師経　右ノ大納言光有　権大納言公長　左近中将長親　権中納言実真　前京侍従

親王　右方　源資氏　太宰帥惟成親王　関白　中納言光資　前大僧正頼意　権大納言実為　前中納言具氏　春宮権大夫為忠　源親氏朝臣　源成直　判者宗良親王　自詠の歌二百五十首判ありて勝負をつけられて巻末にまたしく勝負こに辞案愚点二百三十二首

君かへんらよ千のねよとふ玉のくりかぬらけかれみくかれ

宗良上もいづ勝のうきまえく合点せられまてり

歌合部類　二十巻

天徳の比より永禄の比にいたるまでの小部の歌合三十六種をあつめてより撰者作者しもはしらず貞享二年刊行す

天徳歌合　六十二代村上天皇天徳四年三月晦日　判者小野宮左大臣

近江御息所歌合　六十八代一條院の御時

若狭守通宗朝臣女子達歌合　七十二代白川院應徳三年

判者通俊朝臣
高陽院歌合　七十三代堀川院寛治八年判者大納言経信卿
中宮亮重家家歌合　七十八代二條院永万二年　判者顕廣
卿後改俊成
住吉社歌合　八十代高倉院嘉應二年十月九日判者俊成卿
建春門院北面歌合　同院同年十月十六日判者同上
廣田社歌合　同院承安二年十二月八日判者同上
三井新羅社歌合　同三年八月十五夜　判者同上
賀茂社歌合　同院治承二年三月十五日判者同上
右大臣家歌合　同三年十月十八日　判者同上
時代不同歌合　八十二代後鳥羽院勅撰
後京極自歌合　同院建久五年五月二日　判者俊成卿
御室撰歌合　八十三代土御門院正治二年三月五日
判者同上

新宮撰歌合　同院建仁元年三月廿九日判者同上
八月十五夜歌合　同年八月十五日判者同上
九月十三夜歌合　同二年九月十三日　判者同上
五十番歌合一名　水無瀬歌合　一名恋
石清水若宮撰歌合　同三年七月十五日判者同上
建暦仙洞歌合　八十四代順徳院建暦三年　判者定家卿
建保歌合　同院建保二年八月十六日　判者同上
光明峯寺攝政家歌合　八十五代後堀河院貞永元年七
月判者同上
名所月歌合　同年八月十五夜判者同上
日吉社歌合　八十六代四條院嘉禎元年十二月廿四日
判者同上
遠島歌合　同二年七月　後鳥羽院勅判
撰五十首歌合　年月不知　定家家隆両卿

百三十番歌合　八十八代後深草院宝治元年　判者
為家卿
伊勢新名所歌合　九十二代後伏見院正安三年　判
者為世卿
伊勢外宮北御門歌合　九十五代後醍醐院元亨元年
判者小倉公雄卿
五十四番詩歌合　九十八代崇光院
新玉津島歌合　九十九代後光厳院貞治六年三月
廿三日
康正内裏歌合　百三代後花園院康正元年十二月廿
三日　判者飛鳥井雅親卿
親長卿家百三十番歌合　百四代後土御門院文明五年
十一月七日　判者一条禅閤兼良公
七夕歌合　同九年七月七日　判者同上

三十番歌合　同十二年十一月十五日　判者飛鳥井栄雅
文亀三年歌合　百五代後柏原院文亀三年六月十
四日　判者冷泉為廣卿
秋十五番歌合　百七代正親町院永禄元年八月廿三
日　已上部類歌合の目録なり
年中行事歌合　二巻
貞治五年十二月廿日當座の歌合にして年中行事百首の
題なり　作者ハ女房関白良基公　内大臣次良公二条太師息也
以下経賢僧都　頓阿子　頓阿ホか廿六人也　判者ハ為秀にて
相つの奥に判詞ハ普光園良基公かせたまへ一名関
白家五十番歌合といふ
職人盡歌合　三巻
巻首より七十一番歌合と云ふ　月と恋とを題として番匠鍛
冶より酢つくりにいたるまで判詞の次に畫図有て○好古

小録曰職人歌合二巻畫ハ光信書ハ東坊城和長卿染翰なれども其
圖ハ委しく下りたる代ハ備はりし此哥合作者烏丸光廣卿とし從二位
ども和長卿の筆跡にあらず從三位なりしとぞ○按するに和長卿
ハ諸家傳に古子孫ぞなし七十余歳にして此哥合作への作なるべし
あらざれども其頃の作者を見る掛物の類もこれを引て
又別に十八番の職人歌合を光廣卿の作とし医師陽翁より出す
所へ入りて利根なりし又ハ判中歌仙探の内あるをもうけされぞね
ちなみに光廣卿作とするに從位によりてあるへ誤りなるべし此外
に職人歌合と称するもの数部ありて群書類從の中にもこれ

百首類

百人一首　一巻

飛鳥井家のおほせに此百首ハ京極黄門小倉山荘障子の色紙
形なりとぞ世に百人一首と号するなりこれ撰みしひと
ひとしきハ新古今集えらびし時定家のこゝろ又の要はこころ
さうしるよ定むべき心をまずる僧にはまつらり世
にも奥の民をみちびく教誡の端となれど実の根となる
して花の枝をふるすべきなると此集ハひとつて花をのし
しく実をとすれたるなりとおぼさぬなるべしされぞ
みつのなかにもれたるをおしむひとなきにあらず
へ十分の人のすがたもひて此雜をえらびてのく
こ又云此百首の人数は此世にいかゞおりても除かれ
させる作者とてもあも入侍り不審なるや但し定家の

のん世人（セジン）のおりすまゐりしなずらへし又古今にならべてまねおもはず
作れど世にあそびものゝやうにこゝろえひなしたる事ハ世の人
の心のゆるぎなくまうしを作れをあはくおぼえずハなしぞ
ゞまへそ世なる事どもをさぬは入らでハ其人の名誉（メイヨ）にも
及（オヨ）ばざりきもあやぶまるゝこと少なかりけん此等を筆つ世（サイ）にも
人にかねく知られずありし事ハ世の人もしてもおもひしの
此わかりめでたけんに随分（ズイブン）ときれはしぬもへあつけれよね
今（ダイ）はおばんハ人の心ぬをとりをし人く案（カ）じてしたがふの世よ
人になほ○くもまさりハなりけりぞ当時（トウジ）も見る紙のうちおく
世にも残（ノコ）りて作るいまいハ家の口伝（クデン）するとく謬説（ビウセツ）ですなる
ハ作しぬりけれども人らの笑ざりいきもあかりおのぞもた
作ぞ文（ジユ）作らづきてもし此内証（アルヒ）ハわけめでたきひハ彼方の
うて御入らしし出るそち二条家の骨肉（コツニク）此かの御ゝて従（ザイ）
成りて定家の心をまさぐりつゞけるもうはぶ作りしをく

○按ずるにこれ普通（フツウ）の説（セツ）にし今案（コンアン）の説によれり○年山寺聞（ウキキ）
書にも此和歌の事御先達の説に新古今ハ花御座しく実
ありそれらを専にせられしハ定家卿の心にあわず古来（ユヘ）昔今
をわかちて実ばかりし御百首ずつえらみ色紙（カミ）形によりける
てひろまる小倉山荘（サンザウ）の障子（シヤウジ）に押（フサ）せられ定家これたまひて
猶おもへばなりにつめく作者のみ御ひけしめよりて二条家の
骨髄（コツズイ）となりしもつて言ふる明月記　定家卿の記録 とようて言
さく不審（フシン）なり　先記文（ニツキブン）御抜書（スキガキ）して今案（コンアン）御ひけしかども
嘉禎（カデウ）元年四月　今案ずるに四条院の年号定家卿七十四歳也　十二日
甲戌　今案ずるに今日かの定家卿ハ出家してしかば嵯峨の山荘にこもりたまふやうにしれども
明月記は伝写のあやまりなるべし考ふべし　文暦二年五月乙未
朝空（アシタソラハレ）晴　予不知書文字事嵯峨（サガ）中院障子（シヤウジ）色紙形故予可書（ベキカク）
由彼入道懇（コンセツ）切懇染筆送之古来歌自天智天皇以来至家隆
雅経卿入夜金五ロ示送ちくらもし中院のは今ハ誰とも知しぬる

らずある氏の母ハ宇津宮弥三郎頼綱がむすめなり頼綱入道して蓮生といふ此入道の子の為家つれ中院入道言とよせしもれ聟なれば彼中院の此処わけたまひしせんじてくれの形をかしきけしかたのてもはさる紙かさハ代入の色紙懇望なりて定家ではかくそれを数めたく書しもらひ小倉に在りてかれうしとりあつめて歌を撰してものしたまへるや雖極見其事愁染筆遣ル之古来人歌各一首を選みかきやりて染筆のことく定家の撰ともみえずされバ蓮生が所望しかくく集しも入りなれば これぞ今代の撰にもあらすそしてさて又今の世の百人一首ハ後鳥羽順徳ヲも巻尾に載たるハ誰なるべき法性寺殿あ あしれたまはや但し当時の在下なるゆへ又及家隆雅経と これ又その右の明月記の文にあひがたく考れをいはる首の中の歌に違ひ説しかしまた傍らの宗祇の説にもまたまた考えて されども此明月記の文だけえ又して又改観抄のおもむきとは違

の説あれどもしかるべき首を十分精撰ともなくしたるにて鶴宗祇が眼ハさとしてそ傍らしてかえ世の明月記の趣とみえせぬしあまた合せて給はる寂蓮ハ蓮生入道が撰するも定家でも同気なれば二首ハ心ゆかずとりつぎて宗祇がこそゆるまかなとふみのうちにあるにもあれまたもとのてにそ定家ハ嵯峨のべくとして○按ずるに百人の像ハ世に書伝ふるさまに嵯峨の山荘の障子にしも古今の歌仙の似せ絵描きてとも一首の上に中院相国の書なるべし上下のまゝに中院の山荘 搨鴫暁筆ニ云京極黄門昔今の歌仙一百人の撰びしをせたりとも新古今の歌一首づゝを色紙におして小倉山荘の障子のおされしかバ百人一首とも号けこれ人ともとはまよ頃よりの撰をも楽書の五人は撰の撰者の随一なる此人ならぬは撰ずるべからん又頃に兼好の説 何洗の百ちの人ならば此人ぬ又べきほどの作者

ハいつはりなることしひのらまでも入いでごと

百人一首宗祇抄 写本 一巻

巻首に大意をあげて其作者をしるし其注解ハ東野州よりうけたる説をものせり

百人一首抄 写本 一巻

これもはじめに大意をあげてしるし其作者をしるし其注解それぞれめで宗祇の注をあげくはへて其説をもしるしこれより注をかへしたるをもしるし其説にハ宗祇注のことにしるし其説をもしるせり○奥書に此一巻ハ飛鳥井家雅親卿の説をもしるし其子宗長の奥書ありて此ハ書写の年月日をあり

百人一首萬葉 一巻

外題にハ万葉百人一首注解しるせり万葉集の文字を仙覚由阿の注などを考へ日本紀續日本紀等の文字をほへ書るぞ其外にもかなもじのもかゝらず

あげて其のことも注せり

百人一首辨蒙抄 二巻

作者注なしといへども奥に百人一首の作者部類を附しよみくせをもしるせり

百人一首師説抄 写本 二巻

これもはじめによくての作者をあげ其注をとあり奥書に明暦四年仲春五日立松末弟不動院法印祐海鈔之とあり

百人一首像讃鈔 二巻

巻首に百首の起りを注しそれぞれ注して作者の像のよにけり其像ハ世に行れの其像へかつらし書きたり奥書にえうり上記の作者の奇もにもあらずもたしかならず

百人一首拾穂抄 四巻 北村季吟

巻首に百首の起りを注しそれぞれの作ハ諸書をあつめしなど其のちハそれぞれ先賢の自作の説をあげ次にそれぞれ説

とのせらう貞徳の説ハ玄旨法印の講説をきのかうけ
たまりしかのしらけてそわえまる季吟の説あつておかハ
季吟の男湖春の筆なりといふ

百人一首拾穂抄補注　六巻　谷口元淡

季吟のはよ童蒙なとのためにかきてまれはえたる
まそふじひくのりしれ了簡をもしくさし考へつりてそ説もれし
ちりしてをのなり谷口元淡ハ郡山の人まつく季吟の門人也
元文二年正月自序あつて延享五年正月刊行す

百人一首基箭抄　三巻　井上秋翁

御文の選者ハ細川玄旨法印のおほせをかうむりて此抄と
編集するよしなりけるを北村季吟ハ以説あつて

百人一首改観抄　写本　三巻　沙門契沖

真字の自序あつて下河辺長流嘗く百人一首抄を撰ず
稿をつくらくいまだ脱せずしく卒すよつて契沖其稿

むの癖あつて長流と同病相憐むゆへに其志業を卒らしむるにおひ
てこれが釈をつぎて改観と名づくるなり○此書ハ
古来の注釈によらずして百首のうちにこもりたる代
了簡を以て考へ作者の其ごとくいひ出せる古語を引て証せり
者ハ定まるにあらずとぞいへり

同　抄　刊本　五巻

契沖卒して今井似閑の門人京師の樋口宗武といふ人
屋景山とともに改観抄のあやまりをただし御刪あり
追考を加へて梓行す今井似閑ハ契沖の門人也延享四年
九月宗武の序あつて同五年正月刻す

百人一首三奥抄　写本　二巻　下河辺長流

作者の傳なし哥の注ハ僻説なし頭注にも押紙の説ハ
契沖のくはしくもかくなり享保十三年冬の奥書あり

百人一首函底記　写本　一巻　申斎隆徳

巻首に定家卿の年譜を附そへたり享保十三年卯月書之
又右一冊自筆の本を享保十二年十一月五辻に伝へまゐらす跋
あり中齋ハ葛岡宣易翁の号のよし

百人一首秘注　写本　二巻　平間長雅

巻首に此書えらまれし趣を色紙形のことくかきしるし先師
の伝説をとりて大色紙小色紙の寸法などのせたり○聴玉集ハ一巻
百人一首長雅家の伝秘説の一冊なるに見すれとも此抄ハ猶あり(?)
あまた秘の口伝濁へもしるさずいとおかしげなるくしく家のをし(?)
まじへし此聴玉集ハ烏丸光栄卿の口授をうけし人の書しるす
書なるべし

百人一首古説　写本　四巻

此書ハ荷田春満の門人賀茂真淵しるす所にして著す所
しるしおきたるものにして作者の伝などハ○古説を考へ
定家卿の時代より古今伝授のしるしをひめたるよし(?)

明月記によりて定家卿の撰なるよしを論じて註釈の
下に又細注をなして考証加へたり

百人一首うひまなび　五巻　賀茂真淵

此書ハ右の古説にもとづきてやゝあらためあやまりをたゞし
まなびの人のためにいとわかりやすく(?)かけり抜粋(?)
えらびたる(?)寛政五年十月刻

百人一首ひなことば　四巻　尾崎雅嘉

作者百人の伝記略し書籍に考へ古人の説をあつめ歌の意を
ともにおのおの歌の伝しもよく俗語をもちてひろくときさとしたる
の耳にもいりやすかるべし巻首に此書の趣意古来の伝ある説(?)
等を併せのせたり

新百人一首　一巻

常徳院義尚公の撰なりそれの序あり此序の枝葉拾葉
集にものせたり

女房百人一首　一巻

何人の撰なるをしらず。源弘当て奥書の序あつて刊行せり

武家百人一首　一巻

播州姫路城主式部大輔忠次の撰なり。作者経基王、源満仲、源頼光、源頼信、源頼義、鎌倉右大臣、平泰時なとにはじまりて、良将世郎長慈照院義政公にをはる。それ〳〵にしるしあれども、しるしがたし。いづれも此撰は武家のあらましを見るべきにもあらず、これによりてをかしき事もなし。ほいなくみえしかど、作者もあまたあれど、万治庚子仲冬しるして刊行す。人のすてがたきあはれなくて、撰者の名をしるさず

藏笥百首　三巻　写本

刊行の撰者の名初はしるさず。此書ハ儒医真鍋忠菴の作なり。古人の歌百首をあげ、それ〴〵に児女子の教誡をしるしつけ、やさしく釈をくはへてあり。自序にいはく、人のむすめはおさなきより、まづ百人一首をならはしむる事、八代集のうちより、その道に堪能の歌をえらびて、これをならはしむるなり。さるにこのごろ、つたなき女子の行をすゝむる一助ともならんかとて、かくなん書つゞけ侍る。このゆゑに、母たる人、教へもしらず、ただ歌のこゝろをのみしりて、その心はしらず、をしへいましめをしらず、いたづらになる人多し。かくて名づけて藏笥といふ。○忠菴名ハ逸也。久留米の城主有馬君につかへ、京師に隠居し

菅家百首　写本　一巻

菅家御神詠七千首内秘歌百首しるして、九十八首なり

奥にあり右菅家の御詠にてそれに安楽寺の秘説とし○按ずる
に此百首の作全く延喜時代のものにハあらずたゞ近世の作と
作人のしわざなるべし伴にはいへども菅家の御作なるべき
ことはいぶかし○耳底記に云天神の御歌とていへども
なしぬしらずかくしやしかるし思ひ天神のことすゞしめ
なるべし古今まくさうたなし

堀河百首　二巻
堀河院御時基俊より初て已下十四人の百首なりこれを初度の百首とも太郎百首とも称す

堀河次郎百首　三巻
永久四年俊頼基俊已下七人の百首なりこれを後度百首とも称す

堀河百首肝要抄　四巻
此中一冊ハ序目録なりあとハ右百首のうちよりとりもちひてよき證歌となるべきうたのたぐひを百首ぬきい

だして肝要抄となづけり九條禅定殿下後京極の上旨は序
かくなる後○まさし説ども此よし貞徳自序よりけり○太
郎百首上下次郎百首一冊となりくちく巻首に細川幽斎秘
説貞徳謹誌とあり貞享改元年披露人懐字けり

藤川百首　一巻　京極黄門定家卿
此百首ハ定家卿老後に撰び給ひ基家にさづけたまふべき
ちかきしるしたまひしゆゑに給ひしまりし百首とこれ
ハ藤川なる首と称するハ八巻のはしのことばに
かのきこし其の藤川まことにものありよ下ちかひて
よ作るやうくいつるなり又難題百首とも四文字題の百首も
又續難百首ともいひくはしく作りてよめる時さいハ
古今集大綱をえ其をれおはんべのとき
このかせるの者にたしすしくあるはつんよる門よまれ
とのかくとならくよるたまへとくわれ者にハこのむ

不破の関にて旅ねせし定家卿のむかしの関路を
春よりせらく関白基方へ述懐の趣にて定家卿よまれし七十よ
りあまり昇進の縁もなき老の涙をもよほしたる物也

藤川百首抄　一巻　三本

一禅堂切臨の作なり元和五年四月の奥書あつて右百首
周桂の抄ハ三条西逍遙院入道堯空より代相伝なり柴屋
宗長抄月村斎宗碩抄兼載抄ハ自然斎宗祇より代伝あし
木戸正吉抄以上五部一覧しくらはしち是に似て非なる
説をなし異説古傳古今なとおほきにもれこれ抄の内を説
ろおせて相伝の一説これ抄にまさらしすぬをも正伝とこ判
形す

藤川五百首鈔　二巻

此五百首ハ定家にあらず　為定にて　安嘉門院四条にや　逍遙院
実隆公日記の百首抄にてつまびらかに定家卿のものにあらざることを辨せり

巻首より此百首の趣意ある所をのべたり作者何某しるす寛文七
年二月刻

藤川百首注　写本　一巻

此注ハ武者小路実陰公の門人泉州堺大安寺春山長老の説をば
それの門人栗山満光の述作なり宝暦六年の奥書あり

藤川百首部類　写本　一巻

此百首の題をもてあつめ九人の百首をかく　これ作者ハ
西三条実隆公　中院通茂公　霊元法皇　西三条公福卿
武者小路実陰公　冷泉為綱卿　烏丸光栄公　武者小路公野卿
冷泉為久卿

心敬難題百首　写本　一巻

応仁元年八月廿日法印心敬作なり何とて不知らるそこし藤川の
それ随ふくよめて大永七年正月下旬の奥書あり

鷹百首　二巻

西園寺公経公へ定家より贈れる百首に評を加へて定家の虎の尾
実雄卿より使はせし○梅か枝は蒙求臂鷹往来に西園
入道相家蟄居百首一冊 西園林にとらへの時書の書なるべし

五社百首 写本 一巻 俊成卿
伊勢 賀茂 春日 日吉 住吉 五社に奉納の百首なり
序は扶桑拾葉集にも載られたり

順徳院御百首 写本 一巻
定家卿家隆卿両点ありて 詞をとりて奉る
其御集の紫禁和歌草の外なり

土御門院御百首 写本 一巻
承久三年御よみそ合点詞は家隆卿なり

両院御百首 写本 一巻
上に載するしるした順徳院土御門院の両院の御詠を御合せなされしなり

忠度百首 一巻

薩摩守忠度俊成へ点をこはれたるなり 列中に誤多し

東関集し標せり

竹園三百首 写本 一巻
宗尊親王文応元年の御詠なり 当時名家の人々点あり
入道民部卿合点添削之詞墨 中務大輔言家点
西園寺入道常磐井相国実氏公点
内大臣基家公 九條殿なり 点并添削之詞朱
正二位行侍従行家卿点 光俊朝臣点
正二位衣笠内大臣家良点 奥書に曰以朱書者九條殿御点
府は往也 又云此御歌先年書写之処或人借失ふ 不足
従(?)沙弥生蓮に書写す

朗詠百首 写本 一巻 頓阿
春 夏 秋 冬 雑 祝 管絃 閑居 羇旅 述懐 餞別 恋 懐旧 無常 法文とつらねて 和漢朗詠 新撰朗詠等の句を題にして

よめる百首なり作者をしるさず奥書に壬生二品家隆卿云
沾や　通村

句題百首　写本　一巻

一名五玉集と称す五言の詩句題にてよめる五人の百首なり
作者ハ　頓阿法師　法印良守　大納言基家子　後拾遺　新後拾遺　作者
八撰むるの作者　权大僧都良春　猪熊大僧正為遠子　新後古今作者
頓宗　新拾遺新後古今作者　禅僧周嗣　新千載作者　已上五人也　点者頓阿
法のれし

百首部類　六十二巻

丹後守為忠家百首　六巻　宝治御百首　五巻
名所百首　三巻　正治後度百首　二巻
正治院百首　三巻　弘長百首　一巻
白川殿七百首　三巻　前宝治御百首　六巻
亀山殿七百首　三巻　嘉元仙洞御百首　七巻

五社百首　二巻　久安御百首　四巻
永享百首　三巻　延文御百首　十巻
将軍家百首　二巻
已上十五部　此外目録一巻あり

神

神道百首抄　二巻
巻首に小序ありていふ文明十八年正月十二日夜夢に風にふかれてかみさへつゝしうかれたれしよあまし旧冬灌頂の时ちなみへ百首のうたよみてかしこの心におもひ出て筆をとりてかきつらねおきぬ
ぞうりし　卜部兼邦云く○題ハ日月火水金木土天狭霧　國常立尊よりはじめて神の名をあげ末には天の神楽の採物　神皇実録内侍所の事を社壇神体等にいたるまで
作者卜部兼邦ハ天児屋根命より四十八世や系図に兼倶と

祈雨百首　写本　一巻

ほりしたく作者いまださだかならず　明暦二年七月刻　津守國久

住吉の社壇に雨祈られける時よまれける百首にして百題ことごとく
雨の字をむすばれたり 雨中立春 雨中子日 雨中霞 雨中早
衣 雨中月 雨中落葉 寄雨祝 寄雨神祇 寄雨祝なり
作者ハ津守宿祢國冬としるす

後福光園摂政百首 一巻

二條摂政前太政大臣良基公 観応三年八月二十八日の百首也
閑路古撰学しるす 頓阿 慶運 兼好に点をこひて 頓阿ハ墨点
慶運ハ朱点 兼好ハ圏点し 奥にかきつけたり ○此書刊
行の中のかよふ集拾遺の附録にのせたり

南都百首 写本 一巻 一条兼良公

兼良公応仁の乱をさけて南都におはしまし 時栖川なるその
ためにやまとの国の諸寺の名をよみ出されたる百首なり
自序あり 又此序ハ扶桑拾葉集にも載させたまへり 老のくりこと
門覚恵としるす 兼良公の法名なり 右百首一條禅閤

詠作也 自筆にしたまへる序あり 文明十五仲秋下旬

一日百首 写本 一巻 飛鳥井雅春卿

午天神法楽のために一日によまれたり

永正着到百首 五巻

写本ハ一巻刊本ハ五巻にわかてり 永正元年、年中着到のために作
者ハ右にあり 実隆公没後 作者の次第を綴て其余ならびに刊本の
巻首に作者家々の系図を附したるハ野村尚房の所為なり

宝永仙洞御着到百首 写本 一巻

宝永二年九月九日より十一月某日までの御着到なり 作者ハ
御製 通躬 通茂 淳房 実業 重條 雅豊 輝光 実陰
為信 公長 通夏 為久 公緒 光栄 已上十五人也

一人三臣御百首 写本 一巻

上ハ宝永の御百首の中より 霊元法皇 中院内
大臣通茂公 清水谷大納言実業 武者小路右中将実陰にて

のちぬ抜萃しておのし文化年中ゆへ人これを和すうもて
かくのけしとのかり一書をゆい遣一人三臣と侍ろそ和
欽者以岩倉侍具統て老の人へ古写即時按命半之

享保御着到百首 写本 一巻

享保五年九月九日より十二月二十日までの侍ちおし
作者ハ 院御製 公福 実陰 為信 光栄 雅季 通躬
おく人 公望 正上九人とし

澤菴和尚和泉百首 写本 一巻

澤菴和尚ハ品川東海寺の一代としく和歌ハ烏丸大納言光
廣卿の門人とえ和文ハ年わ山中に住く詠せしをとくそ
し巻末に十竹史しての澤庵の別号しけるそ光廣卿て合
点おとりりぬうえ奥に光廣卿の系わり

契沖富士百首 一巻

契沖阿闍梨富士とよめる百首し執筆を模写しく石

似雲
刻して世に行なる

似雲葛城百首 写本 一巻

似雲法師ハ武者小路実陰公の門人て近享元年葛城山の草庵
して一夏をむすふ同卯月廿五日より鎖閉し禅関より入りをいん
をふじ文月廿七日解関して開作の人物のごう百首し巻末
よ風早実積ての跋あり

新題百首 写本 一巻

五井蘭州川井立牧新題そまあらまれくしろ七新題と
称すこの八春宮怨なをの詩の題より胡ちち結ホの詠物題とい
ふまでいまだわすまよみあしきこの百題をはつ名すと

北邊七體七百首 一巻 富士谷成章

上古より近世にいたるまでよふひ変して歌の風體にかうしひ
よいかう創めて作をたてしよめるそくそれ諸体を

上古體 中古体 中季体 近昔体 末世体 當時体

自創作(ジサウテイ) 已上七作也 男成元校正(カウセイ)して寛政九年上木す 成元
ちかげの跋あり

玉鉾(タマホコ)百首　　一巻　　本居宣長

古学の大意を万葉集の古風によろしく人にさとさんとてよまれしを
よく十首の歌を解けり

玉鉾百首解　　二巻　　稲掛大平

大平ハ宣長の門人にしておやの名を宿祢(スクネ)信依 楫取房雄等の序あり

後(ゴ)撰(セン)百人一首　　一巻

此ハ普光園(フクワウヱン)摂政良基(ヨシモト)公元亨(コウ)正中の乱(ラン)より世の中さわがしくなりぬれバ
まかせたまひ小倉山二条の沈(シヅ)みたるをよくひきこもりたまひつゝ京
極中納言定家卿のむかし(コジ)をおぼしめしいでたまひ小倉百首になずらへ
て続(シヨク)百人一首をえらびいでたまひけるよしをかきそへ中に一首もしらざるかみ
口(クチ)ずさみにてたまふ中院関白照実(アキサネ)公(ニジヤウ)をえらびたまひしを今
按ずるに百人一首となりあまく人間に伝(ツタ)はるしるし 右ハ伝記(デンキ)の文

抄略(リャク)しるせし

貞徳頭書百人一首抄　　三巻　　加藤磐齋

本文のはじめより末まで趣(オモムキ)をかきそへ 巻末(カンマツ)に作者部類(ブルイ)を附し
まづ貞徳翁(テイトクヲウ)のかしら書をかゝげて下に我がおもふ所をもしるし 寛文
二年磐齋(バンサイ)の跋ありて其巻そへに大意七ヶ条をあげたり

百人一首抄　　三巻

作者をあらはさずこれハ上の磐齋(バンサイ)翁のおよそに注をそへ其大意
をとりてことさらにしるせし 寛文二年四月刻

百人一首解　　一巻　　栗本英暉

ひとつひとつ和歌をとりあげ徂徠(ソライ)翁の絶句解(ゼックカイ)にならひ
てそれぞれのいひざまことばづかひをくはしく注解(チウカイ)をもくはしくつくしたるや
まことにこゝろあさからずしてしるせし 宝暦六年の自序(ジジョ)あり

千首類

為家卿千首　写本　一巻

慈鎮和尚家隆の両点なり春の部より冬の部まで題あり恋雑の部闕なり○為家のもとにもしはしく不堪しく懈怠なんいできたれをかくては世にありても詮なし出家せんとおもひたちて日吉の社へまうでつゝ慈鎮和尚のもとにゆきて出家のこゝろざしをかたりまうされければ和尚大きにいさめたまひ○ともかくもおもはるゝ廿五歳のよしかたられけれどさてはいまだ是非のよしもしらず出家のことをとゞめ参らせて稽古の功をつくさせもうらもしたまへなとかたられけり教訓ありしく出家の本意をはとまり先五日の中に千首のうたよみてみよとおほせしかれば家隆立春のうたより十首をよく立春の題なるかはよいてきてよ

とてかれこれと紛しく家隆にもえせしへきよしやされたり
さくはよおふに道の宗匠となりく父祖のあとを継まほしく
おもはれけるにハまりて慈法和尚の仏まりたりけるによしを
名おもへしこの五月か中よりよみけて千そりに作りたる
るなるへし

師兼千首　写本　一巻
巻首に正二位行権大納言春宮大夫大学頭右京朝臣師兼と
あるハ南朝の人也○春二百首夏百首秋二百首冬百首恋二
百首雑二百首にしるく尋常の千首題なり　雑部の中地
水火風空に寄する哥常の題の歌五首なりて奥書に　路ハ篠　江ハ芦
籬ハ草　簷ハ忍草　岸ハ苔草　この五の題を挙て此千首ハ常五そ
以しく付ける也五色可謂盤也としけり

宗良親王千首　一巻
普通の千首題にてよませたまへり南朝の中務卿親王李花集
の作者なり此千首の奥書に
かきとゝもあたなりちらえけるのちよ何ともあされはいかに凡
はすはほかにつく信太杜千首とも号せり寛永十年烏丸光廣卿
奥書にみゆ

耕雲千首　一巻
南朝の中納言長親にて法名明魏又耕雲と号す○應永廿五
年の奥書あり此千首ハ愚僧四十年前所詠也云々

為尹千首　一巻
奥書に此末に有ける
とりみしるよみもまらぬかしほとないまた今此千首とあるを
應永廿二年十月十日とあり○為尹ハ冷泉為邦の子にて
權大納言正二位に在り應永四年に薨せらる

宋雅千首　一巻
應永廿七年十月十日の奥書に右聖廟法楽千首者愚老

一身一元傑也とぞ○宋雅ハ飛鳥井雅縁の法名也将軍御ゆるし
従二位権中納言にて出家宋雅といへり○刊本栄雅千首一名千題
和歌集とかけるハこのすれをちゝの宋雅千首也栄雅ハ雅縁の
孫雅親にての法名也栄の字宋の字に形の似たれバかくあや
まれるなるべし

文明千首　一巻

文明十三年九月一日着到千首なり作者実隆公政為なとを
はじめ都合十人也飛鳥井大納言入道点

千首部類　一巻

宗良千首　耕雲千首　為尹千首　宋雅千首　文明千首
これらを部類して小冊とすいづれも同題の千首也但し雑の部の
中十首の題異同ありて今なしといへども安永年中小澤芦庵跋を
加へて刻す

正徹千首　写本　一巻

此千首ハ組題ならず一條後関白兼良公徹書記の家の集草
根集の中より抜萃して正徹千首と号せしよしなりとぞ
一名草根集抜書ともいふ

牡丹花千首　三巻

写本ハ一巻也刊本ハ三巻にわかちて林家の奥書あれどもたし
かならず肖柏と定めがたきやうなるものなれバいぶかし
これを以てこれを肖柏の千首なるよしいひなし刊本の外題に
牡丹花家集とかけるも誤りなり家集ハ春夢草とて別に
三巻あり

天文千首　写本　一巻

天文十一年二月九日大神宮法楽百首かぞへて十組にしてよみ
第一の百首より第六の百首まで二月九日の法楽なり第七の百
首より第十の百首まで同十日の法楽なり奥書云官本申出令書
写手所望者三條大納言実枝卿筆跡也于時元和五暦仲冬

下句終切所也　左中将雅胤○雅嘉按ずるに千首の外外題の
写本もなく流布するものにして其巻頭の歌一首を附あぐ
以下六部の千首ハ年暦可考かたきによりて
立春　あらたまの年たちかへる朝より春やたつらん

慶長千首　写本　一巻
慶長十年九月十六日御当座普通の千首歌也　作者　後陽成院
知仁親王　素然　実條　雅庸　光廣　通村等三十六人之巻頭
立春朝　さほ姫のあまのかはらにたちそめてまつあらはるゝ春のけしきは

元禄千首　写本　一巻
元禄十四年九月廿一日大神宮御法楽千首也　作者ハ　霊元院
邦永親王　基熈　通誠　通茂　淳房　実業　通躬　為綱
氏孝　為久等三十七人也　巻頭のうた
立春朝　けさよりのひかりはさしてあまの戸の神代ながらの春はきにけり

貞享千首　写本　一巻
貞享三年五月十九日内侍所御法楽千首なり百首十組を
以て千首とす　第一妹河初春　第二　第三　第四
第五　第六　第七　第八　第九
第十　○第一より第十まで十九日法楽第十まで
廿日法楽也　巻頭のうた
立春　引かへしくもゐのはるのひかりよりけふくもりなき春はきにけり

享保千首　写本　一巻
享保　年月日可考　作者　院御製　家仁親王　職仁親王
通躬　公福　光栄　実陰　氏孝　為久　公野　為村等二十
一人也　此中中院通躬右中弁宣誠朝臣秋部の末乃比病死に依
て廿一内之作惟に冬部迄之を認むなり　巻頭のうた
立春朝　なかくてよをへきみるのはるけさもかならすはなさくへきはるかな

寛延千首　写本　一巻
寛延元年二月内侍所御法楽千首也　作者ハ　櫻町院

家仁親王 尚実 公雄 光胤 光綱 宗家 為村ホ之十
六人に題のこと
江之春朝 若みとり出る朝日もしらて千代の春やむかふらん

御撰千首 写本 一巻

は水尾院御自撰ましましゝは柏原院実隆公義政公なとより以後
武家門ホにいたりて秀逸のしるしは千二十八首のやうをえらませたま
つまりけりしちよ御えらひしの御製なとも五十餘首入させたまふよ
御名は圓浄法皇とかうかせり巻末にくわん爵里を附す
巻頭のこと 年内立春
むつきたつそらふかきひかりもいまはれんとしもれんけしとなつかしん

奉納千首 二巻

宝永六年九月平間長雅千首の題をいたしてちからをつくしいくたの
ことはあつめてくはえの神に奉納すへく有賀長伯序をかきて
て其趣意をのべたり

似雲十百首 写本 二巻

似雲法師洛城の庵室にかくれ住て花をめて月にうかれたる
ときはそよ百首の題十組をいて十百首の和歌をあつめ 風早実積
卿跋なしひとつの和歌の帖のまへにくはへたまへり

澄月千首 写本 一巻

岡崎の垂雲翁澄月晩年によめる奉納千首なり